

Oracle® Business Activity Monitoring

Enterprise Link 管理者ガイド

10g (10.1.3.1.0)

部品番号 : B31886-01

2007 年 1 月

Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link 管理者ガイド, 10g (10.1.3.1.0)

部品番号 : B31886-01

原本名 : Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Administrator's Guide, 10g (10.1.3.1.0)

Copyright © 2002, 2006 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（*redundancy*）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるとしてプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

	はじめに	v
	対象読者	vi
	表記規則	vi
	このマニュアルの構成	vi
	Copyright Information from Group 1 Software	vii
	サポートおよびサービス	viii
第 1 章 :	概要	1
	Oracle BAM Enterprise Link Admin の概要	2
	リポジトリの管理	2
	オブジェクト・プロパティの監視	3
	Oracle BAM Enterprise Link Server および Service の管理	3
	ユーザーおよびセキュリティの管理	4
	Oracle BAM Enterprise Link の構成	4
	構成についての考慮事項	4
	Oracle BAM Enterprise Link に関連付けられるデータベース	5
	Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成	6
	Oracle BAM Enterprise Link Admin の基本操作	7
	Oracle BAM Enterprise Link Admin のオープン	8
	リポジトリへの接続	8
	Oracle BAM Enterprise Link Admin のクローズ	9
第 2 章 :	リポジトリ管理	11
	リポジトリ管理の概要	12
	リポジトリの作成	12
	リポジトリ用の空のデータベースの作成	13
	リポジトリ表の作成とリポジトリ・データのロード	14
	リポジトリの登録	14
	リポジトリの登録解除	16
	リポジトリの再作成	17
	リポジトリの確認	17
	リポジトリ内のアイテムの表示	17

	リポジトリ・プロパティの表示	18
	リポジトリの登録内容または接続情報の変更	18
	リポジトリまたは Data Flow Service 接続情報の変更	19
	リポジトリのバックアップ	21
	リポジトリのクリーンアップ	21
	リポジトリの削除	24
	Snap 表のための BaseView の管理	25
	Snap 用の BaseView および MetaView の定義	25
	Snap 表の所有権の定義	26
	Snap 表のクリーンアップ	27
第 3 章 :	リポジトリ・オブジェクトの管理	29
	BaseView の管理	30
	BaseView のプロパティの表示	30
	BaseView のログインの設定	31
	BaseView サーバーまたはデータベース名の変更	35
	BaseView のデータ・ソース構成値の設定	36
	MetaView の管理	41
	MetaView のプロパティの表示	41
	MetaView の権限の設定	42
	プランおよび Snap の管理	44
	プランおよび Snap のプロパティの表示	44
	パブリック・ディスクリプションまたはパブリック・キーワードの変更	45
	プランおよび Snap の所有者の変更	46
	プランおよび Snap の監査	47
	プランのスケジュール・プロパティの表示	47
	プランのスケジュールの解除	48
	パブリッシュ / サブスクライブ・プロパティの表示と変更	49
	プランおよび Snap の削除	50
	Transform の管理	51
	Transform プロパティの表示	51
	新しい Transform の登録	52
	Transform の変更	54
	Transform の削除	55
第 4 章 :	Enterprise Link Server の管理	57
	Enterprise Link Server の Data Flow Service の概要	58
	Enterprise Link Server の追加	58
	Enterprise Link Server の登録	59
	Enterprise Link デーモンの起動 (Solaris ユーザーのみ)	61
	サービスの開始	61
	Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用したサービスの開始	61
	Windows の「コントロール パネル」からのサービスの開始	62
	NT/2000 でのサービスの自動開始	63
	サービス・ステータスの表示	63
	プランの停止	64
	サービスの停止	66

	Enterprise Link Server の削除	66
	サービスの無効化	67
	サーバーの登録解除	67
第 5 章 :	Data Flow Service の管理	69
	Data Flow Service の管理の概要	70
	Data Flow Service のパフォーマンス	70
	Data Flow Service キャッシュ	70
	Data Flow Service の空きキュー	72
	Data Flow Service のスワップ・ファイル	72
	Data Flow Service の設定	73
	Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用した設定の変更	77
	キャッシュのフラッシュ	79
	Data Flow Service のスワップ・ファイルの追加	80
	Data Flow Service のスワップ・ファイルのサイズ変更	81
	Data Flow Service のスワップ・ファイルの削除	81
	Data Flow Service の監視	82
第 6 章 :	ユーザーおよびセキュリティの管理	85
	ユーザーおよびセキュリティの管理の概要	86
	ロール	86
	グループ	88
	ユーザー	89
	ロールの管理	91
	ロールの作成と割当て	91
	ロールの変更	94
	ロールの削除	94
	グループの管理	95
	キャッシュ・グループの作成	95
	キャッシュ・グループの変更	96
	キャッシュ・グループの削除	97
	セキュリティ・グループの作成	97
	セキュリティ・グループの変更	99
	セキュリティ・グループの削除	99
	パブリッシュ / サブスクライブ・グループの作成	100
	パブリッシュ / サブスクライブ・グループの変更	101
	パブリッシュ / サブスクライブ・グループの削除	101
	ユーザーの管理	102
	ユーザーの作成	102
	ユーザー・テンプレートの作成	104
	Windows NT/2000 からのユーザーのインポート	105
	ユーザー・パスワード属性の設定	106
	プランまたは Snap の所有者の変更	107
	データベース・ログインへのユーザー・アカウントのマッピング	108
	ユーザー・オブジェクトの削除	108
	ユーザーの変更	109
	ユーザーの削除	109

付録 A:	構成およびチューニング	111
	Informix の構成	112
	Informix データベースの場所の定義	112
	Informix におけるロックされた表の構成	113
	Informix の BaseView の構成	114
	並列データ問合せの構成	114
	リポジトリとしての Informix の構成	115
	Oracle の構成	115
	Oracle8 のサポート	115
	Oracle7 のサポート	116
	Oracle 結合情報の取得	116
	BaseView に対する Oracle オプティマイザの構成	117
	Microsoft SQL Server の構成	117
	Save to Table の構成	117
	プランを実行するための接続の構成	118
	Sybase の構成	118
	Oracle BAM Enterprise Link で使用するための Sybase 10 の構成	118
	プランを実行するための接続の構成	119
	Red Brick の構成	119
	ODBC の構成	120
	ODBC データ・ソースの作成	120
	ODBC 接続	120
	SQL 問合せの最適化	124
	National Language Support の構成	124
	索引	127

はじめに

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [表記規則](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [サポートおよびサービス](#)

対象読者

このマニュアルは、システム管理者、データベース管理者、または Oracle BAM Enterprise Link のデータに関連する技術的なタスクを実行する情報サービス担当者を対象にしています。Oracle BAM Enterprise Link の管理者として、使用しているネットワーク環境を理解し、データベースおよびセキュリティの概念を熟知している必要があります。このマニュアルでは、Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーションを使用して、サーバーおよびリポジトリを管理し、データ・マートのセキュリティを維持する方法について説明します。

Oracle BAM Enterprise Link の管理者は、Oracle BAM Enterprise Link ソフトウェアのインストールも行います。クライアントおよびサーバーのインストール手順については、CD 内の『Oracle Business Activity Monitoring インストールレーション・ガイド』を参照してください。データベースからのデータの抽出、データ・マートへの移入、BaseView および MetaView の作成など、データ・マートをオンラインにするために必要な追加のタスクは、データ設計者が実行します。これらのタスクについては、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

管理者は、エンド・ユーザーの要件を理解するために、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link スタート・ガイド』も参照する必要があります。

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用しています。

- キーボード上のキーは、[Esc]、[Enter] などの名前で示されます。
- 入力するコマンドまたはマウスを使用してクリックする項目は、「**更新**をクリック」、「**yes** と入力」などのように太字で示されます。
- ユーザーが指定する必要があるマシン名やその他の変数は、**<machine name>** などのように示されます。山カッコ (<>) は入力しないでください。
- パス、ファイル名およびコードは、C:¥Enterprise Link などのように固定幅フォントで示されます。

このマニュアルの構成

このマニュアルでは、Oracle BAM Enterprise Link Admin の使用方法について説明します。このマニュアルは、システム管理者、および Oracle BAM Enterprise Link を管理する専門的なサービス担当者を対象にしています。

このマニュアルで示す手順では、ユーザーは Microsoft Windows NT/2000 および Sun Solaris Operating System を熟知していると想定しています。

このマニュアルの各章の概要は、次のとおりです。

- **第1章「概要」**では、Oracle BAM Enterprise Link Admin と、管理者が決定する必要がある項目について説明します。
- **第2章「リポジトリ管理」**では、リポジトリの管理に必要な情報について説明します。
- **第3章「リポジトリ・オブジェクトの管理」**では、BaseView、プランなどのオブジェクトの管理方法について説明します。
- **第4章「Enterprise Link Server の管理」**では、Oracle BAM Enterprise Link Server の管理方法について説明します。
- **第5章「Data Flow Service の管理」**では、Data Flow Service の管理方法と構成方法について説明します。
- **第6章「ユーザーおよびセキュリティの管理」**では、Oracle BAM Enterprise Link ユーザーの構成方法と管理方法について説明します。

Copyright Information from Group 1 Software

Information in this document is subject to change without notice. Companies, names and data used in examples herein are fictitious unless otherwise noted. No part of this document may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic or mechanical, for any purpose, without the express written permission of Group 1 Software, Inc.

Copyright 1996-2004 Group 1 Software, Inc. All rights reserved.

Trademark Notices:

Information Studio and Sagent are registered trademarks of Group 1 Software, Inc. The Sagent Logo, Sagent Design Studio, Flashcube, and StarMart are trademarks of Group 1 Software, Inc. All other trademarks are property of their respective companies.

Any provisions of the Sagent license related to ICU that differ from the IBM Public License 1.0 are offered by Sagent alone and not by any other party. The Source Code of the ICU program is available from Sagent upon written request. Further information regarding the ICU Program may be found at: <http://oss.software.ibm.com/icu/>.

You may make up to three copies of this publication, without the express written permission of Group 1 Software, for use at the authorized installation site. Reproduction and distribution outside of the licensed site is strictly prohibited. The contents of this Guide are subject to the confidentiality and non-disclosure provisions in your license agreement with Group 1 Software.

Group 1 products are warranted to perform as documented on hardware platforms running versions/releases of operating systems, subsystems, compilers, and facilities that are currently supported by their manufacturers. Please see your license agreement for additional details.

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

第 1 章

概要

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Oracle BAM Enterprise Link Admin の概要](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link の構成](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link Admin の基本操作](#)

Oracle BAM Enterprise Link Admin の概要

Oracle BAM Enterprise Link Admin は、統合された高性能な Enterprise Link 環境の一部であり、複数のソースからの情報の抽出、意思決定支援のための情報の最適化、およびビジネス・ニーズに応じた形式での情報の配信を行うツールを提供します。Oracle BAM Enterprise Link では、クライアント・アプリケーションを介するアクセス以外に、Web を介するアクセスが提供されます。Oracle BAM Enterprise Link アプリケーションは、必要に応じて、完全に分散させることも、集中させることもできます。Oracle BAM Enterprise Link のその他のコンポーネントの詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用すると、ユーザー・アカウント、ユーザー権限およびオブジェクト権限を完全に制御できます。新しい Oracle BAM Enterprise Link ユーザーの作成、リポジトリ・アカウントの外部データベース・ログインへのマップ、およびセキュリティ管理を容易にするグループとロールの定義を行うことができます。また、特定の MetaView と関連アイテムへのアクセス権を、ケースバイケースで定義することもできます。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Windows NT/2000 および Solaris サーバー上の Enterprise Link のアクティビティを管理できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin では、次の作業を集中管理の中で行うことができます。

- [リポジトリの管理](#)
- [オブジェクト・プロパティの監視](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link Server および Service の管理](#)
- [ユーザーおよびセキュリティの管理](#)

リポジトリの管理

Oracle BAM Enterprise Link 管理者として、Design Studio で作業できるユーザーを指定するリポジトリ・アカウントを作成します。リポジトリに BaseView および MetaView を作成するのは設計者ですが、これらのオブジェクトへのアクセス権を所有するユーザーを指定するのは管理者です。

Oracle BAM Enterprise Link Admin にリポジトリを登録する際に、Snap をデータベース表として格納するための BaseView も指定します。

詳細は、[第2章「リポジトリ管理」](#)を参照してください。

オブジェクト・プロパティの監視

プロパティ・シートには、オブジェクトの所有者、作成日および最終更新日が表示されます。Oracle BAM Enterprise Link Admin では、次のオブジェクトのプロパティ・シートを使用できます。

- リポジトリ
- BaseView
- MetaView
- プランおよび Snap
- Transform
- ユーザー、グループおよびロール
- サービス

プロパティ・シートの情報を使用して、リポジトリ・アイテムの使用状況を監視したり、期限切れのアイテムを特定できます。

詳細は、[第3章「リポジトリ・オブジェクトの管理」](#)を参照してください。

Oracle BAM Enterprise Link Server および Service の管理

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Oracle BAM Enterprise Link Server および Data Flow Service を管理できます。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Oracle BAM Enterprise Link Server に対して次の作業を実行できます。

- 変更
- 新規登録
- サーバーの登録解除

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Data Flow Service に対して次の作業を実行できます。

- 開始および停止
- サービス構成の変更
- スワップ・ファイルの定義
- サービスのステータスの監視

Data Flow Service の機能には、複数の問合せ、複雑な問合せの構成要素などのタスクの分割化、およびセクションの同時実行が含まれています。この組み込み式のマルチスレッディングおよびマルチタスキングのサポートによって、複数のタスクを並行して実行できます。

Oracle BAM Enterprise Link Server の詳細は、[第4章「Enterprise Link Server の管理」](#)を参照してください。

Data Flow Service の詳細は、[第5章「Data Flow Service の管理」](#)を参照してください。

ユーザーおよびセキュリティの管理

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用すると、ユーザー・アカウント、ユーザー権限およびオブジェクト権限を完全に制御できます。実行可能な作業は次のとおりです。

- Oracle BAM Enterprise Link ユーザーの新規作成
- リポジトリ・アカウントの外部データベース・ログインへのマップ
- セキュリティ管理を簡素化するためのグループおよびロールの定義
- 特定の MetaView と関連アイテムへのアクセス権のケースバイケースによる定義

詳細は、[第 6 章「ユーザーおよびセキュリティの管理」](#) を参照してください。

Oracle BAM Enterprise Link の構成

Oracle BAM Enterprise Link の様々な構成要素は、ネットワーク内のマシン全体に完全に分散させたり、1 台のマシンにすべてをインストールすることができます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [構成についての考慮事項](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link に関連付けられるデータベース](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成](#)

構成についての考慮事項

Oracle BAM Enterprise Link の構成では、次の項目について、場所およびセキュリティを考慮します。

- [Oracle BAM Enterprise Link に関連付けられるデータベース](#)
- Oracle BAM Enterprise Link Server
- Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーション
- Oracle BAM Design Studio アプリケーション

Oracle BAM Enterprise Link を構成する前に、次の項目を理解しておく必要があります。

- ローカル・ネットワーク環境
- リポジトリおよびその他の必要なデータ・ソースに接続するデータベース・クライアント・ライブラリ
- データベース・ベンダーのツールを使用した、空のリレーショナル・データベースの作成方法
- ユーザー、グループ、アクセス権限などの一般的なセキュリティ概念と、これらの概念をユーザーに適用する方法

Oracle BAM Enterprise Link をどのように実装するかは、現行の構成と、情報アクセスの目的によって異なります。たとえば、すでにデータ・マートまたはデータ・ウェアハウスとして構成され、OLAP の使用に最適になるように設計されたデータベースを所有している場合があります。あるいは、いくつかの OLTP データベースはあるが、目的は OLAP 用に個別のデータベースを所有することである場合があります。Oracle BAM Enterprise Link は、ほとんどのニーズに適応できます。

Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成の詳細は、[6 ページの「Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成」](#)を参照してください。

Oracle BAM Enterprise Link に関連付けられるデータベース

表 1 に、Oracle BAM Enterprise Link に関連付けられるデータベースのリストを示します。

表 1: 関連付けられるデータベース

データベース	説明
リポジトリ	BaseView、MetaView、メタデータなど、Enterprise Link 固有の情報をすべて格納します。
データ・マート	Design Studio からのデータ・ユーザー・アクセスを格納します。データ設計者は、Design Studio、またはデータをロードするカスタム・スクリプトを使用して、データ・マート・データベースを読み込みます。
Snap	リレーショナル表として、問合せ結果 (Snap) を格納します。これは、オプションです。詳細は、 25 ページの「Snap 表のための BaseView の管理」 を参照してください。
ソース	データ・マートにロードするデータが含まれています。ソース・データベースは、データ・マートを実装する前に存在する必要があります。

Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成

Oracle BAM Enterprise Link は、集中型の構成および完全分散型の構成の両方に対応するように設計されています。Oracle BAM Enterprise Link のコンポーネントは、使用する企業のニーズに応じてインストールできます。

この柔軟性を例に示しながら、次の項では可能な構成について説明します。

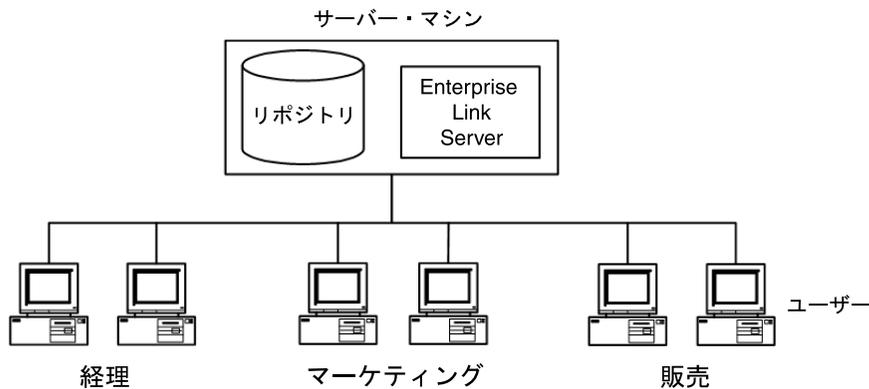
- 集中型の構成
- 分散型の構成

集中型の構成

集中型の構成（[図 1](#) を参照）では、Oracle BAM Enterprise Link Server はリポジトリが存在する同一マシンで動作します。Oracle BAM Enterprise Link Server は、複数のスレッドを生成して、複数のクライアントからのリクエストに対応します。集中型の構成を採用した場合、Oracle BAM Enterprise Link Server とリポジトリ間の通信は、すべてローカルで行われます。

結果はサーバー・マシンにキャッシュされ、すべてのユーザーが共有できます。グループ間のセキュリティは、キャッシュ・グループを定義することで提供されます。

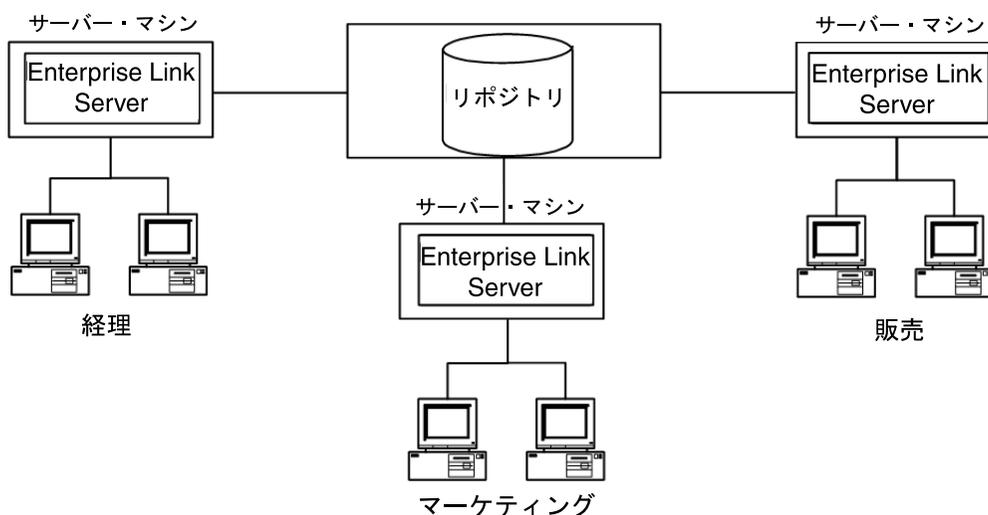
図 1: 集中型の構成



分散型の構成

分散型の構成（図 2 を参照）では、複数の Oracle BAM Enterprise Link Server が複数のサーバー・マシンで動作し、クライアントは特定のサービスに割り当てられます。各 Oracle BAM Enterprise Link Server は、ネットワークを介してリポジトリ・データベースと通信を行い、ユーザーのサブセットのリクエストに対応します。分散型の構成には高速ネットワークが必要ですが、集中型の構成よりも多くのユーザーに対応するという点でスケーラブルです。

図 2: 分散型の構成



分散型の構成では、複数のサーバー・マシンで共有するキャッシュはありません。それぞれのユーザー・グループは、キャッシュ結果から自動的に遮断されます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin の基本操作

次の項では、Oracle BAM Enterprise Link Admin の基本操作について説明します。

- [Oracle BAM Enterprise Link Admin のオープン](#)
- [リポジトリへの接続](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link Admin のクローズ](#)

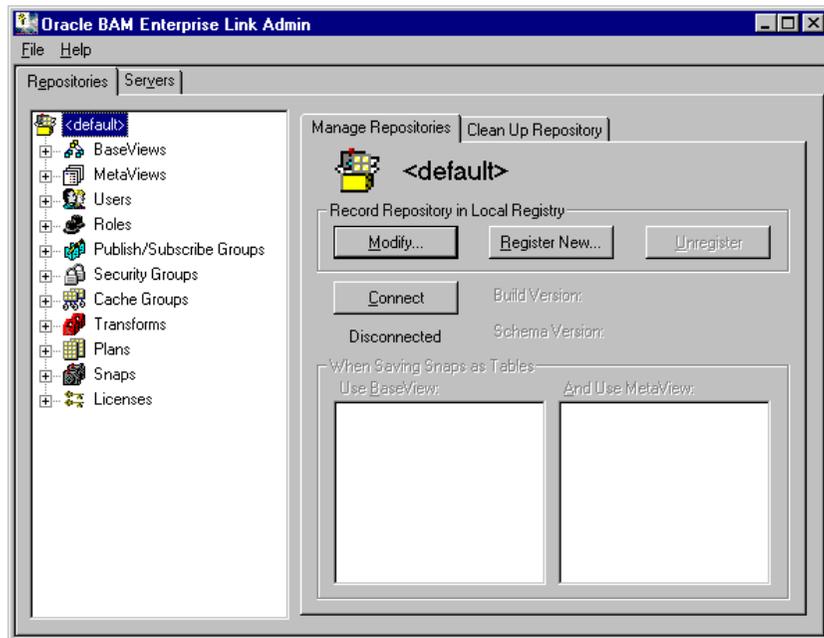
Oracle BAM Enterprise Link Admin のオープン

Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンするには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle BAM Enterprise Link」→「Admin」を選択します。

Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーションが表示されます。

ツリー・コントロールに、アイテム・カテゴリと、名前付きの既存アイテムが表示されます。リストを開いたり、閉じたりするには、アイテム・カテゴリをダブルクリックします。ツリー・コントロールでアイテムを選択すると、プロパティ・シート領域にそのプロパティが表示されます。



2. 8 ページの「リポジトリへの接続」に進みます。

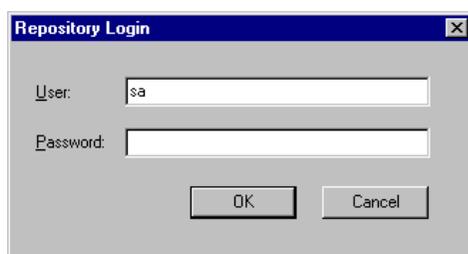
リポジトリへの接続

Oracle BAM Enterprise Link Admin セッションを開始しても、自動的にはリポジトリ・データベースに接続されません。

リポジトリに接続するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」タブのツリーから、リポジトリを選択します。

3. 「Manage Repositories」 タブで「Connect」をクリックするか、またはツリー・コントロールで一般カテゴリをダブルクリックします。
「Enter Repository Password」 ダイアログ・ボックスが表示されます。



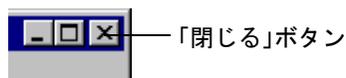
4. ログイン・ダイアログ・ボックスには、Oracle BAM Enterprise Link 管理者ユーザーの名前が表示されています。デフォルトのユーザー名は sa です。必要に応じて、パスワードを入力します。
5. 「OK」をクリックして、リポジトリにログインします。

注意： sa ユーザーは、デフォルトの Oracle BAM Enterprise Link 管理者ユーザーです。Oracle BAM Enterprise Link Admin へのアクセスを制限するために、このアカウントのパスワードをすぐに設定してください。手順については、[109 ページの「ユーザーの変更」](#)を参照してください。Oracle BAM Enterprise Link 管理者の詳細は、「[Enterprise Link 管理者 \(sa\) アカウント](#)」および [90 ページの「ユーザー・アカウントに対する Enterprise Link 管理者権限」](#)を参照してください。

Oracle BAM Enterprise Link Admin のクローズ

Oracle BAM Enterprise Link Admin を終了するには、次のいずれかを実行します。

- Oracle BAM Enterprise Link Admin ウィンドウの右上にある「閉じる」ボタンをクリックします。



- 「File」 → 「Exit」を選択します。

リポジトリ管理

リポジトリは、メタデータと、Oracle BAM Enterprise Link に固有の情報のためのデータベースです。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [リポジトリ管理の概要](#)
- [リポジトリの作成](#)
- [リポジトリの再作成](#)
- [リポジトリの確認](#)
- [リポジトリのバックアップ](#)
- [リポジトリのクリーンアップ](#)
- [リポジトリの削除](#)
- [Snap 表のための BaseView の管理](#)

リポジトリ管理の概要

リポジトリは、メタデータと、Enterprise Link 固有のオブジェクトが格納されているデータベースです。リポジトリは、ユーザーが Oracle BAM Design Studio を実行する前に、存在している必要があります。リポジトリ用にサポートされている RDBMS ベンダーおよびバージョンについては、『Oracle Business Activity Monitoring インストール・ガイド』を参照してください。

インストール中に、初期リポジトリを作成します。追加のリポジトリを作成すると、情報を個別に保持できます。

インストール・プログラムでは、リポジトリに対して次の処理が実行されます。

- リポジトリ・データベースの作成
- リポジトリ表の作成
- 業務系データの表へのロード
- デフォルトのユーザー・アカウントの作成

注意： リポジトリ・データベースを直接変更すると、データが異常になり、リポジトリを使用できなくなる可能性があります。リポジトリ・データまたはリポジトリ表を直接変更すると、アイテムが表示されなくなったり、ユーザーがアイテムへアクセスしようとした際にエラーが表示されるようになる可能性があります。

リポジトリでは、各クライアント・マシンの小容量のキャッシュを使用したアイテムの格納が可能です。ユーザーが所有またはサブスクライブしている現行の MetaView、プランなどのオブジェクトは、迅速に取得されるように、クライアントのキャッシュに格納されます。オブジェクトがリポジトリに保存されるのは、ユーザーがプラン、Snap または Transform を Bin にドラッグした場合のみです。

リポジトリの作成

リポジトリを作成するには、空のデータベースを作成してから、インストール・プログラムを実行します。インストール・プログラムによって、データベースに関する情報の入力が必要で、リポジトリ表、業務系データおよびデフォルトのユーザーとロールが、カンマ区切り値 (CSV) ファイルからロードされます。

リポジトリ・データベースが Oracle データベースである場合は、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、すべての Oracle BAM Enterprise Link ユーザーを同じデータベース・ログインとパスワードで構成することをお勧めします。

テスト・システムから本番システムに情報を移動したり、既存のリポジトリのコピーを作成できるようにするため、追加のリポジトリを作成します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- リポジトリ用の空のデータベースの作成
- リポジトリ表の作成とリポジトリ・データのロード
- リポジトリの登録
- リポジトリの登録解除

リポジトリ用の空のデータベースの作成

リポジトリ・データベースは、サポートされている任意のデータベースに作成できます。リポジトリ用にサポートされている RDBMS ベンダーおよびバージョンについては、『Oracle Business Activity Monitoring インストール・ガイド』を参照してください。

リポジトリ用のマシンは堅牢であり、複数の同時ネットワーク接続をサポートできる必要があります。最高のパフォーマンスを得るには、リポジトリは、そのユーザーと同じネットワーク上に存在する必要があります。新しいユーザーおよび新しいデータをサポートするには、リポジトリ・データベースとマシンの両方を拡張できる必要があります。

リポジトリ・データベースに割り当てる領域の容量は、次の項目によって異なります。

- ソース・データのサイズ
- リポジトリがサポートするユーザーの数
- リポジトリに格納されるアイテムの数およびサイズ

インストールでは、リポジトリ・データベースに表およびメタデータが作成されます。リポジトリにアクセスするすべてのデータベース・ユーザーに、リポジトリ・データベースで `select`、`insert`、`update` および `delete` 操作を行う権限を付与する必要があります。オブジェクトは、データベース・トランザクションとしてリポジトリに書き込まれるため、データベースのログをクリーンアップするようにデータベースを構成する必要があります。たとえば、Microsoft SQL Server の場合、その設定は「チェックポイント時のログ切り捨て」です。Oracle の場合、ログは自己管理されます。Oracle SRANT の場合は、適切なリソースも付与する必要があります。

データベースとオブジェクトの所有権が適切であることを保証するために、インストールで使用するものと同じログインを使用してデータベースを作成します。リポジトリにアクセスするすべての Oracle BAM Enterprise Link ユーザーは、このログインで作成される表にアクセスする必要があります。Informix、Sybase および Microsoft SQL Server の場合は、sa データベース・ログインの使用をお勧めします。Oracle の場合は、ユーザーに、データベースの作成に使用したのと同じログインを割り当てます。

リポジトリ表に対する `select` 操作の権限を付与する場合は、注意が必要です。`select` 操作の権限を持つユーザーは、ネットワーク上の任意の SQL クライアントからリポジトリ表の内容を表示できます。リポジトリのパスワードは暗号化されますが、アクセスを制限することをお勧めします。

空のリポジトリ・データベースを作成するには、次の手順を実行します。

1. データベース・ベンダーのツールを使用して、40MB 以上のリレーショナル・データベースを作成します。
2. データベースを作成したログインを記録しておきます。このログインは、インストール中に使用します。また、このログインによって、データベースとオブジェクトの所有権が適切であることが保証されます。
3. 表に対して select、insert、update および delete 操作を行うための権限をユーザーに付与します。
4. 14 ページの「リポジトリ表の作成とリポジトリ・データのロード」に進みます。

リポジトリ表の作成とリポジトリ・データのロード

空のデータベースを作成した後に、リポジトリ表を作成し、必要なデータをロードする必要があります。

リポジトリ表を作成し、データをロードするには、次の手順を実行します。

1. インストール・プログラムを実行します。
2. 「**Build Repository**」オプションを選択します。
3. インストール・プログラムによって、リポジトリ・データベースに関する次の情報の入力が必要です。

データベース・タイプ	Informix、Microsoft SQL Server、Oracle、DB2、Sybase などのデータベース・タイプ
リポジトリ・データベース / データベース別名	作成したリポジトリ・データベースの名前 (Oracle リポジトリの場合は不要)
サーバー名	リポジトリが格納されているサーバーの名前
ログイン名	リポジトリの作成に使用したログイン
パスワード	リポジトリの作成に使用したパスワード

これで、空のリポジトリが作成されました。Design Studio の起動時に、ユーザーの BaseView および MetaView を作成する必要があります。詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

リポジトリの登録

リポジトリを登録するとリポジトリ別名が作成され、ローカル・レジストリに情報が格納されてリポジトリを構成および管理できるようになります。この別名は、登録されているリポジトリを参照するために、他の Oracle BAM Enterprise Link アプリケーションで使用できます。

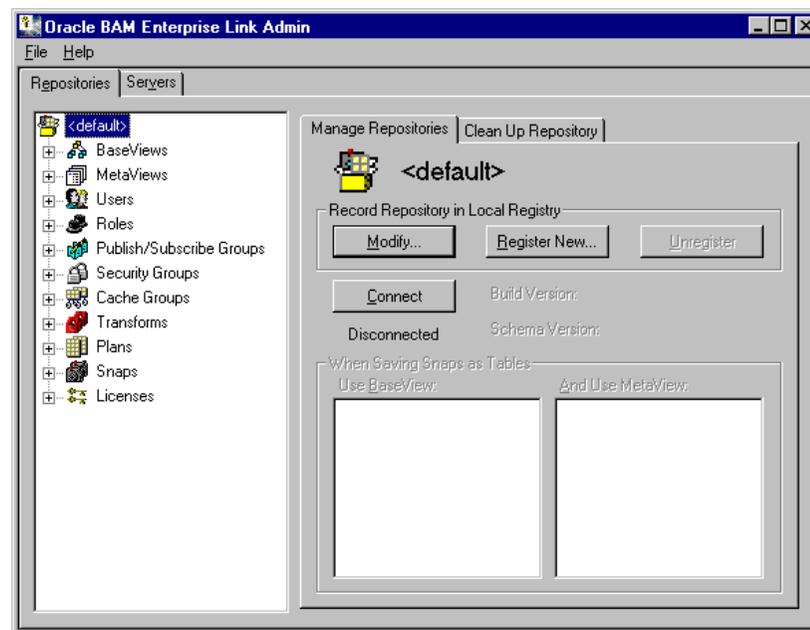
インストール中に、インストール・プログラムによってリポジトリが作成されます。通常、このリポジトリの名前は <default> です。Oracle BAM Enterprise Link Admin の起動時には、<default> リポジトリはすでに登録されています。

追加のリポジトリを作成する場合は、そのリポジトリを Oracle BAM Enterprise Link Admin に登録する必要があります。登録すると、リポジトリ・データベースへの接続に必要な情報がローカル・レジストリに格納され、Oracle BAM Enterprise Link Admin からリポジトリを構成および管理できるようになります。登録されたリポジトリの名前が、Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーションのツリー・コントロールに表示されます。

新しいリポジトリを Oracle BAM Enterprise Link Admin に登録するには、次の手順を実行します。

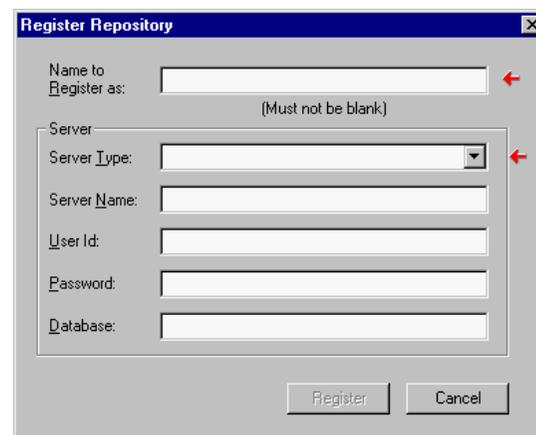
1. 「Repositories」タブをクリックします。
2. ツリー・コントロールで、<default> リポジトリをクリックします。

「Manage Repositories」プロパティ・シートが表示されます。



3. 「Register New」をクリックします。

「Register Repository」ダイアログ・ボックスが表示されます。



4. 「Name to Register as」フィールドに、リポジトリの名前を入力します。これは、ローカル・レジストリに作成されるリポジトリ別名の名前です。
5. 「Server Type」ドロップダウンから、リポジトリをホストするサーバーのタイプを選択します。
ダイアログ・ボックスの「Server」セクションのフィールドは、選択したサーバーのタイプによって異なります。
6. 次のフィールドに、リポジトリ情報を指定します。

フィールド	説明
Server Name	データベースが格納されているマシンの名前を入力します。 このフィールドは、サーバーが SQL Server、Sybase および Informix の場合に表示されます。
「User Name」 または 「User Id」	データベース・ユーザー名を入力します。このアカウントには、リポジトリ・データベース表に対して create、insert、update、delete および drop 操作を行う権限が付与されている必要があります。指定するユーザー名およびパスワードは、デフォルトのアクセス・アカウントでもかまいません。たとえば、Oracle データベースの場合は、system/manager の組合せです。 このフィールドは、サーバーが SQL Server、Sybase、Informix、Oracle および DB2 の場合に表示されます。
Password	データベースのパスワードを入力します。 このフィールドは、サーバーが SQL Server、Sybase、Informix、Oracle および DB2 の場合に表示されます。
Database	データベースの名前を入力します。 このフィールドは、サーバーが SQL Server、Sybase および Informix の場合に表示されます。

7. 「Register」をクリックします。

リポジトリが登録され、Oracle BAM Enterprise Link Admin のツリー・コントロールに表示されます。

リポジトリの登録解除

リポジトリを登録解除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin のツリー・コントロールで、リポジトリ名をクリックします。
2. 「Manage Repositories」タブで、「Unregister」をクリックします。

リポジトリの再作成

リポジトリが破損した場合など、リポジトリの再作成が必要になることがあります。

再作成する前に、リポジトリのバックアップを作成しておくことをお薦めします。リポジトリを再作成すると、プラン、Snap、MetaView、BaseView など、すべてのオブジェクトが失われます。

リポジトリを再作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Build Repository」 オプションを選択して、インストール・プログラムを実行します。
2. 再作成する既存のリポジトリが指定されていることを確認します。

インストール・プログラムによって、自動的にリポジトリ表が削除され、新しい表とデータがロードされます。

詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring インストレーション・ガイド』を参照してください。

リポジトリの確認

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [リポジトリ内のアイテムの表示](#)
- [リポジトリ・プロパティの表示](#)
- [リポジトリの登録内容または接続情報の変更](#)
- [リポジトリまたは Data Flow Service 接続情報の変更](#)

リポジトリ内のアイテムの表示

リポジトリを最初に Oracle BAM Enterprise Link Admin に登録すると、リポジトリ名とリポジトリ・アイテム・カテゴリのリストがツリー・コントロールに表示されます。アイテム・カテゴリを開くと、リポジトリの既存アイテムのリストが表示されます。

リポジトリのアイテムを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」 タブを選択します。
3. ツリー・コントロールで、リポジトリの名前を選択します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。
5. 表示するオブジェクトを選択するか、そこまでドリルダウンします。

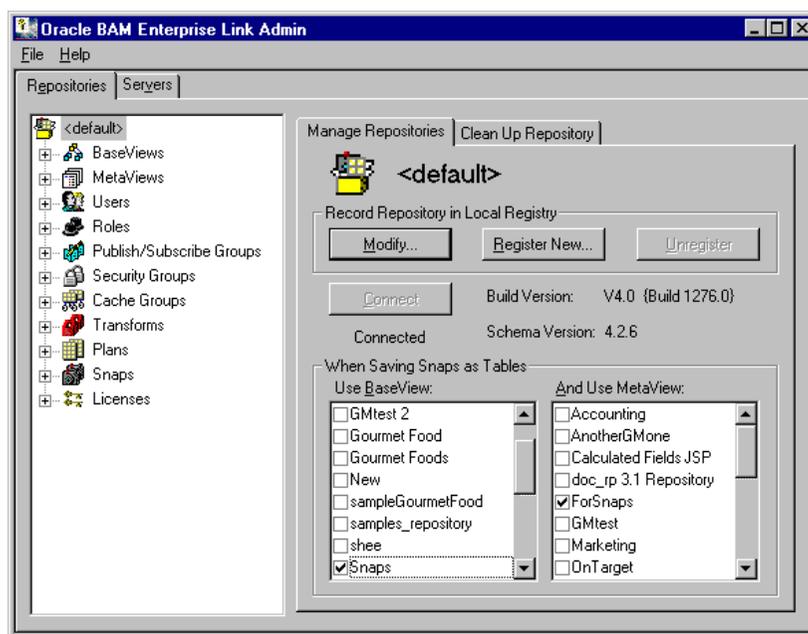
リポジトリ・プロパティの表示

リポジトリの一般プロパティおよび接続プロパティを表示できます。
リポジトリ・プロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. ツリー・コントロールで、プロパティを表示するリポジトリの名前をクリックします。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

ビルド・バージョン、スキーマ・バージョン、Snap 表を格納するための BaseView と MetaView など、リポジトリのプロパティ情報が表示されます。



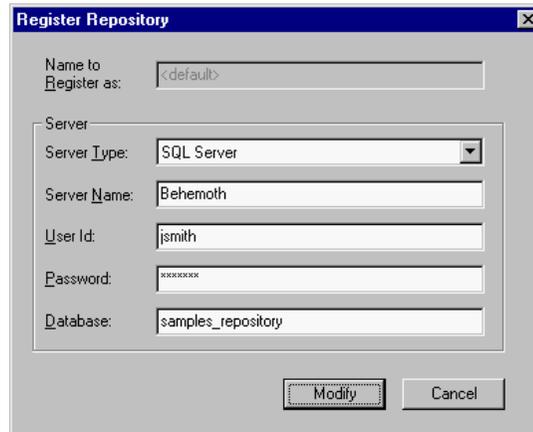
リポジトリの登録内容または接続情報の変更

リポジトリ情報を確認していると、適切に動作させるために、値の変更が必要になる場合があります。

登録内容または接続情報を変更するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。

3. ツリー・コントロールで、プロパティを表示するリポジトリの名前をクリックします。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
5. 「Modify」をクリックします。
「Register Repository」ダイアログ・ボックスが表示されます。



このダイアログ・ボックスの「User ID」（「User Name」）および「Password」の値は、リポジトリ・データベースの作成に使用したものです。

6. ダイアログ・ボックス内の値を変更します。
7. 「Modify」をクリックして、変更をローカル・レジストリに適用します。

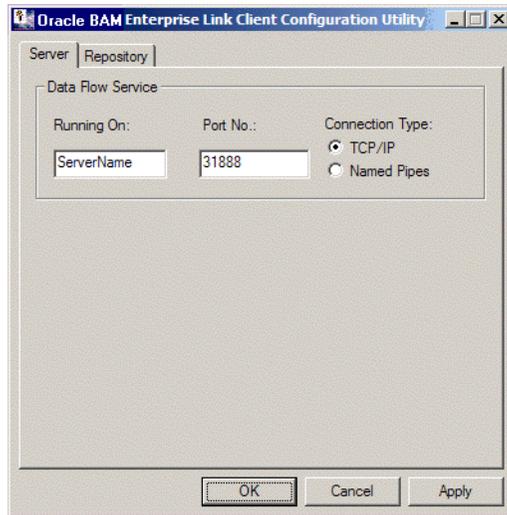
リポジトリまたは Data Flow Service 接続情報の変更

ネットワークに複数のリポジトリまたは Data Flow Service がある場合は、saconfig.exe を使用して、マシンが指しているリポジトリを変更できます。このリポジトリの変更は、このマシンの他の Oracle BAM Enterprise Link アプリケーションが使用するリポジトリに影響を与えます。また、Oracle BAM Design Studio のログイン・ダイアログ・ボックスにある「Advanced」ボタンでもリポジトリを変更できます。「Advanced」ボタンの詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

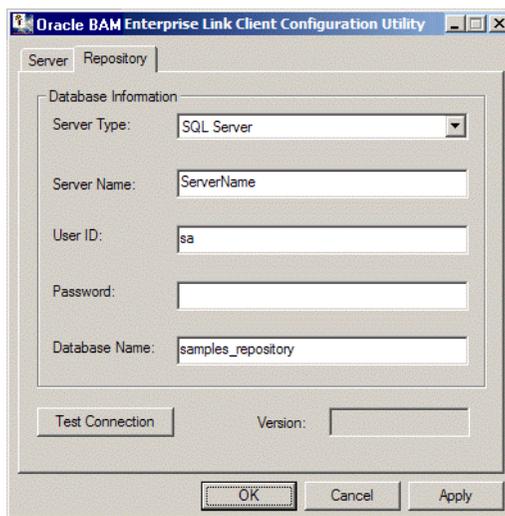
saconfig を使用するには、次の手順を実行します。

1. saconfig.exe を検索します。
2. saconfig.exe をダブルクリックするか、または Windows NT/2000 の「ファイル名を指定して実行」ダイアログ・ボックスで saconfig と入力します。

「Oracle BAM Enterprise Link Client Configuration Utility」ダイアログ・ボックスが表示されます。



3. Data Flow Service を実行しているサーバー・マシンの名前を入力します。
4. Data Flow Service のポート番号を入力します。
5. 「TCP/IP」または「Named Pipes」を選択します。
6. 「Oracle BAM Enterprise Link Client Configuration Utility」ダイアログ・ボックスの「**Repository**」タブをクリックします。



7. ドロップダウンからサーバーのタイプを選択します。
8. 「Server Name」フィールドに、新しいリポジトリを格納するサーバーの名前を入力します。
9. 「User ID」フィールドに、データベース・ユーザー名を入力します。
10. データベース・ユーザー・パスワードを入力します。
11. 「Database Name」フィールドに、新しいリポジトリの名前を入力します。
12. 「OK」をクリックして、変更を適用します。

「Oracle BAM Enterprise Link Client Configuration Utility」の「Server」タブで、別の Data Flow Service に変更できます。

リポジトリのバックアップ

リポジトリは、定期的にバックアップすることをお勧めします。リポジトリのバックアップ頻度は、そこに含まれているデータの量、データの変更頻度、およびリポジトリのリストアがどれくらい困難かによって異なります。ほとんどのリポジトリでは、週次バックアップが最適です。

他の本番データベースの場合と同様に、データベース・ベンダーのバックアップ・ユーティリティを使用して、リポジトリをバックアップします。

リポジトリのクリーンアップ

リポジトリでは、削除用にマーク付けされたアイテムを定期的にクリーンアップする必要があります。クリーンアップは、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して実行したり、スケジュールに沿って実行するように構成できます。リポジトリをクリーンアップすると、リポジトリが占有しているデータベース領域の容量が減少し、パフォーマンスが向上します。

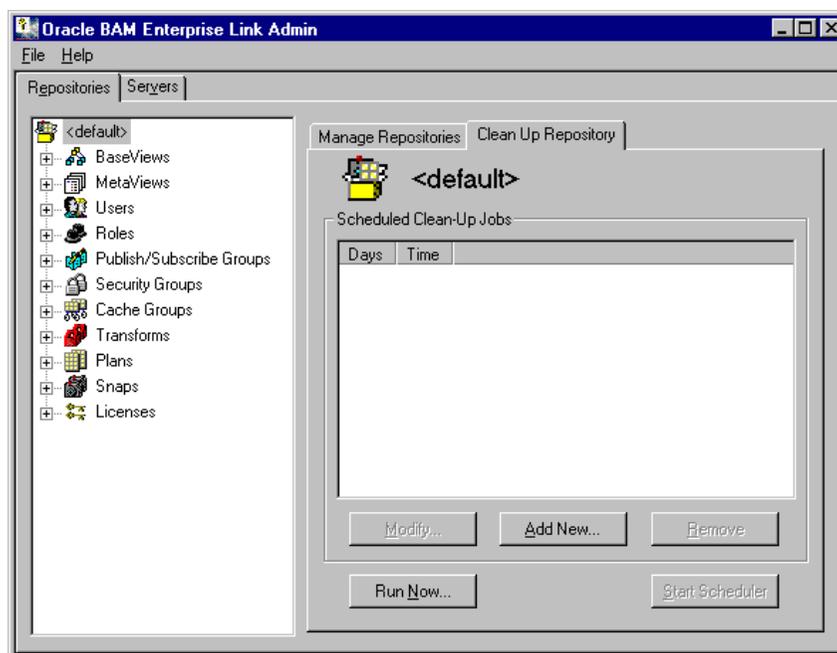
クリーンアップ・プログラムは、マーク付けされたアイテムをリポジトリで検索し、それらを削除します。プラン、Snap などのアイテムをユーザーが削除すると、削除されたアイテムはワークスペース、ステージング領域または Bin には表示されなくなります。ユーザーは、このアイテムを表示できなくなります。このアイテムは、削除用のマークが設定されたプログラムのビットが指定された状態で、リポジトリに引き続き保持されます。クリーンアップ・プログラムの実行によって削除されるのは、ディスクに保存されているマーク付きのアイテムのみです。アイテムをごみ箱に移動している場合は、ごみ箱を空にして、リポジトリから削除するためのマークをアイテムに付ける必要があります。

パフォーマンスおよびアクセスの理由から、リポジトリのクリーンアップは使用率が低い時間帯に行うようにスケジュールする必要があります。

注意： クリーンアップされたアイテムは、完全に削除されます。クリーンアップ操作を実行する前に、リポジトリをバックアップしてください。

リポジトリを即時にクリーンアップするには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」 タブを選択します。
3. クリーンアップするリポジトリの名前を選択します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「[リポジトリへの接続](#)」を参照してください。
5. 「Clean Up Repository」 タブを選択します。

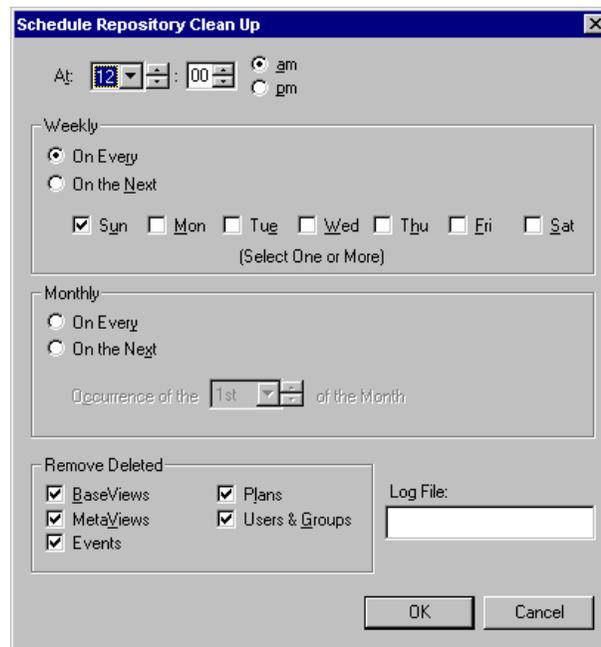


6. 「Run Now」 をクリックします。
「Run Repository Clean Up」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 「OK」 をクリックします。
「Enter Repository Password」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
8. リポジトリのパスワードを入力します。
SARPDEL が実行されます。クリーンアップ処理が完了すると、Oracle BAM Enterprise Link Admin に戻ります。

クリーンアップをスケジュール設定するには、次の手順を実行します (Windows NT/2000 ユーザーのみ)。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」 タブを選択します。
3. クリーンアップするリポジトリの名前を選択します。

4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
5. 「Clean Up Repository」タブを選択します。
6. 必要に応じて、「Start Scheduler」をクリックします。
プロパティ・シートに、現在スケジュール設定されているクリーンアップ・ジョブの日時が表示されます。
7. 「Add New」をクリックします。
「Schedule Repository Clean Up」ダイアログ・ボックスが表示されます。



8. クリーンアップ操作を実行する時間を選択します。
リポジトリのパフォーマンスを考慮して、クリーンアップは使用率の低い時間に行うようにスケジュールします。
9. クリーンアップを実行する頻度を定義します。

スケジュール設定	Weekly	Monthly
1 回かぎりのクリーンアップ	「On the Next」ラジオ・ボタンを選択してから、曜日を選択します。	「On the Next」ラジオ・ボタンを選択してから、日付を選択します。
定期的なクリーンアップ	「On Every」ラジオ・ボタンを選択してから、曜日を選択します。	「On Every」ラジオ・ボタンを選択してから、日付を選択します。

10. 削除するオブジェクトのタイプを選択します。

- BaseViews
- MetaViews
- Plans
- Users & Groups

注意: Snap は、リレーショナル表として Snap データベースに格納されるため、個別にクリーンアップする必要があります。詳細は、[27 ページの「Snap 表のクリーンアップ」](#)を参照してください。

11. ログ・ファイルのフルパスまたはファイル名のみを入力します。

デフォルトでは、ログ・ファイルは C:\Program Files\Oracle BAM Enterprise Link に作成されます。

ログには、リポジトリのクリーンアップの開始時間と終了時間、および削除された各オブジェクト・タイプの数記録されます。

ログ・ファイルを指定しない場合、ログ出力は、クリーンアップ・ジョブの実行中に表示される画面のウィンドウにのみ表示されます。

12. 「OK」をクリックして、クリーンアップ・ジョブをスケジュールに追加します。

スケジュール設定されたクリーンアップ・ジョブは、Oracle BAM Enterprise Link Admin の「Clean Up Repository」タブに追加されます。

クリーンアップ・コマンド (sarpdel) およびクリーンアップ・パラメータが Microsoft AT Scheduler に渡されます。AT Scheduler によって、指定された時間にリポジトリのクリーンアップが実行されます。

リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、対話型 SQL ツールのコマンドラインから、すべてのリポジトリ表を削除します。リポジトリ表を削除するには、SARP_* という形式の名前の表に対して、DROP TABLE 文を実行します。

リポジトリ・データベースに含まれているのがリポジトリ表のみの場合は、対話型 SQL ツールから DROP DATABASE 文を実行して、リポジトリを削除できます。この 1 つの文によって、リポジトリ表およびリポジトリ・データベースが削除されます。

リポジトリを削除するには、次の手順を実行します。

- すべてのリポジトリ表を削除するには、使用しているデータベースの管理ツールを使用します。
 - リポジトリ表を削除するには、SARP_* という形式の名前の表に対して、DROP TABLE 文を実行します。
 - リポジトリ・データベースに含まれているのがリポジトリ表のみの場合は、DROP DATABASE 文を実行して、リポジトリ表とリポジトリ・データベースを削除します。

Snap 表のための BaseView の管理

Snap とは、プランの結果として保存されるデータです。Snap を使用すると、指定した日付に実行した問合せのデータを保存できます。Snap BaseView を使用すると、Snap を保存できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin にリポジトリを登録した後、Snap 表を格納するための BaseView を指定する必要があります。このリポジトリのユーザーが Snap を保存すると、この Snap は、BaseView に関連付けられているデータベースにリレーショナル表として格納されます。Snap 表用に、個別のデータベースまたはデータベース領域を作成することをお勧めします。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Snap 用の BaseView および MetaView の定義](#)
- [Snap 表の所有権の定義](#)
- [Snap 表のクリーンアップ](#)

ユーザーが Design Studio で Snap を作成し、それを Snap Bin にドラッグすると、リレーショナル・データベース表として保存されます。その後で、ユーザーまたはプログラムは、Snap 表に対して問合せを実行できます。Snap 表は共有したり、履歴データに素早くアクセスするために使用できます。

Snap をワークスペースにドラッグし、変更してから Snap Bin に戻すと、変更された Snap は新しい Snap 表として保存されます。表はこのように作成されるため、Snap 表のための領域を準備して管理する必要があります。

インストール・プログラムでは、Snap MetaView が自動的に作成および指定されますが、Design Studio ユーザーは Snap BaseView を作成する必要があります。

Snap 表を分離しておくこと、他のデータに影響を与えることなく、領域および権限を簡単に割り当てることができます。

Snap 表の管理の詳細は、[44 ページの「プランおよび Snap の管理」](#)を参照してください。

Snap 用の BaseView および MetaView の定義

Snap 表用の BaseView および MetaView を指定するには、次の手順を実行します。

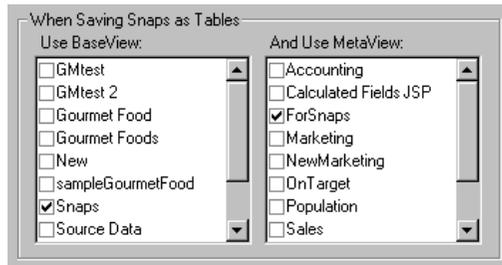
1. Snap データベースが存在していることを確認します。
2. BaseView が Oracle BAM Design Studio を使用して定義されていることを確認します。
3. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
4. リポジトリの名前を選択します。

- 必要に応じて、Oracle BAM Enterprise Link 管理者としてリポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

- 「Use BaseView」リストから、BaseView を選択します。

注意：Snap 表用に指定できる BaseView は、リポジトリごとに1つのみです。



- 「And Use MetaView」リストから、MetaView を選択します。

この変更は、Design Studio の再起動時に適用されます。

Snap 表の所有権の定義

リポジトリ・アカウントを他のログインにマップするまでは、すべての既存リポジトリ・ユーザーに、その Snap BaseView へのアクセス権があります。マップされたログインのセキュリティに対する影響については、[第6章「ユーザーおよびセキュリティの管理」](#)を参照してください。

Snap 表に別の所有者を指定するには、次のいずれかの方法を使用します。

- Oracle BAM Enterprise Link Admin で新しいデータベース・ログインを作成し、ユーザーをそのログインにマップします。

ユーザーを新しいログインにマップする方法については、[31 ページの「BaseView のログインの設定」](#)を参照してください。

- Design Studio で BaseView を作成する際に、表の所有権にデータベース・ログインを指定します。

BaseView の作成時に所有者のログインを作成する方法については、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Oracle BAM Enterprise Link Admin で BaseView ログインを作成する際に、表の所有権にデータベース・ログインを指定します。

Oracle BAM Enterprise Link Admin での BaseView ログインの作成時に所有者のログインを作成する方法については、[32 ページの「BaseView データベースのログインの指定」](#)を参照してください。

注意： Snap BaseView 用に指定するデータベース・ログインには、基礎となるデータベースで表を作成する権限を持っている必要があります。

デフォルトの表所有権スキームを使用する場合は、Snap 表に対するアクセス制限があります。表に対して select 操作を実行できるのは所有者と管理者ユーザーのみであるため、Snap を保存したが、その Snap 表を所有していないユーザーは、後で、この表に対し select 操作を実行することはできません。

表所有権スキームを変更する場合は、Snap 表に対して問合せを実行する必要があるユーザーと、アクセスを許可する必要があるユーザーについて考慮します。Microsoft および Sybase の SQL Server データベースの場合、データベース管理者 (dbo) によって所有されている表に対しては、どのユーザーも問合せを実行できます。Microsoft または Sybase データベースの BaseView を Oracle BAM Enterprise Link 管理者が作成した場合は、すべてのユーザーがすべての Snap 表を表示できます。ただし、表所有権が明示的に定義されている場合を除きます。

Snap 表のクリーンアップ

ユーザーは、Snap 表を作成できますが、削除することはできません。Oracle BAM Enterprise Link 管理者は、Snap データベースの領域を管理し、表内のデータが現行のものであることを確認する必要があります。

Snap 表には、SNAP<id> という名前が付いています。id は、作成日に基づく 16 進数です。

ある Snap の表を特定するには、次の手順を実行します。

1. Snap をワークスペースにドラッグします。
2. ワークスペース・パネルをプルダウンして、データ・フロー・エディタを表示します。
3. 「SQL Query step」をダブルクリックします。
「Query Editor」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「SQL Viewer」タブを選択します。

FROM 句によって、このスナップのリレーショナル表が特定されます。

データベース・ベンダーが、表に最後にアクセスした日時を特定する手段を提供していたり、監査証跡を使用できる場合は、その情報を使用して、表が期限切れになった日時を特定することもできます。

期限切れになった Snap 表が検出された場合は、使用しているデータベースのツールを使用して、その表を削除します。

リポジトリ・オブジェクトの管理

この章では、MetaView セキュリティの設定、新しい Transform の登録、BaseView 設定の変更など、オブジェクトのプロパティを変更する方法について説明します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [BaseView の管理](#)
- [MetaView の管理](#)
- [プランおよび Snap の管理](#)
- [Transform の管理](#)

BaseView の管理

BaseView とは、データベース内の物理的な表のメタデータ表現です。この物理的なデータ・モデルは、MetaView の定義における起点になります。

データ設計者が、Design Studio で BaseView を作成、変更および削除します。Oracle BAM Enterprise Link Admin で、BaseView のプロパティを表示したり、そのログインを設定できます。登録済のすべてのリポジトリの BaseView は、自動的に Oracle BAM Enterprise Link Admin に表示されます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [BaseView のプロパティの表示](#)
- [BaseView のログインの設定](#)
- [BaseView サーバーまたはデータベース名の変更](#)
- [BaseView のデータ・ソース構成値の設定](#)

BaseView のプロパティの表示

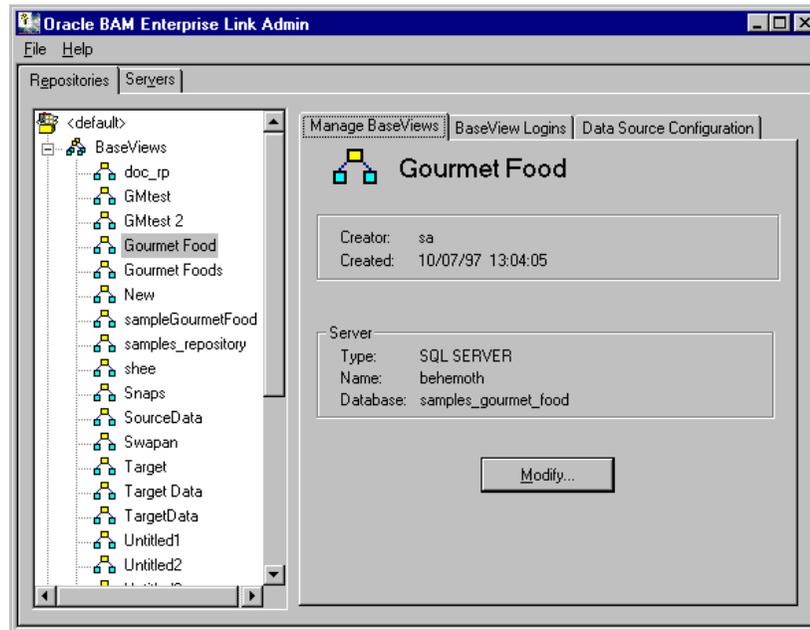
Oracle BAM Enterprise Link Admin に登録されているリポジトリ内の BaseView については、いずれのプロパティも表示できます。

BaseView のプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. 「**BaseViews**」をダブルクリックして、既存の BaseView を表示します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

5. BaseView の名前を選択します。

「Manage BaseViews」タブに、プロパティ情報が表示されます。



6. BaseView のその他のプロパティを表示するには、別のタブを選択します。

BaseView のログインの設定

BaseView へのアクセスは、BaseView のログインによって判断されます。BaseView から作成された MetaView が表示可能であっても、基礎となるデータベースからデータを取得するには、ユーザーは BaseView のログインにマップされている必要があります。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- BaseView データベースのログインの指定
- データベース・ログインの Oracle BAM Enterprise Link ユーザー・アカウントへのマッピング

マップされたログインとセキュリティについては、108 ページの「データベース・ログインへのユーザー・アカウントのマッピング」を参照してください。

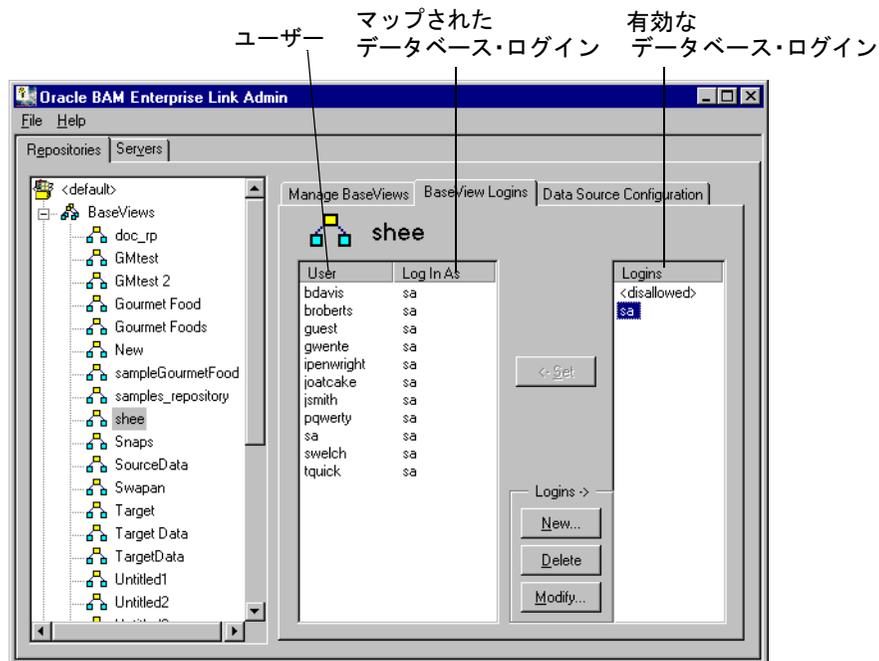
BaseView データベースのログインの指定

新しい BaseView には、有効なログインが 1 つあります。BaseView が作成されると、そのログインによって、適切なデータベース・アクセスと権限が検証されます。デフォルトでは、既存の Oracle BAM Enterprise Link ユーザー・アカウントがこのログインにマップされます。

データベースへのアクセスを制限するには、追加のログインを指定して、それをユーザーにマップします。

データベースのログインを指定するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリの名前を選択します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。
5. 必要に応じて、リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
6. 「**BaseViews**」をダブルクリックして、既存の BaseView を表示します。
7. BaseView の名前を選択します。
8. 「**BaseView Logins**」タブを選択します。



9. 「New」をクリックします。

「Create Login」ダイアログ・ボックスが表示されます。

10. ユーザーのログイン名を入力します。

11. 「Use Standard Connection」または「Use Trusted Connection」を選択します。

12. 「Use Standard Connection」の場合は、次の項目に対して入力または選択を行います。

「User Id」	有効なユーザー名を入力します。例 : scott
Password	ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。 例 : tiger
Same as User Id	表を作成したユーザーが、必ずその所有者になる場合に選択します。 表の所有者が異なる場合は選択を解除します。
Other	可能な場合は、作成された表を所有するユーザー名を入力します。 注意: リポジトリ・データベースには、所有権のマッピングがすでに設定されていることを確認してください。

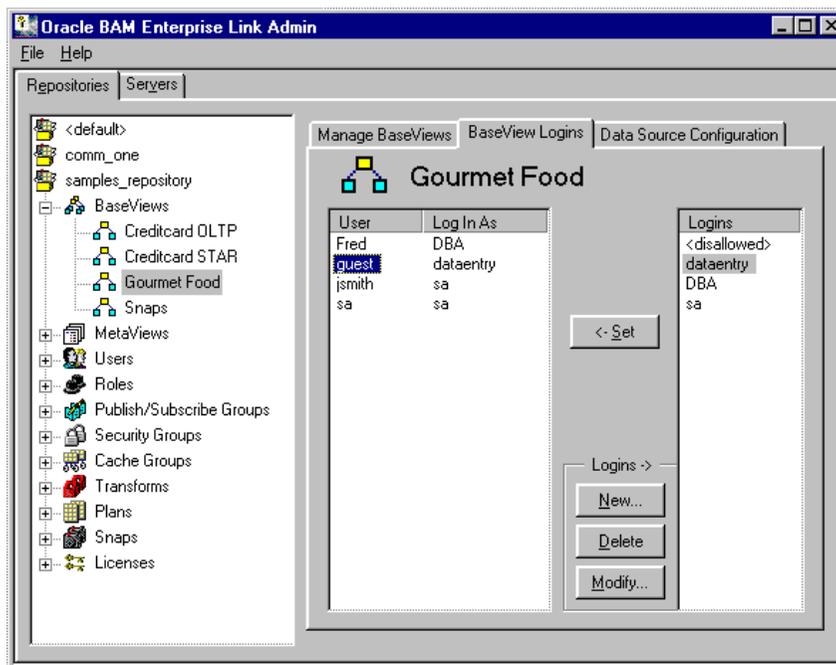
13. 「OK」をクリックします。

データベース・ログインの Oracle BAM Enterprise Link ユーザー・アカウントへのマッピング

データベース・ログインを Oracle BAM Enterprise Link ユーザー・アカウントにマッピングすると、そのユーザーには、BaseView および関連データベースへのアクセス権が付与されます。ログインおよびユーザー・アカウントをマッピングすると、個々データベースにログインしなくても、Oracle BAM Design Studio で BaseView を開くことができますようになります。

ログインをマップするには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリの名前を選択します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「[リポジトリへの接続](#)」を参照してください。
5. 必要に応じて、リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
6. 「BaseViews」をダブルクリックして、既存の BaseView を表示します。
7. BaseView の名前を選択します。
8. 「**BaseView Logins**」タブを選択します。
9. 「Logins」列から、有効なログインを選択します。
データベース・ログインのリストへの追加については、32 ページの「[BaseView データベースのログインの指定](#)」を参照してください。
10. 「User」列から、リポジトリのユーザー名を選択します。
11. 「Set」をクリックします。



これで、このユーザーに対応する「Log In As」列にデータベース・ログインが表示されます。

BaseView サーバーまたはデータベース名の変更

データベースおよびサーバー名は、BaseView を再作成しなくても変更できます。

BaseView のプロパティを変更するには、次の手順を実行します。

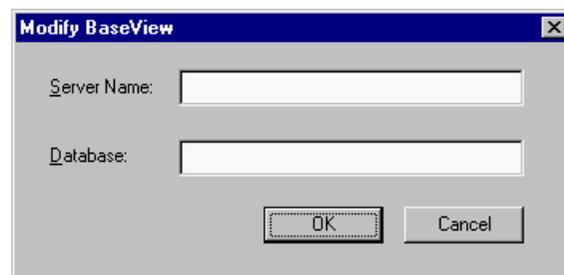
1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. 必要に応じて、リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「**BaseViews**」をダブルクリックして、既存の BaseView を表示します。
5. BaseView の名前を選択します。
6. 必要に応じて、リポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

「Manage BaseViews」タブに、プロパティ情報が表示されます。

7. 「**Modify**」をクリックします。

「Modify BaseView」ダイアログ・ボックスが表示されます。



8. 新しいサーバー名またはデータベースを入力します。
9. 「**OK**」をクリックします。
10. BaseView のプロパティを変更した後で、Data Flow Service のキャッシュをフラッシュします。詳細は、[79 ページの「キャッシュのフラッシュ」](#)を参照してください。
11. 新しいデータベースの表の所有者が、以前のデータベースの表の所有者と異なる場合は、Oracle BAM Design Studio で BaseView エディタを開き、表のプロパティ・シートで所有者名を変更します。

BaseView のデータ・ソース構成値の設定

データ・ソース構成の設定から、特定のデータベース・タイプに適した SQL 構文を生成するための情報が得られます。Oracle BAM Enterprise Link では、プランの実行時に、この情報が使用されます。デフォルトの設定は、BaseView で使用するデータベースのタイプによって異なります。これらの設定は、BaseView ごとに確認または変更できます。

データ・ソース構成のデフォルト設定は、データベースに格納されている情報、またはクライアント・マシンのレジストリ設定に格納されている情報から生成されます。設定は、BaseView とともにリポジトリに保存されます。

Oracle、Sybase、Microsoft、Red Brick および Informix のデフォルトの設定は、ほとんどの場合で適切に機能します。ODBC 対応の BaseView では、特別な環境でカスタマイズされた設定を活用できます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- データ・ソース構成の設定
- データ・ソース構成の設定の変更

注意： これらの設定の変更には、注意が必要です。設定は、BaseView における問合せパフォーマンスおよびデータの整合性に影響します。

データ・ソース構成の設定

データ・ソース構成の設定は、設定がファイルに保存され、Microsoft レジストリにインポートされる場合を除き、特定の BaseView を対象に定義され、適用されます。表 2 に、データ・ソース構成の設定および値の説明を示します。

表 2: データ・ソース構成

設定	説明	値
BetweenJoinsSupported	データベースで、between 結合をサポートします。	「Yes」または「No」
CancelSupported	データベースで、実行中の SQL 文の取消しをサポートします。	「Yes」または「No」
CaseSensitiveSort	データベースで、大/小文字を区別したソートをサポートします。	「Yes」または「No」
CompoundSQLMaxLength	複合 SQL 文における文字の最大長。	整数
CompoundSQLPrefix	複合 SQL 文の開始文字列。	文字列
CompoundSQLProcess Results	複合 SQL 文で 1 つ以上の結果セットを戻すことを許可します。	「Yes」または「No」
CompoundSQLSeparator	複合 SQL 文で SQL 文を区切る文字列。	文字列
CompoundSQLStmtsPer Block	複合 SQL 文でデータベースが許可する SQL 文の最大数。	整数

表 2: データ・ソース構成 (続き)

設定	説明	値
CompoundSQLSuffix	複合 SQL 文の終了文字列。	文字列
CompoundSQLSupported	データベースで、複合 SQL 文をサポートします。 複合 SQL 文で許可される SQL のタイプについて、これらのビット・マスク・フラグを使用します。数値を組み合わせて、複合 SQL 文で許可されるコマンドを指定します。	0 ~ 255 すべて —255 なし —0 Insert—1 Select—2 Update—4 Create—8 Drop—16 Alter—32 Delete—64
ConcurrentQueriesAllowed	データベースで、同一プロセスの 2 つのスレッドによる同時問合せをサポートします。	「Yes」または「No」
ConnectionsAreThreadSafe	あるスレッドで作成された接続を、その接続が終了した後、別スレッドに使用することをデータベースでサポートします。	「Yes」または「No」
DataDictionaryType	BaseView のデータ・ディクショナリ・タイプ。	文字列
DBMSName	データベース・ベンダーの名前。	文字列
DBMSVersion	データベースのバージョン。	文字列
DBMSSortStyle	データ・ソースのソート・スタイル。デフォルト設定は、「DFSSortStyle」です。	DFSSortStyle Lexical Binary Other
DriverName	ODBC ドライバの名前。	文字列
FieldNamesAreCase Sensitive	データベースで、大 / 小文字を区別したフィールド名をサポートします。	「Yes」または「No」
FullOuterJoinsSupported	データベースで、完全外部結合をサポートします。	「Yes」または「No」
GroupbyExpressions Supported	データベースで、式のグループ化をサポートします。	「Yes」または「No」
GroupbyPositionSupported	データベースで、位置ごとのグループ化をサポートします。	「Yes」または「No」
IndexesSupported	データベースで、表索引の作成をサポートします。	「Yes」または「No」
LeftOuterJoinSupported	データベースで、左側外部結合をサポートします。	「Yes」または「No」
MaxFieldNameLength	フィールド名の文字の最大長。	整数
MaxInClauseItems	WHERE 句の IN セクションにおけるアイテムの最大数。	整数

表 2: データ・ソース構成 (続き)

設定	説明	値
MaxStatementLength	SQL 文における文字の最大長。	整数
MaxTableAliasLength	表の別名における文字の最大長。	整数
MaxTableNameLength	表の名前における文字の最大長。	整数
NullsFirst	ソート順序の最上位を NULL 値にします。	「Yes」または「No」
OuterInFromClause	SQL 文の FROM 句に外部結合が含まれます。 許可される外部結合構文について、値として示されているビット・マスク・フラグを使用します。数値を組み合わせて、外部結合で許可される構文を指定します。 注意: Informix 外部結合を適切に機能させるには、この設定を 128 になるように設定する必要があります。	0 ~ 128 該当なし =0 FROM 句 =1 WHERE 句 =2 ON 句を使用 =4 結合しない =8 ODBC 接続 =16 複数の外部結合を許可 =32
QuotedAliasedFieldName	引用符付き tablealias.field 文字列のデータベースでの必須形式。	例: %1.%2
QuotedAliasedTableName	引用符付き tablealias 文字列のデータベースでの必須形式。	例: %1
QuotedQualifiedFieldName	引用符付き qualified.owner.table.field 文字列のデータベースでの必須形式。	例: %1.%2.%3.%4
QuotedQualifiedTableName	引用符付き qualified.owner.table 文字列のデータベースでの必須形式。	例: %1.%2.%3
RepositorySupported	データベースで、リポジトリをサポートします。	「Yes」または「No」
RightOuterJoinsSupported	データベースで、右側外部結合をサポートします。	「Yes」または「No」
SaveToTableSupported	データベースで、Save to Table シンクおよび Snap をサポートします。	「Yes」または「No」
ServerInfoVersion	データ・ソース構成のバージョン。	整数
SQLConcatenationSupported	データベースで、結合 SQL 文をサポートします。	「Yes」または「No」
SynonymsAreRelevant	データベースで、SQL 文のシノニムをサポートします。	「Yes」または「No」
SystemTablesAreRelevant	データベースで、システム表をサポートします。	「Yes」または「No」
TableDisplayName	表のデフォルトの表示名の作成に使用される形式。	例: %2.%3
TableNameOwnerIsCaseSensitive	データベースで、大 / 小文字を区別した表名の所有者をサポートします。	「Yes」または「No」

表 2: データ・ソース構成 (続き)

設定	説明	値
TableNameOwnerIs Relevant	表の所有者は、修飾される表名に関連します。	「Yes」または「No」
TableNameQualifierIs Case Sensitive	データベースで、大/小文字を区別した表名の修飾子をサポートします。	「Yes」または「No」
TableNameQualifierIs Relevant	表の修飾子は、修飾される表名に関連します。	「Yes」または「No」
TableNameTables Case Sensitive	データベースで、大/小文字を区別した表名をサポートします。	「Yes」または「No」
TransactionsSupported	データベースで、トランザクションをサポートします。	「Yes」または「No」
TrustedSecuritySupported	データベース・サーバーは、認証ログインとして NT/2000 セキュリティ認証をサポートします。	「Yes」または「No」
Type1JoinsSupported	データベースで、内部結合、および外部結合の内部側として使用される表を伴う問合せをサポートします。	「Yes」または「No」
UnquotedAliasedFieldName	tablealias.field 文字列のデータベースでの必須形式。	例： %1.%2
UnquotedQualifiedFieldName	qualified.owner.table.field 文字列のデータベースでの必須形式。	例： %1.%2.%3.%4
UnquotedQualifiedTableName	qualifier.owner.table 文字列のデータベースでの必須形式。	例： %1.%2.%3
ViewsAreRelevant	データベースで、ビューの概念をサポートします。	「Yes」または「No」

データ・ソース構成の設定の変更

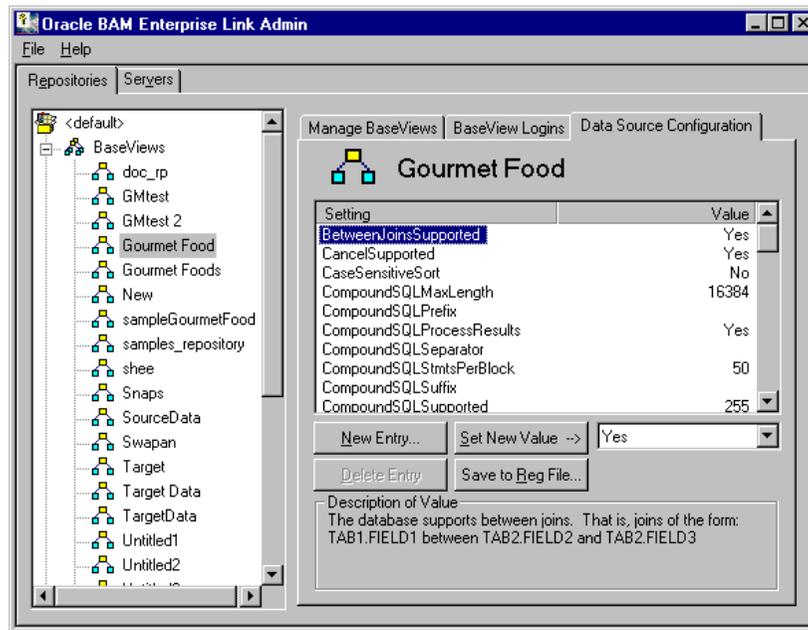
36 ページの表 2 に示したデータ・ソース構成の設定は、変更することができます。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して設定した値は、その設定の定義時に対象にした特定のオブジェクトにのみ適用されます。

新しいデータ・ソース構成値を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブをクリックします。
2. 必要に応じて、リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
3. 「**BaseViews**」をダブルクリックして、既存の BaseView を表示します。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「[リポジトリへの接続](#)」を参照してください。
5. BaseView の名前を選択します。

「Manage BaseViews」タブが表示されます。

6. 「Data Source Configuration」タブを選択します。
構成の設定が、デフォルト値で表示されます。



7. 変更する設定の名前を選択します。
設定名がハイライトされ、その現行値が「Set New Value」フィールドに表示されます。この設定のテキストによる説明が、プロパティ・シートの下
部に表示されます。
8. 「Set New Value」フィールドに新しい値を入力し、「Set New Value」をク
リックします。
データ・ソース構成の設定に対する新しい値が、「Value」列に表示されま
す。この値は、その BaseView 用としてリポジトリにすぐに保存されます。
9. 「Save to Reg File」ボタンをクリックすると、現行の設定を個別のレジスト
リ・ファイルに保存できます。これは、任意です。レジストリ・ファイル
を保存しておくで、同じデータ・ソース構成の設定を、別のクライアント・
マシンで新しく作成したすべての BaseView に適用できます。

「Save Settings in Registry File」ダイアログ・ボックスが表示されます。



10. ファイルを保存するディレクトリを参照して、ファイルの名前を入力します。
11. 保存したファイルまで移動して、そのファイルをダブルクリックし、このマシンのレジストリに設定を登録します。また、別のマシンにファイルをコピーし、そのレジストリに設定を登録することもできます。

MetaView の管理

MetaView は、1 つ以上の BaseView 内のデータの表現です。MetaView は、リポジトリに格納されている情報のビジネス・ビューを提供します。

MetaView は、Design Studio で作成、変更および削除します。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、MetaView のプロパティを表示し、MetaView の権限を設定します。Oracle BAM Enterprise Link Admin には、登録されているすべてのリポジトリの MetaView が自動的に表示されます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [MetaView のプロパティの表示](#)
- [MetaView の権限の設定](#)

MetaView のプロパティの表示

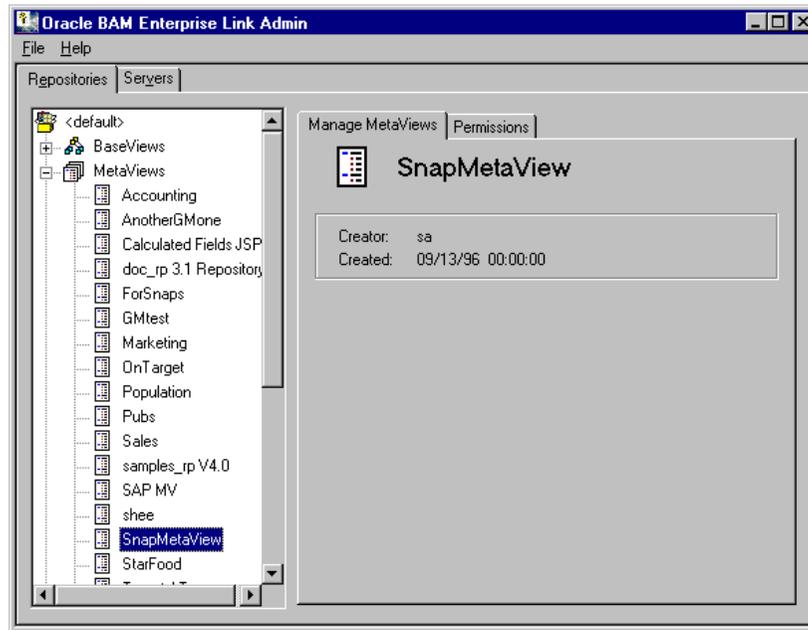
リポジトリ内のすべての MetaView にはプロパティ・シートがあり、Oracle BAM Enterprise Link Admin からそれを表示できます。

MetaView のプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」タブを選択します。
3. 必要に応じて、リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「MetaViews」をダブルクリックします。
5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

6. MetaView の名前を選択します。
MetaView のプロパティ・シートが表示されます。



プロパティ・シートには、MetaView を作成したユーザー、所有者、および作成日時を示すタイムスタンプが表示されます。

7. 「Permissions」タブを選択して、ユーザーおよびグループの権限を表示します。

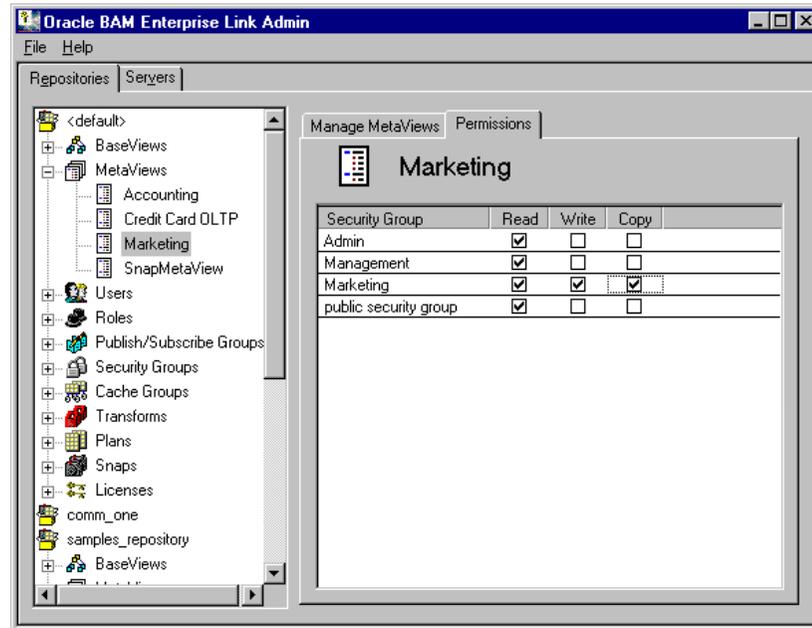
MetaView の権限の設定

Oracle BAM Design Studio で MetaView を作成した後に、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して権限を設定する必要があります。権限は、ユーザーが MetaView に関連付けられたアイテムおよびデータにアクセスするために設定する必要があります。MetaView の権限は、セキュリティ・グループを使用して割り当てるため、ユーザーおよびセキュリティ・グループは、MetaView へのアクセス権を定義する前に存在している必要があります。詳細は、[102 ページの「ユーザーの作成」](#) および [97 ページの「セキュリティ・グループの作成」](#) を参照してください。

MetaView の権限を設定するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「MetaViews」をダブルクリックします。

5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
6. MetaView の名前を選択します。
7. 「Permissions」 タブを選択します。
このリポジトリに現在定義されているセキュリティ・グループのリストが表示されます。



8. 該当するチェック・ボックスを選択して、各グループに読取り、書込みまたはコピーの権限を付与します。権限については、表 3 を参照してください。

表 3: MetaView の権限

MetaView の権限	ユーザーが可能な作業
Read	MetaView のオープンおよび表示。
Write	MetaView の Part および Category の削除、アイテムの名前変更、プロパティの変更、新しい Part または Category の作成、および変更の保存（自動）。
Copy	MetaView のコピーの新しい名前での保存。コピー権限があるグループは、MetaView 全体をコピーしてから、そのコピーを変更し、新しい MetaView を作成できます。

データ設計者は、MetaView の読取り、書込みおよびコピー権限を所有するセキュリティ・グループに属する必要があります。

プランおよび Snap の管理

プランおよび Snap にはプロパティ・シートがあり、それには Oracle BAM Enterprise Link Admin からアクセスできます。Design Studio のプロパティ・シートにも同様の情報が表示されますが、Oracle BAM Enterprise Link Admin では、プランおよび Snap のプロパティを変更できます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [プランおよび Snap のプロパティの表示](#)
- [パブリック・ディスクリプションまたはパブリック・キーワードの変更](#)
- [プランおよび Snap の所有者の変更](#)
- [プランおよび Snap の監査](#)
- [プランのスケジュール・プロパティの表示](#)
- [プランのスケジュールの解除](#)
- [パブリッシュ / サブスクライブ・プロパティの表示と変更](#)
- [プランおよび Snap の削除](#)

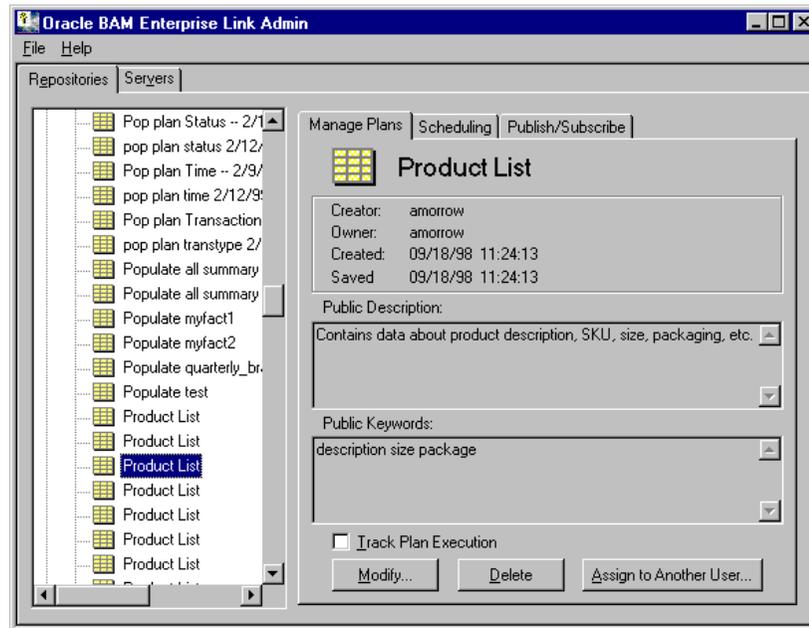
プランおよび Snap のプロパティの表示

リポジトリ内のすべてのプランおよび Snap にはプロパティ・シートがあり、Oracle BAM Enterprise Link Admin から表示できます。プロパティ・シートから、これらのアイテムの詳細を変更、削除および表示できます。また、プロパティ・シートから、プランのスケジュールを管理できます。詳細は、[47 ページ](#)の「[プランのスケジュール・プロパティの表示](#)」を参照してください。

プランまたは Snap のプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「**Plans**」または「**Snaps**」をダブルクリックします。
5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページ](#)の「[リポジトリへの接続](#)」を参照してください。

6. 表示するアイテムの名前を選択します。
アイテムのプロパティ・シートが表示されます。



パブリック・ディスクリプションまたはパブリック・キーワードの変更

プランおよび Snap のプロパティ・シートには、アイテムのパブリック・ディスクリプションおよびパブリック・キーワードが含まれています。パブリック・ディスクリプションは、プランまたは Snap に含まれる情報を、短いテキストで説明したものです。パブリック・キーワードは、このアイテムを取得するために、ユーザーが Design Studio での検索に使用できる単語です。パブリック・ディスクリプションおよびパブリック・キーワードを定義するのはアイテムを作成するユーザーですが、管理者は Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、これらを変更できます。

パブリック・ディスクリプションまたはパブリック・キーワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 44 ページの「プランおよび Snap のプロパティの表示」の手順に従います。

2. 「Manage Plans」 タブで、「**Modify**」をクリックします。
「Modify Plan」 ダイアログ・ボックスが表示されます。



3. 説明およびキーワードに対する変更を入力します。
4. 「**OK**」をクリックします。

プランおよび Snap の所有者の変更

アイテムを作成したユーザーが、そのアイテムの所有者になります。プランおよび Snap の所有権を変更するには、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用します。

プランまたは Snap の所有者を変更するには、次の手順を実行します。

1. [44 ページの「プランおよび Snap のプロパティの表示」](#) の手順に従います。
2. 「**Assign to Another User**」をクリックします。
「Assign Object Ownership」 ダイアログ・ボックスが表示されます。



3. リストからユーザー名を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。

プランおよび Snap の監査

ユーザーがプランまたは Snap にアクセスする頻度を監査できます。名前、実行時間、完了時間、プランまたは Snap を実行したユーザーの情報が追跡され、リポジトリ表に格納されます。

プランの追跡を指定してプランを実行すると、リポジトリ・データベースの表では、そのプランに関連するイベントが記録されます。sarp_track_plan 表には、実行済の追跡された各プランのレコードが格納されています。sarp_track_step はプランの各ステップを追跡し、sarp_track_table は影響を受けるターゲット表を追跡します。これらの表の列には、開始時間と終了時間、エラー・テキスト、処理されたレコードの数、拒否されたレコードの数などの情報が格納されます。

プランを監査するには、次の手順を実行します。

1. 44 ページの「[プランおよび Snap のプロパティの表示](#)」の手順に従います。
2. プロパティ・シートの下部の「**Track Plan Execution**」チェック・ボックスを選択します。
3. 次の表を含むリポジトリの MetaView を作成して情報を表示し、それらに対して問合せを実行します。
 - SARP_TRACK_PLAN
 - SARP_TRACK_STEP
 - SARP_TRACK_TABLE

また、データベースのツールを使用しても、表に格納されている情報を取得できます。

MetaView の作成の詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring Enterprise Link Design Studio ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

プランのスケジュール・プロパティの表示

特定のプランのスケジュール以外にも、リポジトリ内にあるスケジュール済のプランはすべて表示できます。

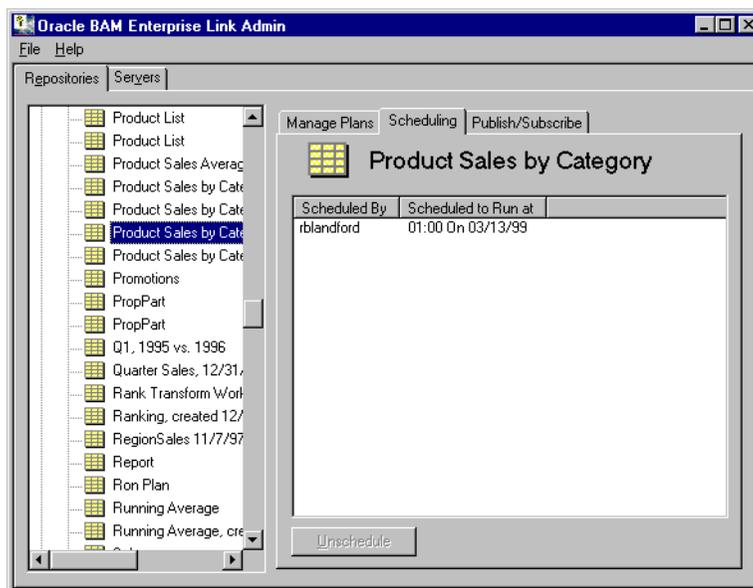
プランのスケジュールを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「**Plans**」をダブルクリックします。
5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続](#)」を参照してください。
6. プランの名前を選択します。

7. 「Scheduling」 タブを選択します。

プランの「Scheduling」プロパティ・シートが表示されます。



「Scheduling」プロパティ・シートには、このプランをスケジュール設定したユーザー、プランを実行する日付、時間および頻度が表示されます。

プランのスケジュールの解除

別のユーザーがスケジュール設定したプランのスケジュールを解除できます。プランのスケジュールを解除すると、そのプランでスケジュールされているすべてのインスタンスに影響します。週に 1 回実行するようにスケジュール設定されているプランに対し、そのスケジュールを解除すると、現行の週以降のスケジュールが解除されます。

プランのスケジュールを解除するには、次の手順を実行します。

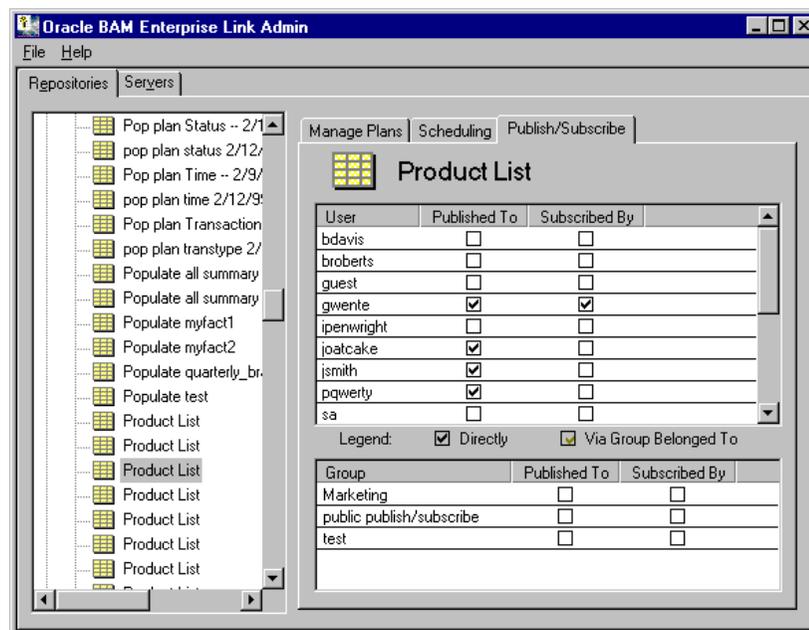
1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
3. 「Plans」をダブルクリックします。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。
5. スケジュールを解除するプランを選択します。
6. 「Unschedule」をクリックします。

パブリッシュ/サブスクライブ・プロパティの表示と変更

Oracle BAM Enterprise Link Admin では、プランまたは Snap がパブリッシュされるユーザーと、そのアイテムをサブスクライブしているユーザーのリストを表示できます。

プランまたは Snap のパブリッシュ/サブスクライブ・プロパティを表示または変更するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
3. 「Plans」または「Snaps」をダブルクリックします。
4. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
5. プランまたは Snap を選択します。
6. 「Publish/Subscribe」タブを選択します。



- 「User」セクションの「Published To」列の黒色のチェック・マークは、ユーザーにパブリッシュされているアイテムを示します。黄色のチェック・マークは、ユーザーが属しているパブリッシュ/サブスクライブ・グループに、そのアイテムがパブリッシュされていることを示します。同じボックスに2つのチェック・マークがある場合は、両方の状態が存在することを示します。

- 「Subscribed By」列の黒色のチェック・マークは、アイテムをサブスクライブしているユーザーを示します。黄色のチェック・マークは、ユーザーが属しているパブリッシュ / サブスクライブ・グループに、そのアイテムが自動サブスクライブされていることを示します。同じボックスに2つのチェック・マークがある場合は、両方の状態が存在することを示します。
 - プロパティ・シートの「Group」セクションには、プランまたは Snap がパブリッシュおよび自動サブスクライブされるグループが表示されません。
7. チェック・ボックスを選択 / 選択解除して、パブリッシュおよびサブスクリプションのプロパティを選択または選択解除します。
変更は自動的に保存されます。

プランおよび Snap の削除

プランおよび Snap は、「Manage Plans」または「Manage Snaps」プロパティ・シートで削除できます。プランまたは Snap を削除すると、オブジェクト定義がリポジトリから削除されます。また、プランおよび Snap は、ユーザーの「Object Ownership」プロパティ・タブでも削除できます。詳細は、[108 ページの「ユーザー・オブジェクトの削除」](#)を参照してください。

プランまたは Snap を削除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Repositories」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「Plans」または「Snaps」をダブルクリックします。
5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。
6. 削除するプランまたは Snap の名前を選択します。
7. 「Delete」をクリックします。

選択したプランまたは Snap は、ただちに削除されます。

削除すると、Snap は Snap Bin には表示されなくなりますが、データベースには Snap 表が存在し続けます。データベースのツールを使用して、この表を削除する必要があります。Snap 表の削除の詳細は、[27 ページの「Snap 表のクリーンアップ」](#)を参照してください。

Transform の管理

Transform にはプロパティ・シートがあり、それには Oracle BAM Enterprise Link Admin からアクセスできます。Transform のプロパティ・シートを使用すると、次の作業を実行できます。

- [Transform プロパティの表示](#)
- [新しい Transform の登録](#)
- [Transform の変更](#)
- [Transform の削除](#)

Transform プロパティの表示

Transform のプロパティ情報には、クラス ID、入 / 出力接続の数、および Transform がシンクであるかソースであるかが含まれています。

各 Transform には、次の識別文字列があります。

- ランタイム・クラス ID
- コンパイル・クラス ID
- U/I クラス ID

ほとんどの場合、識別文字列の値は同一です。カスタム作成した Transform では、デフォルトで各クラス ID フィールドに同じ値が使用されます。

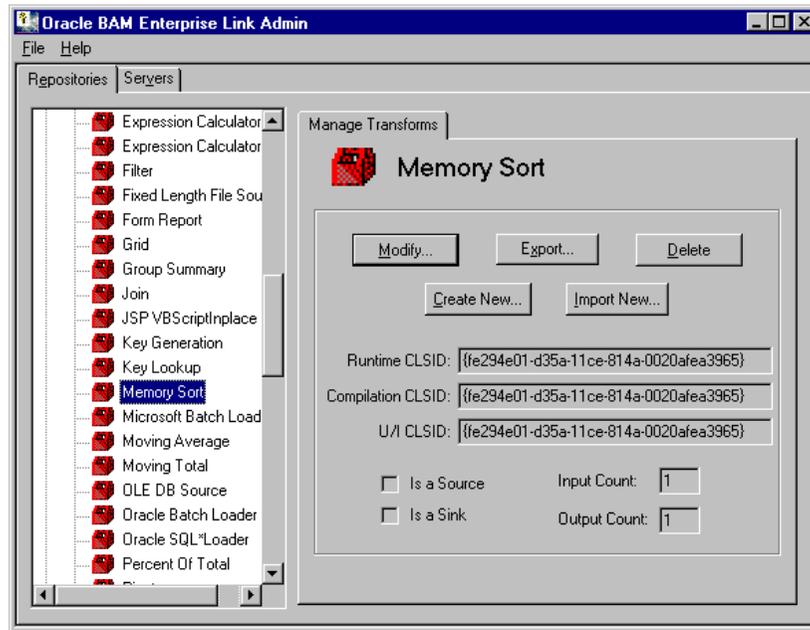
Transform のプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
4. 「**Transforms**」をダブルクリックします。
5. 必要に応じて、リポジトリに接続します。

詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。

6. Transform を選択します。

「Manage Transforms」プロパティ・シートが表示されます。



新しい Transform の登録

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [新しい Transform の登録](#)
- [レジストリ構成ファイルの作成](#)

新しい Transform は、登録する必要があります。カスタマイズした Transform は、カスタマイズ・プロセスで登録されます。サンプル・ファイルは、[54 ページの表 4](#)を参照してください。

新しい Transform の作成については、『Transform Programmer's Guide』を参照してください。

新しい Transform の登録

Oracle BAM Enterprise Link Admin で新しい Transform を登録するには、Transform SDK を使用して Transform を定義する際に使用する C++ コードのブロックについて、これに関連付けられている 32 桁のクラス ID を知っている必要があります。クラス ID 番号によって、C++ コードが Transform のダイアログ・ボックスにリンクされます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin で新しい Transform を登録するには、次の手順を実行します。

1. Transform SDK を使用して、クラス ID を記録しながら Transform を作成します。
2. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。

3. 「**Repositories**」タブを選択します。
4. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
5. 「**Transforms**」を選択します。
6. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、[8 ページの「リポジトリへの接続」](#)を参照してください。
「**Manage Transforms**」タブが表示されます。
7. 「**Create New**」をクリックします。
「**Create Transform**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

8. 「**Name**」フィールドに、新しい **Transform** の一意の名前を入力します。
9. 「**Runtime CLSID**」、「**Compilation**」および「**U/I CLSID**」フィールドに、新しい **Transform** の 32 桁のクラス ID をカッコで囲んで入力します。
Transform のクラス ID を入力すると、この **Transform** の実行可能ファイルへのマッピング・エントリがリポジトリに作成されます。
10. チェック・ボックスを選択して、**Transform** がシンクであるかソースであるかを指定します。**Transform** が入力データの受入れと出力データの作成の両方を行う場合は、チェック・ボックスを選択解除しておきます。
11. この **Transform** の入 / 出力の接続数を指定します。
12. 「**OK**」をクリックします。

Transform の定義が、現行リポジトリに作成されます。

レジストリ構成ファイルの作成

レジストリ構成ファイルは、新しい **Transform** を認識するように、クライアント・アプリケーションを構成します。サーバー・マシンと、新しい **Transform** にアクセスする必要がある各クライアント・マシンで、レジストリ構成ファイルを実行します。

「**Compilation CLSID**」および「**U/I CLSID**」に入力したクラス ID と、「**Runtime CLSID**」に入力したクラス ID が異なる **Transform** を登録する場合は、異なるクラス ID ごとに新しい構成ファイルを作成する必要があります。

新しい Transform のレジストリ構成ファイルを作成するには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタ・プログラムを使用して、空のテキスト・ファイルを作成します。
2. ランタイム・クラス ID、名前、および Transform の DLL (Dynamic Link Library) へのパスを、次のように入力します。

```
REGEDIT4
[HKEY_CLASSES_ROOT¥CLSID¥{classid}]@="name"
[HKEY_CLASSES_ROOT¥CLSID¥{classid}¥InprocServer32]
@="dll-path" ThreadingModel="Apartment"
```

要素	説明
classid	32 桁のランタイム・クラス ID
name	Transform の名前 (ここで指定したとおりにツリー・コントロールに表示されます)
dll-path	この Transform の DLL へのフルパス

3. 拡張子 .reg を付けてファイルを保存します。
4. カスタム Transform を使用する必要があるすべてのマシンで、Transform レジストリ・ファイルを実行します。

Transform 情報がレジストリに登録されます。

たとえば、クラス ID が {fe294e05-d35a-11ce-814a-0020afea3965} の Transform の場合、そのレジストリ構成ファイルの内容は次のようになります。

表 4: レジストリ構成ファイルの例

```
REGEDIT4
[HKEY_CLASSES_ROOT¥CLSID¥{fe294e05-d35a-11ce-814a-0020afea3965}]@="Projection Transform"
[HKEY_CLASSES_ROOT¥CLSID¥{fe294e05-d35a-11ce-814a-0020afea3965} ¥InprocServer32]
@="S:¥¥server¥¥home¥¥SATFPROJ.DLL"
ThreadingModel="Apartment"
```

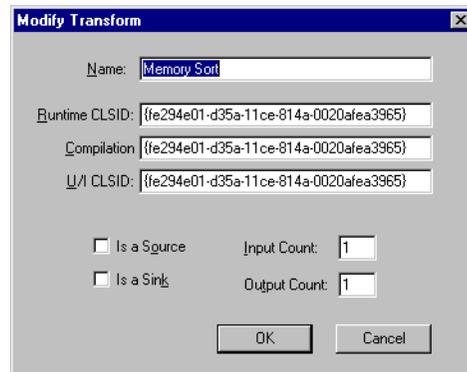
Transform の変更

Transform を変更する前に、それが現在使用中でないことを確認します。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用した Transform の変更では、Tool Bin 内での名前の変更またはカスタム設定の修正のみを行います。

既存の Transform を変更するには、次の手順を実行します。

1. 対象となる Transform が使用中でないことを確認します。
2. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
3. 「Repositories」タブを選択します。
4. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。

5. 「Transforms」をダブルクリックします。
6. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
7. 変更する Transform の名前を選択します。
8. 「Modify」をクリックします。
「Modify Transform」ダイアログ・ボックスが表示されます。



9. テキスト・ボックスおよびチェック・ボックスで変更を行います。
10. 「OK」をクリックします。
リポジトリ内の Transform 定義が変更されます。

Transform の削除

Transform を削除する前に、それが使用中でないことを確認します。Transform を削除すると、すべてのユーザーがその Transform を使用できなくなります。

Transform を削除するには、次の手順を実行します。

1. 対象となる Transform が使用中でないことを確認します。
2. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
3. 「Repositories」タブを選択します。
4. リポジトリ・アイテムのリストを開きます。
5. 「Transforms」をダブルクリックします。
6. 必要に応じて、リポジトリに接続します。
詳細は、8 ページの「リポジトリへの接続」を参照してください。
7. 削除する Transform の名前を選択します。
8. 「Manage Transforms」タブで、「Delete」をクリックします。
リポジトリから Transform 定義が削除されます。

Enterprise Link Server の管理

ここで説明する内容は次のとおりです。

- Enterprise Link Server の Data Flow Service の概要
- Enterprise Link Server の追加
- Enterprise Link Server の登録
- Enterprise Link デーモンの起動 (Solaris ユーザーのみ)
- サービスの開始
- サービス・ステータスの表示
- プランの停止
- サービスの停止
- Enterprise Link Server の削除

Enterprise Link Server の Data Flow Service の概要

Design Studio では、データベース・サーバーとクライアント・アプリケーション間におけるすべての通信を仲介する Data Flow Service を通じてデータが取得されます。Data Flow Service は、ネットワーク上の Windows NT/2000 または Solaris のいずれのマシンでも動作します。

Data Flow Service は、データベース・リクエストのパッケージ化、正しいタイプによる SQL コードの動的な構築、ネットワーク上でのソース・データベースの特定、リクエストの送信、およびクライアント・アプリケーションへの結果の返信を行います。プランを実行するには、Data Flow Service を開始する必要があります。

Data Flow Service では、確立されたデータベース接続のプールが保持されます。データベースへの接続が初めての場合は、Data Flow Service によって新しい接続が確立されます。接続が確立された後、その接続を再利用できるように、Data Flow Service によって接続情報がプールに格納されます。Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、キャッシュに保存する接続の数、および接続を有効にしておく期間を構成できます。詳細は、[6 ページの「Oracle BAM Enterprise Link Server およびリポジトリの構成」](#)を参照してください。

また、Data Flow Service では、データベース・キャッシュとは別に、サーバー・マシンでキャッシュのプールが保持されます。キャッシュ・プールには、Snap、プランの結果など、複数のユーザーで必要になると考えられるアイテムが格納されます。Oracle BAM Enterprise Link Admin では、すべてのユーザー、キャッシュ・グループのメンバーのみ、または特定のユーザーのみで共有するように、このキャッシュを構成できます。

Enterprise Link Server の追加

Enterprise Link Server をインストールすると、Data Flow Service が同じマシンに自動的にインストールされます。使用している Data Flow Service がオーバーロードした場合は、別の Windows NT マシンに 2 つ目の Data Flow Service を追加できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin で新しいサーバーを登録する際に、サーバーが動作するマシン、およびサービスと Oracle BAM Enterprise Link Admin 間の通信に使用するネットワーク・プロトコルを指定します。この情報によって、サーバーと Oracle BAM Enterprise Link Admin マシン間の関係が確立されます。

注意： Data Flow Service を追加する前に、Oracle BAM Enterprise Link ソフトウェアのライセンス契約で、追加の Enterprise Link Server のインストールが許可されていることを確認してください。

サーバーを追加するには、次の手順を実行します。

1. 新しい Enterprise Link Server が必要となるマシンで、インストール・プログラムを実行します。詳細は、『Oracle Business Activity Monitoring インストレーション・ガイド』を参照してください。
2. Oracle BAM Enterprise Link Admin でサーバーを登録します。詳細は、59 ページの「Enterprise Link Server の登録」を参照してください。
3. Solaris ユーザーのみ：サーバー・マシンで Enterprise Link デーモンを起動します。詳細は、61 ページの「Enterprise Link デーモンの起動 (Solaris ユーザーのみ)」を参照してください。
4. サーバー・マシンでサービスを開始します。詳細は、61 ページの「サービスの開始」を参照してください。

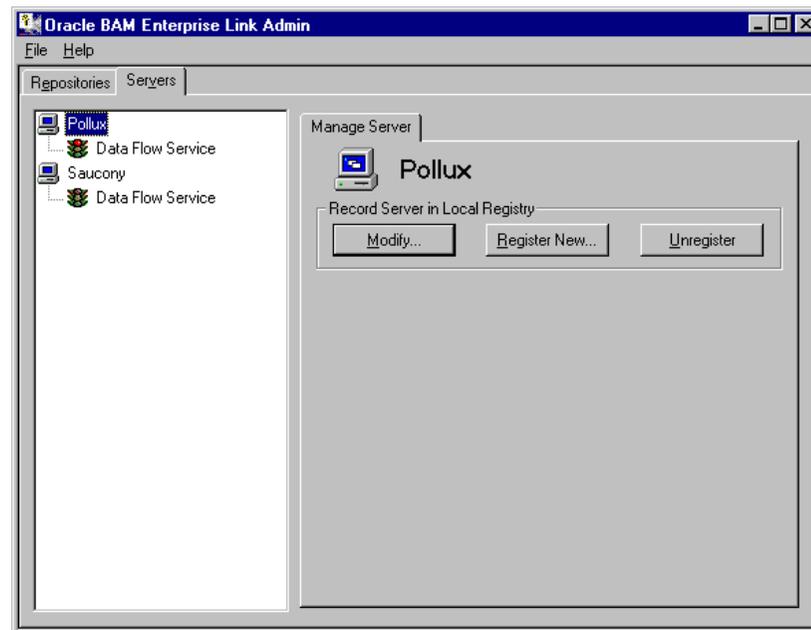
Enterprise Link Server の登録

サーバーを登録すると、使用しているマシンのサービスへの接続に必要な情報が格納されます。サーバーを登録する際に、サービスと Oracle BAM Enterprise Link Admin 間の通信に使用する TCP/IP または名前付きパイプ・プロトコルを選択する必要があります。

サーバーを登録するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。

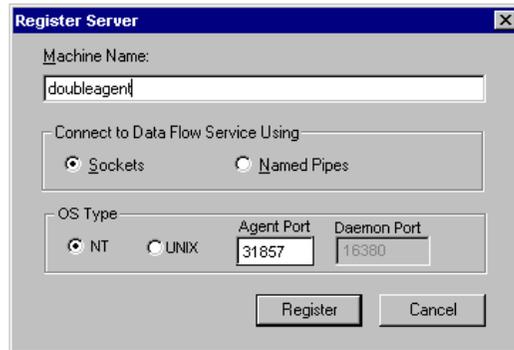
「Manage Server」プロパティ・シートが表示されます。



3. 「Register New」をクリックします。

「Register Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. サービスを実行するマシンの名前を入力します。



5. サーバーと Oracle BAM Enterprise Link Admin 間の通信に使用するプロトコルを選択します。

プロトコル	説明
TCP/IP	デフォルトのプロトコル。TCP/IP は、LAN の内外に関係なく、互換性のある任意のマシンと通信できます。LAN の外側にあるマシンまたはメインのネットワーク・パスから隔離されているローカル・マシンの場合は、TCP/IP 接続プロトコルを使用する必要があります。
名前付きパイプ	これを選択するのは、Data Flow Service が Oracle BAM Enterprise Link Admin と同じマシンに存在する場合か、ネットワークが TCP/IP をサポートしていない場合のみです。

注意: デフォルトでは、Data Flow Service は TCP/IP と名前付きパイプの両方でリクエストをリスニングします。

6. サーバーのオペレーティング・システムを選択します。選択肢は、「NT」または「UNIX」です。
7. Windows NT/2000 の場合は、「Agent Port」フィールドに、Data Flow Service 用の 5 桁のポート番号を入力します。デフォルトは 31857 です。この設定は、使用している設定の AgentPort 番号と一致させる必要があります。

UNIX の場合は、Enterprise Link デーモン用の 5 桁のポート番号を入力する必要があります。デフォルトは 16380 です。この設定は、使用している設定の DaemonPort 番号と一致させる必要があります。

注意: UNIX サーバーに複数の Data Flow Service がある場合は、エージェントとデーモン用に異なるポートを指定する必要があります。

8. 「Register」をクリックします。

サーバーが登録され、その名前が Oracle BAM Enterprise Link Admin のツリー・コントロールに表示されます。サーバーに関連付けられているサービスが、サーバー名の下に表示されます。

Enterprise Link デーモンの起動（Solaris ユーザーのみ）

Windows NT/2000 マシンから Solaris の Enterprise Link Server を管理するには、まず Enterprise Link デーモン（saad_dmn）を起動する必要があります。デフォルトでは、デーモンはポート番号 16380 で動作します。

Enterprise Link デーモンを起動するには、次の手順を実行します。

1. 管理権限のあるユーザーとして、Enterprise Link Server がインストールされている Solaris マシンにログオンします。
 2. コマンドライン・ウィンドウを開きます。
 3. デーモン・ファイルが格納されているディレクトリに移動します。
 4. コマンドラインから `sagent start` と入力します。
- これで、デーモンが起動されました。

サービスの開始

Enterprise Link Server が登録された後、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Windows NT/2000 および Solaris サーバー・マシンでサービスを開始および停止できます。

Windows NT/2000 上の Enterprise Link Server の場合は、サーバー・マシンを起動するたびにサービスが開始するように設定できます。また、サーバー・マシンの Windows の「コントロールパネル」からもサービスを構成できます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用したサービスの開始](#)
- [Windows の「コントロールパネル」からのサービスの開始](#)
- [NT/2000 でのサービスの自動開始](#)

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用したサービスの開始

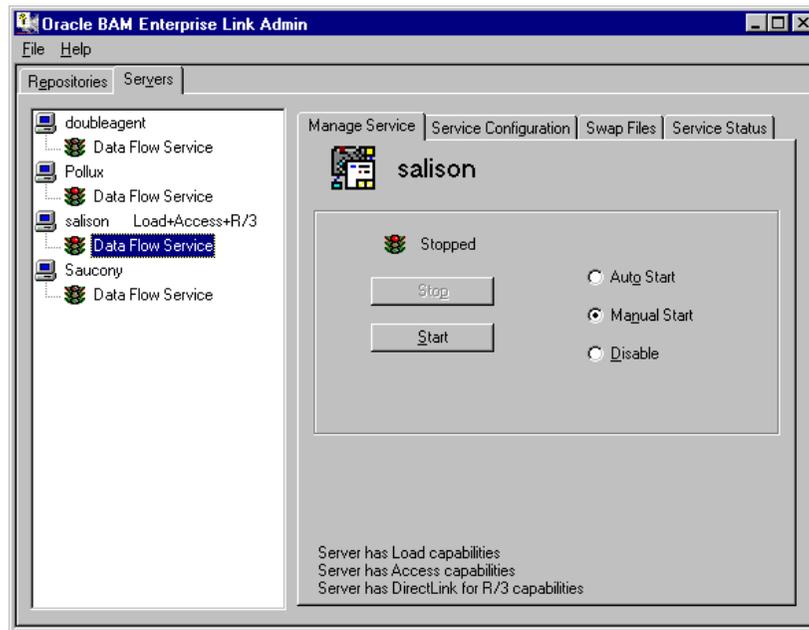
Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Windows NT/2000 または Solaris サーバー・マシン上のサービスを開始できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用してサービスを開始するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブをクリックします。
3. サーバーをダブルクリックして、サービスのリストを表示します。

注意 : Solaris ユーザーの場合のみ : Enterprise Link デーモン（saad_dmn）が動作していることを確認します。

4. 開始するサービスの名前をクリックします。
「Manage Service」プロパティ・シートが表示されます。



5. 「Start」をクリックします。

「Start」および「Stop」ボタンの上のテキストは、サーバー・マシンでサービスが動作していることを示します。

Windows の「コントロールパネル」からのサービスの開始

Windows NT/2000 サーバー・マシンの「コントロールパネル」から、サービスが自動的に開始するように構成するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」を選択します。
2. 「サービス」アイコンをダブルクリックします。
3. Data Flow Service の名前を選択します。
4. 「スタートアップ」をクリックします。
「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「スタートアップの種類」で「自動」を選択します。
6. 「OK」をクリックして変更を保存します。

NT/2000 でのサービスの自動開始

Oracle BAM Enterprise Link Admin から Windows NT/2000 サーバー・マシンのサービスが自動的に開始するように構成するには、次の手順を実行します。

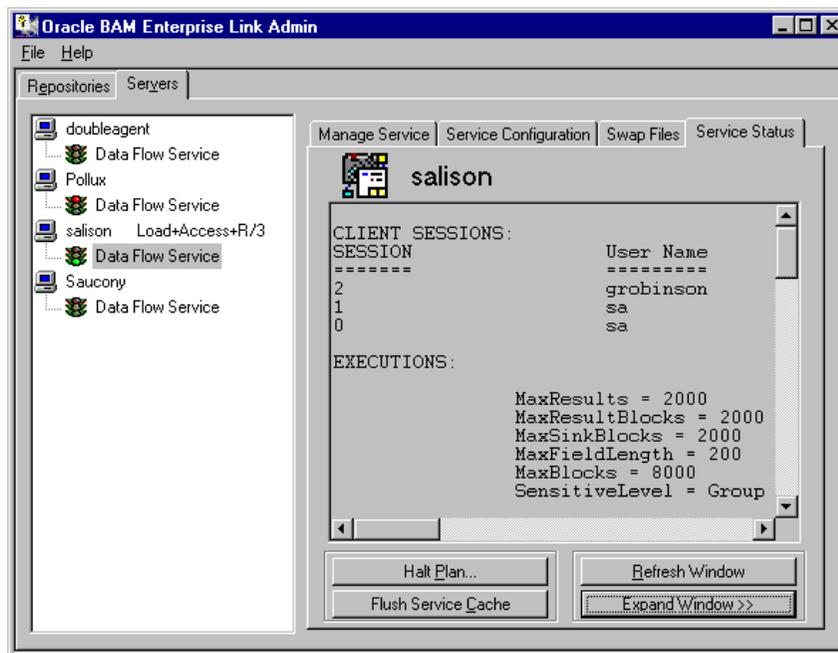
1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブをクリックします。
3. サービスを選択します。
「Manage Service」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「Auto Start」ラジオ・ボタンを選択します。
変更は自動的に保存されます。

サービス・ステータスの表示

サーバーを登録した後で、サービスのアクティビティに関する情報を表示できます。

Data Flow Service のステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。
3. サービスを選択します。
4. 「Service Status」タブを選択します。
「Service Status」プロパティ・シートが表示されます。



5. 「Expand Window」をクリックして、ステータス・ウィンドウを Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーション・ウィンドウのサイズまで拡大します。

Data Flow Service のステータス情報には、現行のすべてのクライアント・セッションのレコードと、Data Flow Service の一部の設定が含まれています。すでに実行済のプランの場合は、統計と、シンク・ステップのレコードが表示されます。シンクは、プランを終了するステップです。

6. 表 5 の情報を確認します。

表 5: Data Flow Service のステータス情報

ステータス項目	説明
Client Sessions	各クライアント・セッションに関する情報。これには、ユーザー名、グループ名、クライアント・コンピュータの名前および接続時刻が含まれます。
Executions	現在実行中のリクエストのリスト。これには、プランで使用されるステップのリスト、ステップの各状態のリスト、およびこのサービスに対する Data Flow Service 設定のリスト（一部）が含まれます。
Cached Result	Data Flow Service キャッシュのすべての結果セットのリスト。これには、プロファイル情報と統計が含まれます。
Database Connections	Data Flow Service 設定。接続プールに保持できるデータベース接続の現行の最大数です。
Security Level	Data Flow Service 設定。Data Flow Service キャッシュに格納される結果セットに対するアクセスの機密レベルです。これは、セキュリティのメカニズムです。第 6 章「ユーザーおよびセキュリティの管理」を参照してください。
Current Connections	接続プール内の接続のうち、現在使用中の接続のリスト。
Cached Connections	接続プール内の接続のうち、現在アイドル状態の接続のリスト。
User	現行ユーザーとリソース・プロファイルのリスト。これには、使用可能なメモリー・ブロック、キャッシュ・ブロック、データベースとユーザー接続およびスレッドが含まれます。最大値を変更するには、「Service Configuration」タブで構成の設定を変更します。

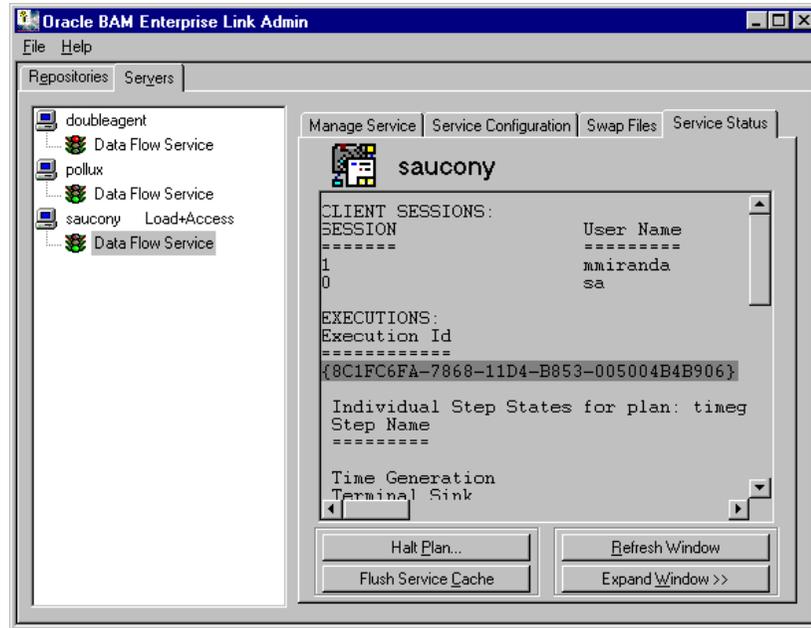
プランの停止

リソースに問題が発生し、実行中のプランを停止する必要がある場合、このタスクは「Service Status」プロパティ・シートから実行できます。

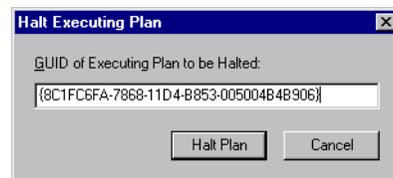
プランを停止するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブをクリックします。
3. プランを実行している Data Flow Service を選択します。
サービスのステータス情報が表示されます。

4. 停止するプランの実行 ID を特定します。たとえば、
{8CF1FC6FA-7868-11D4-B953-005004B4B906} などです。
5. 32 桁の実行 ID を選択します。クリックしてからカーソルをドラッグし、
ID とその前後のカッコを選択します。



6. [Ctrl] キーを押しながら [C] キーを押して、カッコを含む実行 ID をコピー
します。
7. 「Halt Plan」 をクリックします。
「Halt Executing Plan」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
8. 「GUID of Executing Plan to be Halted」 フィールドでクリックします。
9. [Ctrl] キーを押しながら [V] キーを押して、テキスト・フィールドに実行
ID を貼り付けます。



10. 「Halt Plan」 をクリックします。実行中のプランが停止します。

サービスの停止

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、Windows NT/2000 または Solaris サーバー・マシン上のサービスを停止できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin からサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. サービスには現在実行しているプランはなく、接続しているユーザーもないことを確認します。手順については、[63 ページの「サービス・ステータスの表示」](#)を参照してください。
2. 「**Servers**」タブを選択します。
3. 停止するサービスの名前を選択します。
「Manage Service」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「**Stop**」をクリックします。

「Start」および「Stop」ボタンの上のテキストは、サーバー・マシンでサービスが停止していることを示します。

Windows NT/2000 サーバー・マシンのサービスの場合、そのサーバー・マシンで「コントロールパネル」を使用してサービスを停止できます。

Windows NT/2000 の「コントロールパネル」からサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「サービス」を開きます。
3. Data Flow Service など、サービスの名前を選択します。
4. 「停止」をクリックします。

Enterprise Link Server の削除

Enterprise Link Server を削除するには、次の手順を実行します。

1. サービスを停止します。詳細は、[66 ページの「サービスの停止」](#)を参照してください。
2. サーバー・マシンでサービスを無効にします。詳細は、[67 ページの「サービスの無効化」](#)を参照してください。
3. Oracle BAM Enterprise Link Admin でサーバーを登録解除します。詳細は、[67 ページの「サーバーの登録解除」](#)を参照してください。

サービスの無効化

Oracle BAM Enterprise Link Admin または Windows NT/2000 の「コントロールパネル」を使用すると、Windows NT/2000 サーバー・マシンで動作しているサービスを無効にできます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin からサービスを無効にするには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブをクリックします。
3. 無効にするサービスの名前を選択します。
「Manage Service」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「Disable」ラジオ・ボタンを選択します。

Windows NT/2000 の「コントロールパネル」からサービスを無効するには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「サービス」を開きます。
3. Data Flow Service など、サービスの名前を選択します。
4. 「スタートアップ」をクリックします。
「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「スタートアップの種類」で「無効」を選択します。
6. 「OK」をクリックしてサービスを無効にします。

サーバーの登録解除

Oracle BAM Enterprise Link Admin でサーバーを登録解除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。
3. サーバーの名前を選択します。
「Manage Server」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「Unregister」をクリックします。

Oracle BAM Enterprise Link Admin のツリー・コントロールから、サーバーの名前が削除されます。サービスの制御および構成に必要な情報が、ローカル・マシンから削除されます。

Data Flow Service の管理

この章では、最適なパフォーマンスを得られるように Enterprise Link Server を構成する方法について説明します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Data Flow Service の管理の概要](#)
- [Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用した設定の変更](#)
- [キャッシュのフラッシュ](#)
- [Data Flow Service のスワップ・ファイルの追加](#)
- [Data Flow Service のスワップ・ファイルのサイズ変更](#)
- [Data Flow Service のスワップ・ファイルの削除](#)
- [Data Flow Service の監視](#)

Data Flow Service の管理の概要

Data Flow Service の管理には、環境と設定の保守および構成が含まれます。デフォルト値は、サービスのインストール時に設定されます。

Data Flow Service は、データベース・サーバーと Oracle BAM Enterprise Link クライアント・アプリケーション間のすべての通信を仲介します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Data Flow Service のパフォーマンス](#)
- [Data Flow Service キャッシュ](#)
- [Data Flow Service の空きキュー](#)
- [Data Flow Service のスワップ・ファイル](#)
- [Data Flow Service の設定](#)

Data Flow Service のパフォーマンス

Oracle BAM Enterprise Link 環境の次の条件は、パフォーマンスに影響します。

- サーバー上のプロセッサのタイプと数
- サーバー上の RAM
- ディスクの数とサイズ
- ネットワーク速度
- ユーザーの数
- 同じサーバー上で Data Flow Service と同時に実行するアプリケーションのタイプと数
- 実行するプランの複雑さと数
- プランで処理されるデータの量

Data Flow Service キャッシュ

Grid など、クライアントの表示シンク Transform がプランに含まれている場合は、Data Flow Service キャッシュを使用して、Oracle BAM Enterprise Link の問合せパフォーマンスを向上させます。

Data Flow Service によって、サーバー・マシンに結果が保存されます。Oracle BAM Enterprise Link ユーザーが取得する Snap および結果セットは、サーバー・マシンに存在する Data Flow Service キャッシュにすべて格納されています。異なるユーザーが同じアイテムをリクエストした場合、Data Flow Service ではメモリーからそのアイテムを直接取得できます。SensitiveLevel レジストリ設定を使用して、キャッシュ済アイテムへのアクセスを制御できます。デフォルトでは、キャッシュ内のアイテムにアクセスできるのは、キャッシュ・グループのメンバーのみです。

たとえば、Snap または結果セットを取得すると、結果が表示され、その Snap のコピーが Data Flow Service キャッシュに保存されます。同じアクセス権のグループの他のユーザーが同じ Snap をリクエストすると、その結果は Data Flow Service キャッシュから取得されます。

ユーザーが Snap または結果セットを取得すると、ユーザーがそのいずれかにアクセスしている間は、キャッシュに Snap または結果セットが保持されます。使用されなくなると、キャッシュ済アイテムは空きキューに移行されます。空きキューとは、キャッシュが一杯になった場合にキャッシュから削除するアイテムの、優先度リストです。キューの最前部のアイテムが最初に破棄されます。次の項で説明するアルゴリズムによって、結果が配置される空きキュー内の位置が決定されます。

Data Flow Service キャッシュに割り当てるサーバー・マシン上のメモリーが大きいほど、メモリーに対して保存および取得されるアイテムの数は多くなります。

注意： キャッシュ・サイズを大きくすると Data Flow Service のパフォーマンスは向上しますが、同じマシンの他のアプリケーションのパフォーマンスが低下する可能性があります。

Data Flow Service キャッシュを構成する場合は、次の項目を考慮します。

- [キャッシュへのアクセス](#)
- [キャッシュのしきい値](#)

キャッシュへのアクセス

Data Flow Service キャッシュに格納されているアイテムへのアクセスは、次の設定で制御されます。

- [SensitiveLevel](#) 設定
- Oracle BAM Enterprise Link Admin ユーザー・セキュリティ

キャッシュのしきい値

Data Flow Service キャッシュには高と低のしきい値があり、いずれも設定によって決定されます。高のしきい値に達すると、キャッシュは低のしきい値までフラッシュされます。次のいずれかの条件が満たされると、高のしきい値に達します。

- キャッシュ内の結果セットの数 [MaxResults](#)
- キャッシュ内のデータ・ブロックの数 [MaxBlocks](#)

結果セットは、MaxResults および MaxBlocks で設定された制限を越えるとキャッシュからフラッシュされます。

Data Flow Service キャッシュが自動的にフラッシュされる際、そのキャッシュは低いしきい値までフラッシュされます。次の両方の条件が満たされると、低いしきい値に達します。

- 結果の数 ≤ [MinResults](#)
- ブロックの数 ≤ [MinBlocks](#)

注意： Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用してキャッシュをフラッシュすると、フラッシュ可能なすべての結果がキャッシュから削除されます。修正数が 0（ゼロ）に等しい結果は、キャッシュに残ります。

Data Flow Service の空きキュー

空きキューには、キャッシュに格納されているアイテムのうち、現在使用されていないアイテムが含まれています。空きキュー内の結果セットの順序によって、キャッシュが一杯になった場合に最初に削除されるアイテムが決まります。キューの最前部のアイテムが最初に破棄されます。エラーが生成される結果セットまたは不完全な結果セットが、自動的にキューの最前部に移動されます。

どのようにアイテムを順序付け、空きキューから破棄するかは、次の設定によって決定されます。

- [SizeWeight](#)
- [LRUWeightDecr](#)
- [NormSeconds](#)
- [NormBlocks](#)

注意： NormSeconds または NormBlocks がキューの位置に影響する場合、その値は優先順位と同じように機能します。NormSeconds または NormBlocks の値を減らすと、キャッシュでの結果の保持に作用する時間またはサイズが増加します。値を増やすと、キューの位置に作用する時間またはサイズが減少します。たとえば、実行時間および結果サイズを個別に制御すると、実行に時間がかかる問合せを少数だけキャッシュに保持するように選択できます。

Data Flow Service のスワップ・ファイル

Oracle BAM Enterprise Link のスワップ・ファイルは、プロセス仮想アドレス空間における追加のセクションです。これらは、[AgentVMMemory](#) が一杯になるとアクセス可能になります。サーバー・マシンのスワップ・ファイルは、別のドライブ、または同じドライブの別のディレクトリのいずれかに指定できます。

注意： ディレクトリに含めることができるのは、1つのスワップ・ファイルのみです。複数あると、アクセス違反が発生する可能性があります。

スワップ・ファイルに割り当てたメモリーと AgentVMMemory との合計容量は、1.5GB 以下にする必要があります。起動ディスクおよびオペレーティング・システムのページ・ファイルでは、オペレーティング・システムが動作するのに十分な領域が使用可能であることを確認します。オペレーティング・システムの要件の詳細は、使用しているオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

スワップ・ファイルに発生した問題が原因で、サービスまたはアプリケーション・プロセスが失敗した場合は、それを通知する文が「Swap Files」プロパティ・シートの「Status」フィールドに表示されます。たとえば、スワップ・ファイルの作成に必要な空きメモリーが不足している場合に、ダイアログ・ボックスでスワップ・ファイル・エントリを選択すると、「Status」フィールドにメッセージが表示されます。

Data Flow Service の設定

この項で説明する設定は、Oracle BAM Enterprise Link Admin を介して表示および変更できます。

表 6 に、Data Flow Service の設定とその説明、および各設定のデフォルト値を示します。

表 6: Oracle BAM Enterprise Link Admin で変更可能な設定

設定	説明	デフォルト値
AgentBlockSize	メモリー・ブロック 1 つのサイズ (バイト)。この値は、オペレーティング・システムのページ・ファイル・サイズ (NT=4096) の倍数である必要があります。	4096
AgentNamedPipes	サービスが名前付きパイプを使用してリスニングするように指定するフラグ。	0
AgentSockets	サービスが TCP/IP を使用してリスニングするように指定するフラグ。	1
AgentVMMemory	データ・ブロックの処理時およびキャッシュ時に Data Flow Service が使用できる仮想メモリーのブロックの最大数。「AgentBlockSize」の値によって乗算されるこの値は、システム・スワップ・ファイルの 2/3 ~ 3/4 のサイズになるように指定する必要があります。詳細は、72 ページの「Data Flow Service のスワップ・ファイル」を参照してください。	8000
AllowDiskSort	サービスが必要に応じて自動ディスク・ソートを挿入するように指定するフラグ。	1
CaseSensitive	特にソートの場合など、システムがデフォルトである大/小文字の区別を行うように指定するフラグ。0 (ゼロ) は、大/小文字を区別しないことを示します。	1
ConnectionTimeout	データベース接続が切断されるまでの時間 (分)。この数値が 0 (ゼロ) に設定されると、データベース接続は無期限に続きます。	5

表 6: Oracle BAM Enterprise Link Admin で変更可能な設定 (続き)

設定	説明	デフォルト値
FreeDbConnections	オープンしたままにできるデータベース接続の最大数。	20
LowBlksMaxThreshold	サービスのメモリー状態が低から高に推移するタイミングとなるメモリー・ブロックの数またはパーセンテージ。	2
LowBlksMinThreshold	メモリー状態が低のときに保持されるメモリー・ブロックの数またはパーセンテージ。	1
LowBlksValsAbsolute	「LowBlksMaxThreshold」または「LowBlksMinThreshold」の設定について、しきい値の指定方法を示すフラグ。1は、これらの設定の値をブロックの絶対数で指定するように設定されます。0（ゼロ）は、これらの設定の値を合計ブロックのパーセンテージで指定するように設定されます。	0
LRUWeightDecr	最近最も使用されていない結果セットをキャッシュから破棄することがどれくらい重要かを示す因子（範囲は0～10）。この設定の値は、結果が使用されなくなった期間について、その重要度を示します。0（ゼロ）の値は、結果がどれくらい前に使用されたかを考慮しません。10の値は、結果がどれくらい前に使用されたかのみを考慮してキューを順序付けます。	1
MaxBlocks	キャッシュに保持するブロックの最大数。 詳細は、71 ページの「キャッシュのしきい値」を参照してください。	2000
MaxClients	サービスに同時接続できるクライアントの最大数。	50
MaxConnections	システム全体で使用可能なユーザー接続（セッション）の最大数。	2100
MaxDBConnections	システム全体で使用可能なデータベース接続の最大数。	6300
MaxFieldLength	単一フィールドの最大長（バイト）。この値より大きいフィールドは切り捨てられます。	200
MaxMemoryBlocks	システム全体で使用可能なランタイム・メモリー・ブロックの最大数。ただし、キャッシュ・ブロックは除きます。	80000
MaxResultAge	このエントリが存在する場合、キャッシュ済の結果が使用されるのは、その結果がこの値に満たない場合のみになります。経過時間の単位は分です。このエントリが0（ゼロ）の場合、プランは結果がリクエストされるたびに実行されます。	1 日
MaxResultBlocks	1つの結果で保持するブロックの最大数（すべてのブロックが実行計画内のシンク全体に対するものであるとして定義されます）。	1000
MaxResults	キャッシュする結果の最大数。 詳細は、71 ページの「キャッシュのしきい値」を参照してください。	100
MaxSinkBlocks	1つの結果の1つのシンクにおけるブロックの最大数。 「TruncateData」の設定が1に設定されると、この数を超えるデータは切り捨てられます。	1000
MaxSpilledBlocks	ディスクに書き込む（溢れる）結果ブロックの最大数。デフォルト値の0（ゼロ）は、制限がないことを意味します。結果のキャッシュ溢れを無効にするには、「SpillCacheResults」の設定を0（ゼロ）に設定します。	0

表 6: Oracle BAM Enterprise Link Admin で変更可能な設定 (続き)

設定	説明	デフォルト値
MaxThreads	システム全体で使用可能な同時スレッドの最大数。	2100
MaxUsrConnections	ユーザーごとに使用可能なユーザー接続 (セッション) の最大数。この値は、「MaxConnections」の値以下である必要があります。	100
MaxUsrDBConnections	ユーザーごとに使用可能なデータベース接続の最大数。	300
MaxUsrMemoryBlocks	ユーザーごとに使用可能なメモリー・ブロックの最大数。	8000
MaxUsrThreads	ユーザーごとに使用可能な同時スレッドの最大数。この値は、「MaxThreads」の値以下である必要があります。	100
MaxUsrToSysLimit	サービスが Data Flow Service の接続数を「MaxUsrToSysRatio」で制限することを指定するフラグ。	1
MaxUsrToSysRatio	ユーザー・リソースの合計数がこの因子によるシステム・リソース数を超えると、システムは以降の Data Flow Service の接続を禁止します。	10
MinBlocks	キャッシュに保持するブロックの最小数。オーバーフローが原因でキャッシュがフラッシュされる場合、「MinBlocks」および「MinResults」の値に達するまでキャッシュがフラッシュされません。詳細は、71 ページの「キャッシュのしきい値」を参照してください。	1500
MinResults	キャッシュに保持する結果の最小数。詳細は、71 ページの「キャッシュのしきい値」を参照してください。	75
NormBlocks	サイズを重み付けするための標準化の値。この値は、空きキューのサイズおよび結果セットの最小サイズに影響します。リクエストによって戻される結果が「NormBlocks」の値より小さい場合、サイズは結果セットの配置位置に影響しません。「NormSeconds」の値に連動します。	200
NormSeconds	時間を重み付けするための標準化の値。この値は、空きキューの位置、および結果セットを取得するための最小時間に影響を与えるのに必要な時間を指定します。リクエストが実行に要した時間が「NormSeconds」の値より短い場合、実行時間は結果セットのキュー内の配置位置に影響しません。「NormBlocks」の値に連動します。	30
NullsFirst	特にソートの場合など、サービスが照合順番内でデフォルトである NULL 優先順位に設定されることを指定するフラグ。0 (ゼロ) は、NULL が最下位に配置されることを意味します。	1
OutputQueueSize	プランのステップ間におけるキューの最大サイズ (ブロック数)。	200
ResultsCaching	可能な場合、サービスがキャッシュから結果を引き出し、再実行を回避することを指定するフラグ。	1
SensitiveLevel	キャッシュ内の結果をどのように共有するかを決定する値。0 (ゼロ) は結果を共有しません。1 はすべてのユーザーが結果を共有します。2 はキャッシュ・グループ・メンバーのみが結果を共有します。詳細は、70 ページの「Data Flow Service キャッシュ」を参照してください。	2

表 6: Oracle BAM Enterprise Link Admin で変更可能な設定 (続き)

設定	説明	デフォルト値
SizeWeight	大きな結果セットをキャッシュすることがどれくらい重要かを示す重み付け (範囲は 0 ~ 10)。 「SizeWeight」が n の場合、サイズ因子 (0 (ゼロ) 未満ではない) は、 $n/10$ に、結果セットのサイズと「NormBlocks」の差を乗じた値になります。	0
SpillCacheMaxPoll	メモリー状態が低いかどうかをテストし、必要に応じてディスクにブロックを書き込む頻度 (秒)。	10
SpillCachePercent	テスト間隔ごとにディスクへの書き込みを試行するために必要とされる合計ブロック数のパーセンテージ。必要とされる合計ブロック数は、現行のブロック数と「LowBlksMinThreshold」設定の差です。	10
SpillCacheResults	必要に応じて、プランのキャッシュ済の結果を一時ディスク・ファイルに書き込む (溢れる) ことを許可するかどうか。0 = キャッシュ溢れを許可しない。1 = キャッシュ溢れを許可する。	1
TruncateData	プランが「MaxSinkBlock」の値を超えた場合に、実行エラーを発生させるのではなく、サービスが暗黙的にデータを切り捨てることを指定するフラグ。	0

Spill-to-Disk

Spill-to-Disk は、メモリーしきい値が低に達すると、使用可能なディスク領域を使用する Data Flow Service の機能です。この機能を使用すると、結合、リンク付け、ピボットなど、マルチパスの Transform があるプランを大量のデータで実行できます。これらが実行する計算または変換のタイプによっては、マルチパスの Transform は、データセット全体のうち、大きな 1 つのサブセットに 1 度にアクセスする必要がある場合があります。Spill-to-Disk は、使用可能なディスク領域を使用することで、仮想アドレス空間が単体で処理できる量よりも、大量のデータセットを処理します。

また、Spill-to-Disk には、DFS キャッシュに常駐するブロックも含まれます。最大キャッシュ・ブロック設定に対する違反を回避するには、キャッシュからフラッシュする以外に方法がないキャッシュ・エントリが、使用可能なディスク領域に格納されます。

Spill-to-Disk を起動するためのしきい値は、メモリー状態に基づいて設定できます。仮想アドレス空間が最小メモリー状態を下回ると、ディスクへのデータ・ブロックの書き込みが開始されます。データ・ブロックは、使用可能な仮想アドレス空間が使用可能な最小メモリー状態に達するまでディスクに書き込まれます。

しきい値は、パーセンテージか、または Data Flow Service に対する合計ブロック割当ての絶対数のいずれかで指定できます。これは、Oracle BAM Enterprise Link Admin で、「AgentVMMemory」と Enterprise Link のスワップ・ファイルの合計ブロック数として定義されます。ディスクに書き込まれるデータ・ブロックは、一時ファイルに格納されます。

次の構成設定を使用して、Spill-to-Disk の制限を調整します。

- LowBlksValsAbsolute
- LowBlksMaxThreshold
- LowBlksMinThreshold
- MaxSpilledBlocks
- SpillCacheMaxPoll
- SpillCachePercent
- SpillCacheResults

「SpillToDiskTempPath」は、レジストリ設定です。設定値を指定しないと、Spill-to-Disk の一時ファイルは、使用しているマシンの TEMP ディレクトリに作成されます。

Windows NT/2000 ユーザーは、次のパフォーマンス・モニターを使用して、Spill-to-Disk のレベルを監視できます。

- Spillable Index Count
- Blocks Spilled

Spill-to-Disk のいずれかのしきい値に達すると、Data Flow Service ログでエントリが生成されます。これは、Windows および Solaris の両方のユーザーに対して行われます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用した設定の変更

変更可能な設定については、[73 ページの表 6](#) を参照してください。

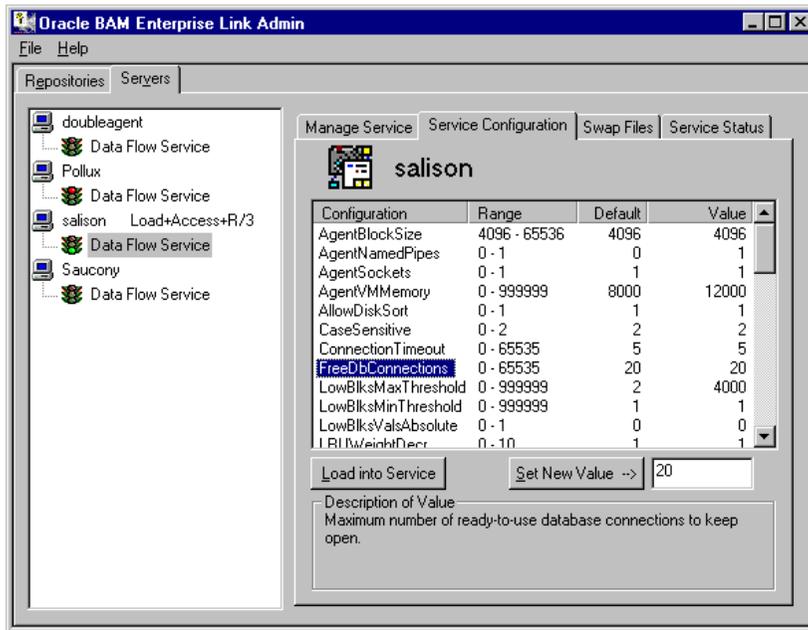
設定を変更するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。
3. 構成するサービスの名前を選択します。

4. 「Service Configuration」 タブを選択します。

構成設定および値は、プロパティ・シートに表示されます。

注意: Solaris ユーザーの場合のみ: 構成設定を表示するには、Enterprise Link デーモンが動作している必要があります。詳細は、61 ページの「Enterprise Link デーモンの起動 (Solaris ユーザーのみ)」を参照してください。



5. 変更する設定の名前を選択します。

設定名がハイライトされ、その現行値が「Set New Value」フィールドに表示されます。この設定のテキストによる説明が、プロパティ・シートの下部に表示されます。

6. 「Set New Value」フィールドに、新しい値を入力します。

7. 「Set New Value」をクリックします。

設定に対する新しい値が、「Value」列に表示されます。

8. 新しい値を今すぐ有効にする場合は、「Load into Service」をクリックします。

新しい値をロードしない場合、その値は次回にサービスが開始されるまで格納されます。

注意: プロトコル設定（「AgentSockets」、「AgentNamedPipes」または「AgentBlockSize」）を変更した場合、変更を適用するには、サービスを再起動する必要があります。

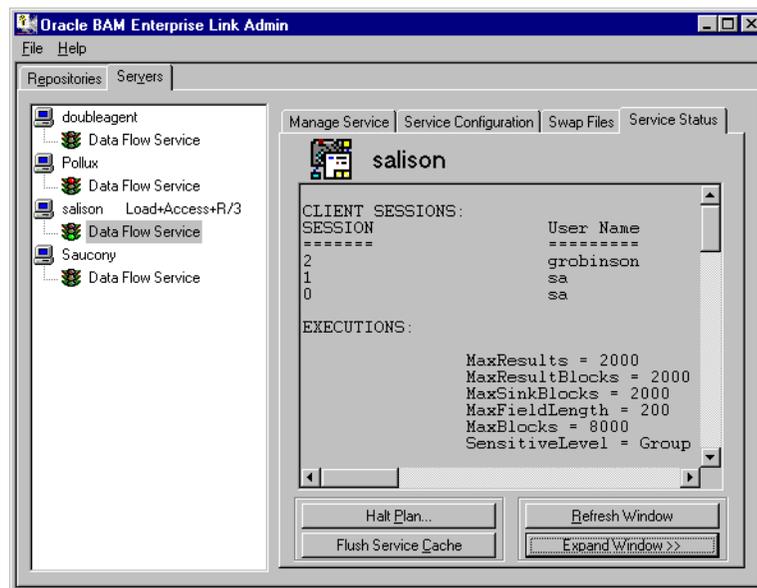
キャッシュのフラッシュ

キャッシュをフラッシュすると、キャッシュから結果セットが削除されます。これは、空きキューの最前部から削除され、低のしきい値に達するまで行われます。低のしきい値は、サービス設定から計算されます。

Data Flow Service のキャッシュをフラッシュするには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. サービスが動作中であることを確認します。
3. 「Servers」タブを選択します。
4. サービスを選択します。
5. 「Service Status」タブを選択します。

「Service Status」プロパティ・シートが表示されます。



6. 「Flush Service Cache」をクリックします。

キャッシュをフラッシュしない場合、キャッシュは、高のしきい値に達すると自動的にフラッシュされます。高のしきい値は、Data Flow Service の設定から計算されます。詳細は、71 ページの「キャッシュのしきい値」を参照してください。

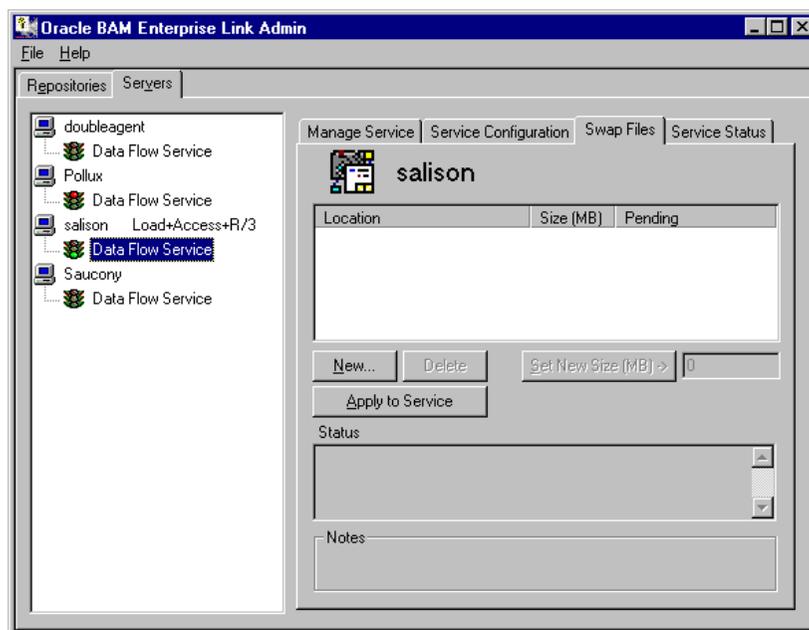
Data Flow Service のスワップ・ファイルの追加

スワップ・ファイルは、サービス用の領域と場所を確保して追加します。スワップ・ファイルは、サービスの動作中に追加できます。そのスワップ・ファイルが作成されるのは、次回にサービスが開始されるときです。

サービスのスワップ・ファイルを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「Servers」 タブをクリックします。
2. サービスを選択します。
3. 「Swap Files」 タブを選択します。

「Swap Files」 プロパティ・シートが表示されます。



4. 「New」 をクリックします。

「New Swap File」 ダイアログ・ボックスが表示されます。



5. ディレクトリの位置 (c:\Enterprise Link\swapfiles など) を入力します。
または、「Browse」をクリックします。
注意:「Browse」ボタンを使用できるのは、NT マシンの場合のみです。
また、サービスがローカル・マシンにある場合は、「Browse」をクリックしてディレクトリの位置を指定することもできます。
6. ファイル・サイズ (MB) を入力します。
デフォルトのサイズは 16MB です。最大サイズは 2000MB です。
7. 「OK」をクリックします。
8. 「Apply to Service」をクリックして、スワップ・ファイルを作成します。

Data Flow Service のスワップ・ファイルのサイズ変更

スワップ・ファイルをサイズ変更することで、割り当てる領域を調整します。スワップ・ファイルは、サービスの動作中に増やすことができます。その他の変更は、サービスが再起動するまで保留されます。

サービスのスワップ・ファイルをサイズ変更するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。
3. サービスを選択します。
4. 「Swap files」タブを選択します。
5. 変更するスワップ・ファイルの位置を選択します。
6. 新しいサイズを入力します。最大サイズは 2000MB です。
7. 「Set New Size」をクリックします。
8. 「Apply to Service」をクリックします。

Data Flow Service のスワップ・ファイルの削除

スワップ・ファイルを削除した後、その変更を有効にするために、サービスを再起動する必要があります。

サービスのスワップ・ファイルを削除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「Servers」タブを選択します。
3. サービスを選択します。
4. 「Swap files」タブを選択します。

5. 削除するスワップ・ファイルを選択します。
6. 「Delete」をクリックします。

スワップ・ファイルのリストア時は、「Delete」ボタンが「Undelete」ボタンになります。

注意： スワップ・ファイルの削除には、必ず Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用します。Windows のエクスプローラやデスクトップから、スワップ・ファイルを削除しないでください。

Data Flow Service の監視

Windows NT/2000 サーバー・マシンで動作している Data Flow Service のパフォーマンスを監視できます。

オブジェクトは、オブジェクト・カウンタを使用して監視します。Data Flow Service に組み込まれたカウンタによって、NT のパフォーマンス・モニターを使用したサービスの監視が可能になります。サーバー・マシンの管理者グループのメンバーであれば、NT のパフォーマンス・モニターを使用して、Data Flow Service を監視できます。Windows NT では、オブジェクトとしてシステム・リソースが識別され、Data Flow Service オブジェクトは Data Flow Service になります。

注意： NT のパフォーマンス・モニターを起動する前に、監視する Data Flow Service が動作していることを確認します。

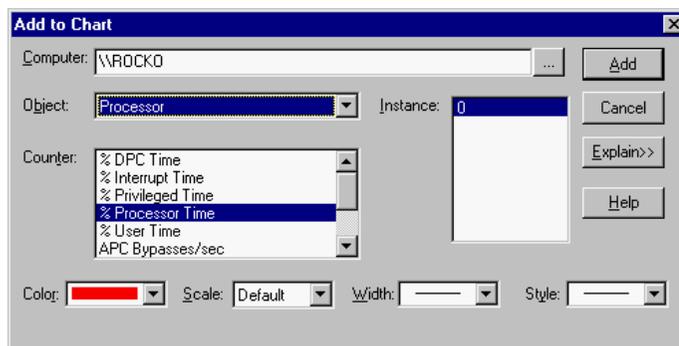
NT のパフォーマンス・モニターを使用して、次の追跡を行います。

- Windows NT Server における NT プロセッサおよびメモリーの使用状況
- Data Flow Service のパフォーマンスおよび使用状況

NT のパフォーマンス・モニターを使用して Data Flow Service を監視するには、次の手順を実行します。

1. 監視する Data Flow Service が動作していることを確認します。
2. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「パフォーマンス モニタ」を選択します。
3. 「編集」→「グラフに追加」を選択します。

「グラフに追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。



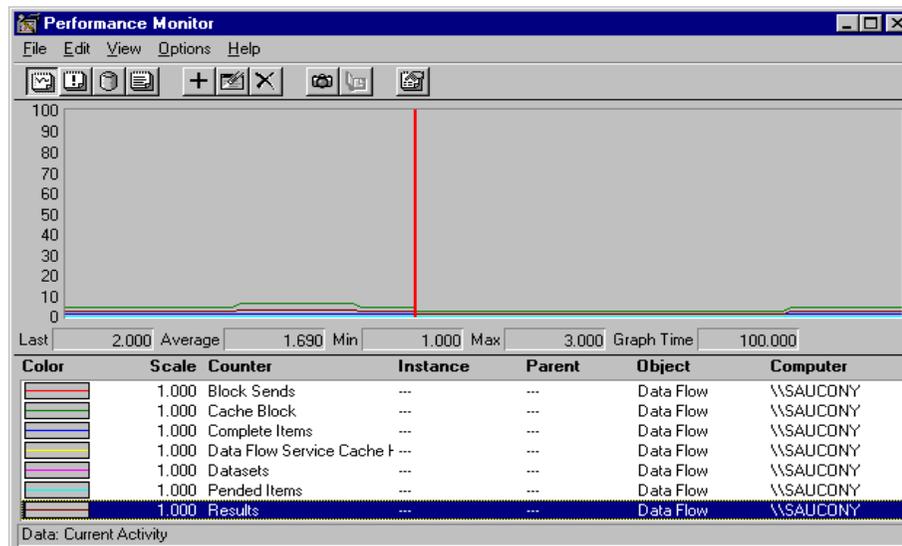
4. Data Flow Service が動作しているマシンの名前を、ドロップダウンから選択するか、またはボタンを使用して検索します。
5. 「オブジェクト」ドロップダウンから、「Data Flow Service」を選択します。

注意 :Data Flow Service がない場合は、「キャンセル」をクリックして、パフォーマンス・モニターを閉じます。コマンド・プロンプトを開きます。Enterprise Link ディレクトリに変更します。インストール時にデフォルトの設定を使用した場合、これは C:\Program Files\Oracle\BAM Enterprise Link です。lodctr perfmon.ini と入力します。

「カウンタ」リストに、Data Flow Service のカウンタが表示されます。

6. 監視するカウンタを1つ以上選択して、「追加」をクリックします。
7. 「完了」をクリックして、「グラフに追加」ダイアログ・ボックスを閉じます。

パフォーマンス・モニターでは、カウンタごとの値が変動しながらグラフィカルに表示されます。



Data Flow Service の次のカウンタを使用して、サービス・パフォーマンスを測定できます。

表 7: Data Flow Service のカウンタ

カウンタ	説明
CacheBlock	Data Flow Service の結果キャッシュに存在しているブロックの数。
DatabaseConnection	データベースの同時接続数。
MemoryBlock	サービスが使用しているメモリー・ブロックの数。
Threads	サービスが使用している同時実行スレッドの数。
UserConnection	サービスが使用しているユーザー接続の数。

表 7: Data Flow Service のカウンタ (続き)

カウンタ	説明
Results	Data Flow Service キャッシュ内の結果の数。
RunningPlans	現在実行中のプランの数。
WaitingPlans	実行を待機しているプランの数。
PendedItems	更新される計算フィールドのうち、保留中のアイテムの数。
InCompleteItems	更新された保留中のアイテムのうち、最終でないアイテムの数。
CompleteItems	更新された保留中のアイテムのうち、最終であるアイテムの数。
TotalItems	CompleteItems と InCompleteItems の合計。
RegisteredBlocks	保留中のアイテムを含むブロックの数。
RegisteredFields	1 つのブロック内の保留中のアイテムの数。
Datasets	内部使用を目的としたデータの論理グループ。
PiggyBackRequests	他のリクエストにアタッチされるリクエストの数。これは、ネットワークの通信量を最小化するために使用されます。
PiggyBackResponses	他のレスポンスにアタッチされるレスポンスの数。これは、ネットワーク通信量を最小化するために使用されます。
DataSetBlockRequests	内部使用を目的とした、データセット・ブロック・リクエストの 1 秒当たりの数。
DataSetBlockResponses	内部使用を目的とした、データセット・ブロック・レスポンスの 1 秒当たりの数。
TotalRequests	すべてのタイプのリクエストの 1 秒当たりの合計数。
TotalResponses	すべてのタイプのレスポンスの 1 秒当たりの合計数。
BlockSends	送信済ブロックの 1 秒当たりの数。
DataFlowServiceCacheHitCount	キャッシュ内のアイテムのヒット数。あるプランが以前に実行されている場合、これは 1 つのキャッシュ・ヒットになります。
DataFlowServiceCacheMissCount	キャッシュ内のアイテムのミス数。あるプランが以前に実行されていない場合、これは 1 つのキャッシュ・ミスになります。

ユーザーおよびセキュリティの管理

この章では、ユーザーとグループの追加、ロールの定義など、Enterprise Linkのセキュリティについて説明します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [ユーザーおよびセキュリティの管理の概要](#)
- [ロールの管理](#)
- [グループの管理](#)
- [ユーザーの管理](#)

ユーザーおよびセキュリティの管理の概要

Oracle BAM Enterprise Link のセキュリティを使用すると、ユーザーごとの権限と MetaView ごとの権限を定義できます。グループおよびグループ権限を定義することで、セキュリティを設定および保持できます。セキュリティの管理には、ユーザーの情報ニーズと組織のセキュリティ・ニーズとの間でバランスが必要です。

Oracle BAM Enterprise Link にセキュリティを適用する前に、次の項目を理解しておく必要があります。

- 新しい BaseView と MetaView にセキュリティを定義するために、データ設計者とどのように連携するか
- どのユーザーが、どの BaseView および MetaView にアクセスする必要があるか
- どのデータが扱いに注意が必要（機密性が高い）か、またどのユーザーがそのデータにアクセスできるか
- ユーザーの接続先のすべてのデータベースのアーキテクチャとセキュリティ・スキーム

Oracle BAM Enterprise Link Admin では、次のセキュリティ機能を管理できます。

- [ロール](#)
- [グループ](#)
- [ユーザー](#)

ロール

ロールは、ユーザーが Oracle BAM Enterprise Link 内で実行できるアクションおよびタスクを定義します。

デフォルトのロールは、次のとおりです。

- [管理者](#)
- [設計者](#)
- [パワー・ユーザー](#)
- [エンド・ユーザー](#)
- [ノービス・ユーザー](#)
- [パブリック](#)

ロールを変更すると、そのロールに割り当てられているすべてのユーザーに影響します。変更が有効になるのは、ユーザーが次回に Oracle BAM Enterprise Link アプリケーションにログインしたときです。

管理者

管理者は最も強力なユーザーであり、デフォルトですべてのロール権限を所有しています。Oracle BAM Enterprise Link 環境を管理するには、読取り / 書込み権限が必要であり、また、サーバー・マシンおよびリポジトリ・データベースが存在するマシンでサービスを開始および停止できる必要があります。

Oracle BAM Enterprise Link 管理者の詳細は、[90 ページの「Enterprise Link 管理者 \(sa\) アカウント」](#)を参照してください。データベース・アクセスの定義の詳細は、[13 ページの「リポジトリ用の空のデータベースの作成」](#)および [108 ページの「データベース・ログインへのユーザー・アカウントのマッピング」](#)を参照してください。

設計者

設計者には、管理者のすべてのロール権限があります。

データ設計者は、Oracle BAM Design Studio を使用して、ユーザーが表示するデータの内容と構造を定義します。設計者は、ソース・データベースからデータを抽出し、それを変換してからデータ・マートにロードします。

管理者は、設計者ロールを変更できますが、設計者は、BaseView、MetaView、プラン、Snap および Transform を作成できる必要があります。

パワー・ユーザー

パワー・ユーザーは、一般的にプログラミングの概念と SQL に関する知識を持つ、Oracle BAM Design Studio の上級ユーザーです。パワー・ユーザーは、データ・フロー・エディタにアクセスでき、設計者が作成できるオブジェクト (BaseView および MetaView を除く) をすべて作成できます。パワー・ユーザーは、情報をどのように取得し、どのように少数のユーザー・グループに配布するかを管理できます。パワー・ユーザーは、他のユーザーをアイテムに自動的にサブスクライブできます。

エンド・ユーザー

エンド・ユーザーは、パワー・ユーザーが作成できるオブジェクト (Transform を除く) をすべて作成できます。このロールを持つユーザーは、他のユーザーをプランまたは Snap に自動的にサブスクライブしたり、Tool Bin、「Tools」メニューまたはデータ・フロー・エディタにアクセスすることはできません。

ノービス・ユーザー

ノービス・ユーザーは、他のユーザーが作成したプランおよび Snap にサブスクライブできます。ノービス・ユーザーは、プランおよび Snap の結果を Excel のスプレッドシートにエクスポートし、Excel で分析タスクおよび計算タスクを実行できます。ノービス・ユーザーは、プランまたは Snap を表示できますが、作成したり編集することはできません。

パブリック

パブリック・ロールには、他のロールに割り当てられていないすべてのユーザーが含まれます。パブリック・ロールは、削除できません。パブリック・ロールには、プランを実行する権限があります。

グループ

グループは、情報ニーズおよびセキュリティ制限が類似している 1 人以上の個々のユーザーの集合です。ユーザー・アカウントの作成時にユーザーをグループに割り当てたり、グループの作成時にユーザーをその新しいグループに割り当てることができます。グループは、ロールより制限的です。各グループには、デフォルトでパブリック・アカウントが含まれています。パブリック・アカウントには、すべてのリポジトリ・ユーザー・アカウントとゲスト・アカウントが含まれています。

注意： パブリック・グループは、削除できません。ユーザーが、現在、同じタイプの 1 つ以上の他のグループのメンバーである場合は、パブリック・グループからそのユーザーを削除できます。

グループには、次のものがあります。

- セキュリティ・グループ
- キャッシュ・グループ
- パブリッシュ / サブスクリプション・グループ

セキュリティ・グループ

セキュリティ・グループは、リポジトリ内の特定の MetaView へのアクセス権を定義します。たとえば、あるセキュリティ・グループに、Marketing という名前の MetaView への読取り権限を所有するユーザーを含めることができます。

キャッシュ・グループ

キャッシュ・グループは、サーバー・マシン上の共有キャッシュ・リソースへのアクセス権を定義します。Data Flow Service では、キャッシュに対して結果を直接格納および取得できるため、キャッシュ・グループはパフォーマンスを向上させます。グループを意識してキャッシュを扱うように Data Flow Service を構成すると、キャッシュ・グループのメンバーが、格納されているオブジェクトおよび問合せ結果をキャッシュから取得できるようになります。

キャッシュ・グループを設定する場合、同じキャッシュ・グループのメンバーについて、次の項目への該当を確認しておくことを強くお勧めします。

- 使用する Data Flow Service が同じである
- セキュリティ制限が完全に同じである
- アクセスが必要なアイテム（プラン、Snap など）が同じである

注意： キャッシュ結果には、キャッシュ・グループのあるメンバーには権限はあるが、他のメンバーには権限がないソース・データベースからの情報を格納できます。

ユーザーをキャッシュ・グループから明示的に削除するか、またはそのグループごと削除すると、ユーザーはパブリック・キャッシュ・グループに自動的に再度割り当てられます。ユーザーは、1 つのキャッシュ・グループにのみ割り当てることができます。

パブリッシュ/サブスクライブ・グループ

パブリッシュ / サブスクライブ・グループは、ユーザー・アカウントの名前付きの集合です。パブリッシュ / サブスクライブ・グループを使用して、事前定義されているユーザー・セットにアイテムをパブリッシュします。たとえば、マーケティング部門のユーザーのグループにプランをパブリッシュする必要があります。これらのユーザーはプランをサブスクライブすると、自動的に更新を受信します。

ユーザー

ユーザー・アカウントによって、Oracle BAM Enterprise Link およびリポジトリへのアクセス権が付与されます。Oracle BAM Enterprise Link のユーザーは、それぞれリポジトリ・ユーザー名とパスワードを所有する必要があります。新しいリポジトリ・ユーザーを作成する方法については、[102 ページの「ユーザーの作成」](#)を参照してください。

ユーザー・アカウントは、Windows クライアントとリポジトリ・データベース間で認証されます。Oracle BAM Enterprise Link 環境では、NT/2000 ドメイン・ユーザーをユーザーとして Oracle BAM Enterprise Link Admin にインポートできます。

注意： NT/2000 ユーザーの場合：作成する Oracle BAM Enterprise Link ユーザー名が NT/2000 ユーザー名と一致する場合は、Oracle BAM Enterprise Link へのログインにのみパスワードが必要になります。

ユーザー・アカウントによって、Oracle BAM Enterprise Link アイテムへのユーザー・アクセス権が付与されますが、ユーザーのリポジトリ・アカウントが有効なデータベース・ログインにマップされていないと、ユーザーはデータベースから情報を取得することはできません。インストール中に指定したリポジトリ・データベース・ログインは、クライアント・マシンのレジストリに格納されるため、リポジトリ・データベース・ログインにユーザー・アカウントをマップする必要はありません。

ソース・データベースおよびターゲット・データベースへのアクセス権は、使用しているデータベースのツールを使用してユーザーに付与する必要があります。

ユーザー・アカウントには、次のものが含まれます。

- [ゲスト・アカウント](#)
- [Enterprise Link 管理者 \(sa\) アカウント](#)
- [ユーザー・アカウントに対する Enterprise Link 管理者権限](#)

ゲスト・アカウント

ゲスト・アカウントは、正式なリポジトリ・ユーザー・アカウントがなくても、一時的な（臨時の）ユーザーが Oracle BAM Enterprise Link にアクセスできるようにするために存在します。Oracle BAM Enterprise Link のゲスト・アカウントは、組み込まれているリポジトリ・アカウントのみであり、デフォルトではパスワードはありません。

注意： インストール直後に、ゲスト・アカウントのパスワードを設定することをお勧めします。

デフォルトでは、ゲスト・ユーザーは **ノービス・ユーザー**・ロールに割り当てられています。ゲストが実行できるのは、他のユーザーが作成したプランまたは **Snap** の表示のみです。また、ゲスト・ユーザーは、パブリックなパブリッシュ / サブスクリプション・グループのメンバーであり、このグループにパブリッシュされるアイテムをサブスクリプションすることもできます。

ゲスト・アカウントの権限は、変更または無効化できます。ゲスト・アカウントの名前を変更したり、ゲスト・アカウントを削除することはできません。

Enterprise Link 管理者 (sa) アカウント

デフォルトでは、Oracle BAM Enterprise Link 管理者 (sa) には Oracle BAM Enterprise Link へのすべてのアクセス権があります。sa アカウントには、**管理者** ロールと、その権限が割り当てられます。Oracle BAM Enterprise Link 管理者ユーザーは、インストール・プログラムによって作成される **Snap MetaView** を所有し、パブリックな **パブリッシュ / サブスクリプション・グループ** のメンバーでもあります。sa アカウントの名前を変更したり、sa アカウントを削除することはできません。

注意： Oracle BAM Enterprise Link のインストール直後に、sa アカウントのパスワードを設定してください。組織のセキュリティ・ニーズに応じて、アクセス権を一部のアイテムに制限できます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin アプリケーションからリポジトリに接続する際、ユーザー名フィールドには sa が自動的に入力されますが、パスワード・フィールドは空白の状態です。

Oracle BAM Enterprise Link 管理者は、Data Flow Service が動作する Windows NT、2000、XP または Solaris サーバー・マシンに対する権限を所有している必要があります。

ユーザー・アカウントに対する Enterprise Link 管理者権限

デフォルトでは、Oracle BAM Enterprise Link Admin にログインできるのは sa アカウントのみです。Oracle BAM Enterprise Link Admin へのアクセス権として、他のユーザー・アカウントを付与できます。Oracle BAM Enterprise Link Admin はユーザーのワークステーションにインストールする必要があり、Oracle BAM Enterprise Link ユーザー・アカウントは管理者ロールのメンバーである必要があります。

Oracle BAM Enterprise Link 管理者権限をユーザー・アカウントに付与するには、次の手順を実行します。

1. 次のレジストリ・キーを追加します。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Sagent¥DataMart¥AD

2. 新しいレジストリ・キーに次の DWORD 値を追加します。

AllowNonSALogins = 1 (または、0 (ゼロ) 以外の任意の値)

管理者権限を所有するユーザーには、sa アカウントのすべての権限がありますが、sa パスワードまたはパスワード設定を変更することはできません。

ロールの管理

ロールは、CEO から管理者、エンド・ユーザーに至るまでのタスクに応じて、ユーザーを分類する場合に役立ちます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin の起動時には、デフォルトのロールが存在します。管理者は、デフォルトのロールを保持して使用したり、ユーザーの能力およびニーズに合わせてカスタマイズしたり、デフォルトのロールを削除して新しいロールを作成できます。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [ロールの作成と割当て](#)
- [ロールの変更](#)
- [ロールの削除](#)

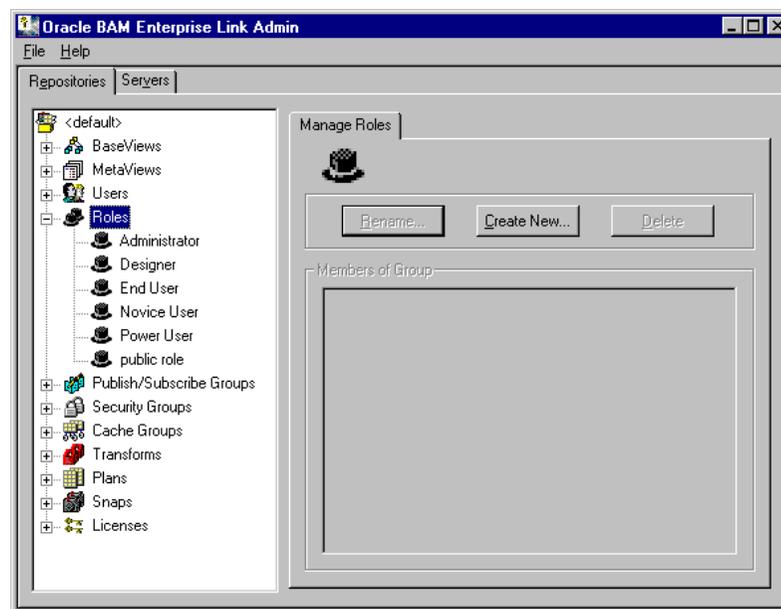
ロールの作成と割当て

ユーザー・アカウントの作成時にロールを作成するか、またはロールの作成時にユーザーをその新しいロールに追加できます。1人のユーザーが所有するロールは1つのみです。

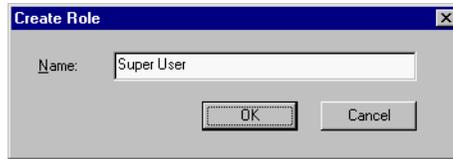
ロールを作成して割り当てるには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Enterprise Link Admin をオープンします。
2. 「**Repositories**」タブを選択します。
3. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Roles**」をダブルクリックします。

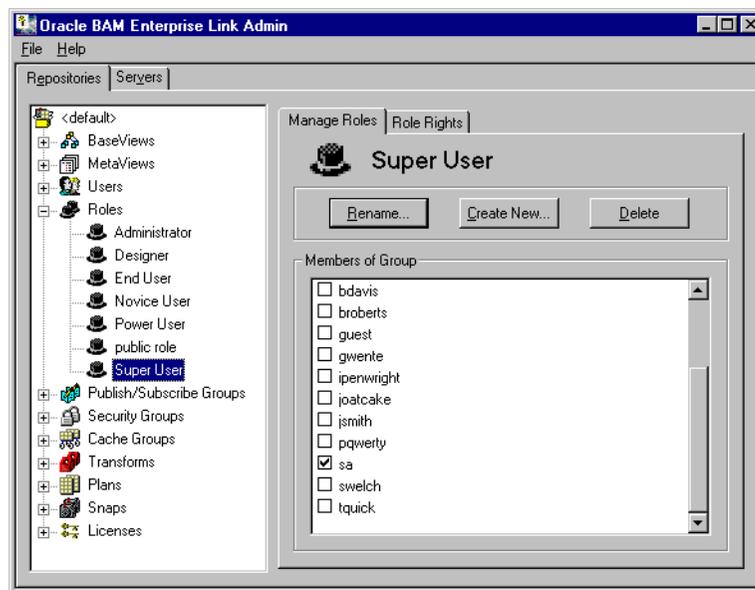
「Manage Roles」が表示されます。



4. 「**Create New**」 をクリックします。
「Create Role」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. ロールの名前を入力します。

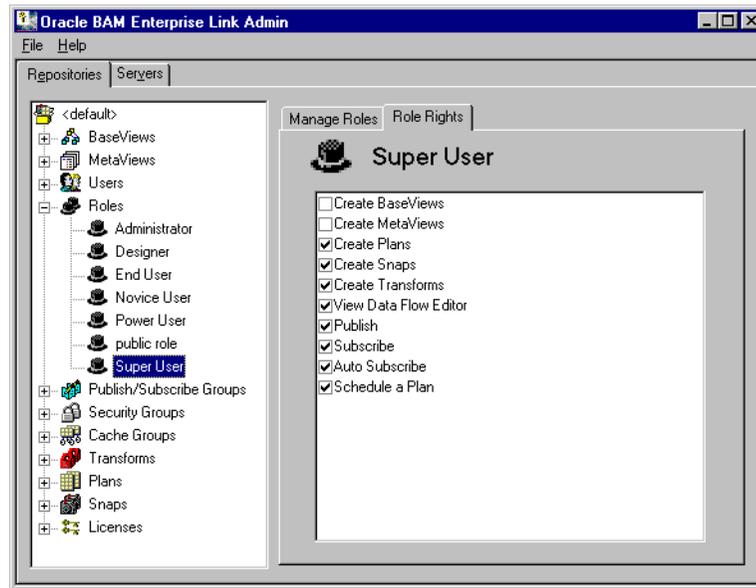


6. 「**OK**」 をクリックします。
7. このロールを割り当てるリポジトリ・ユーザーの横にあるチェック・ボックスをすべて選択します。



8. 「**Role Rights**」 タブを選択します。

9. このロールを所有するユーザーが実行できるアクションの横にあるチェック・ボックスをすべて選択します。



93 ページの表 8 に、割り当てることができるロールの権限とその意味を示します。

表 8: ロールの権限

ロールの権限	ユーザーが可能な作業
Create BaseViews	BaseView の作成または変更。
Create MetaViews	MetaView の作成または変更。
Create Plans	プランの作成または変更と、Plan Bin へのドラッグによる保存。パブリッシュ済プランの保存またはコピー。
Create Snaps	Snap の作成または変更と、Snap Bin へのドラッグによる保存。パブリッシュ済 Snap の保存またはコピー。
Create Transforms	Transform の作成または変更と、Transform の保存。
View Data Flow Editor	プランまたは Snap のためのデータフローエディタの表示。
Publish	ユーザーが所有するプランのパブリッシュ。
Subscribe	他のユーザーによってパブリッシュされたプランのサブスクライブ。
Auto Subscribe	ユーザーが所有するプランへの他のユーザーの自動サブスクライブ。
Schedule a Plan	ユーザーが所有するプランの実行スケジュールの設定と、Snap としてのプランの保存。

ロールの変更

ロールを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Roles**」をダブルクリックします。
3. 変更するロールの名前を選択します。
4. 「**Manage Roles**」または「**Role Rights**」プロパティ・シートで、ユーザーおよびアクション情報を直接変更します。
変更は、ロールに自動的に適用されます。
5. ロールの名前を変更するには、「**Rename**」をクリックします。
「**Rename Role**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. 「**Name**」フィールドに新しい名前を入力します。
7. 「**OK**」をクリックして、変更を適用します。

ロールを変更すると、そのロールに割り当てられているすべてのユーザーに影響します。変更が有効になるのは、ユーザーが次回に **Design Studio** にログインしたときです。

ロールの削除

ロールを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Roles**」をダブルクリックします。
3. 削除するロールの名前を選択します。
4. 「**Manage Roles**」プロパティ・シートで、「**Delete**」をクリックします。

このロールに割り当てられているユーザーが存在する場合は、警告メッセージが表示されます。これらのユーザーは、パブリック・ロールに自動的に割り当てられます。

グループの管理

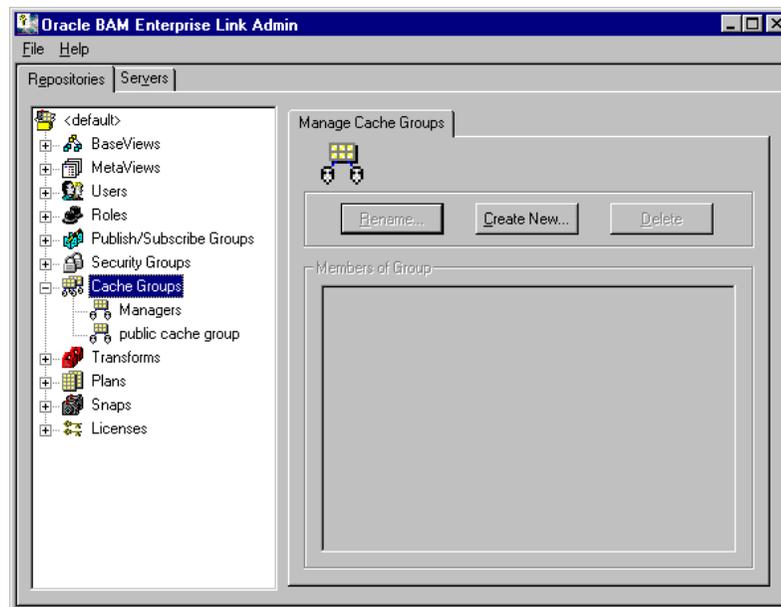
ここで説明する内容は次のとおりです。

- キャッシュ・グループの作成
- キャッシュ・グループの変更
- キャッシュ・グループの削除
- セキュリティ・グループの作成
- セキュリティ・グループの変更
- セキュリティ・グループの削除
- パブリッシュ / サブスクライブ・グループの作成
- パブリッシュ / サブスクライブ・グループの変更
- パブリッシュ / サブスクライブ・グループの削除

キャッシュ・グループの作成

キャッシュ・グループを作成するには、次の手順を実行します。

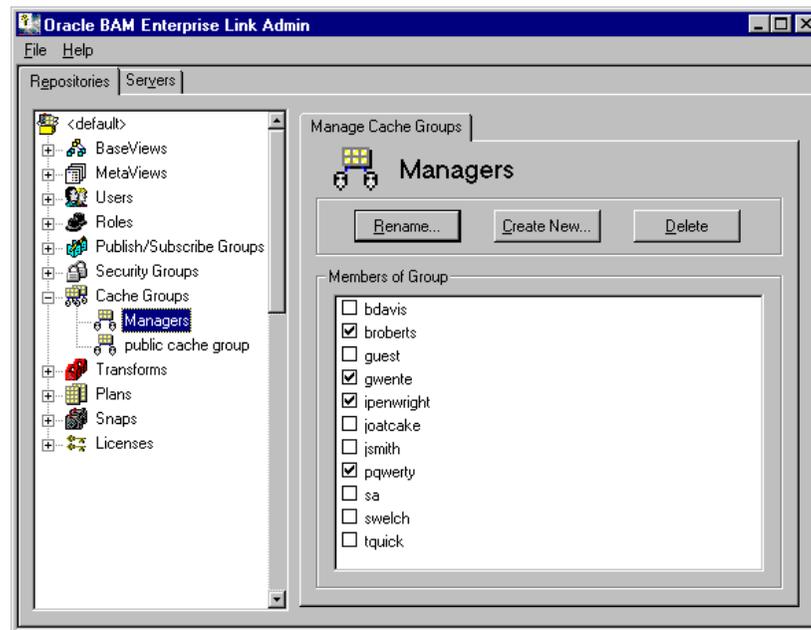
1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Cache Groups**」を選択します。
「**Manage Cache Groups**」が表示されます。



3. 「**Create New**」をクリックします。
「**Create Cache Group**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. グループの名前を入力します。



5. 「**OK**」をクリックして、新しいキャッシュ・グループを作成します。



6. このキャッシュ・グループに割り当てるリポジトリ・ユーザーの横にあるチェック・ボックスをすべて選択します。

キャッシュ・グループの変更

キャッシュ・グループを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Cache Groups**」をダブルクリックします。
3. 変更するキャッシュ・グループの名前を選択します。

4. 「Manage Cache Groups」プロパティ・シートで、グループ・ユーザーを直接変更します。
変更は、キャッシュ・グループにすぐに適用されます。
5. グループの名前を変更するには、「Rename」をクリックします。
6. 「Name」フィールドに新しい名前を入力します。
7. 「OK」をクリックして、変更を適用します。

キャッシュ・グループの削除

キャッシュ・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Cache Groups」をダブルクリックします。
3. 削除するキャッシュ・グループの名前を選択します。
4. 「Manage Cache Groups」プロパティ・シートで、「Delete」をクリックします。

削除されたグループ内のユーザーは、パブリック・キャッシュ・グループに自動的に割り当て直されます。

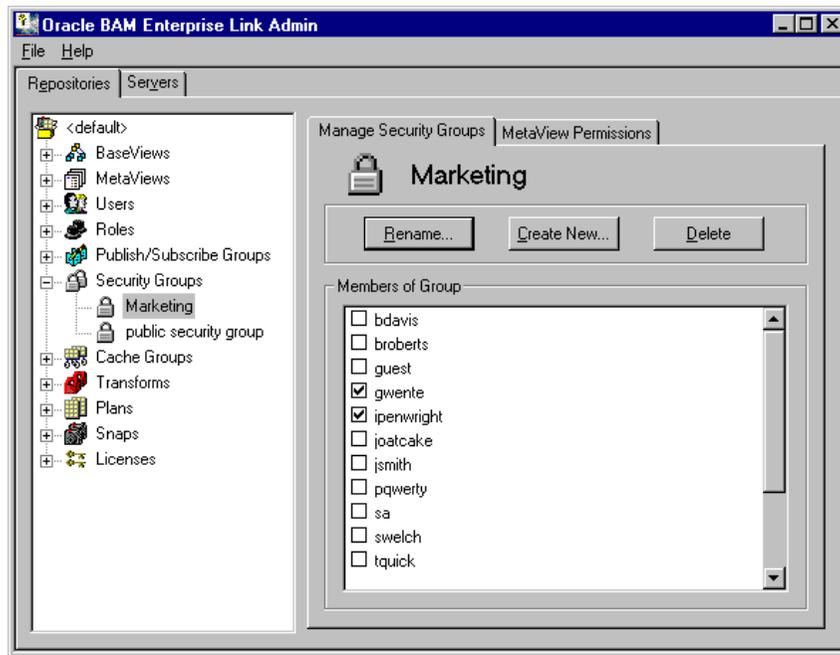
セキュリティ・グループの作成

セキュリティ・グループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Security Groups」を選択します。
「Manage Security Groups」が表示されます。
3. 「Create New」をクリックします。
「Create Security Group」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. グループの名前を入力します。



5. 「OK」 をクリックして、セキュリティ・グループを作成します。



6. このセキュリティ・グループに割り当てるリポジトリ・ユーザーの横にあるチェック・ボックスをすべて選択します。
7. 「MetaView Permissions」 タブで、チェック・ボックスを選択し、既存 MetaView に対する読取り、書込みおよびコピーの権限を定義します。

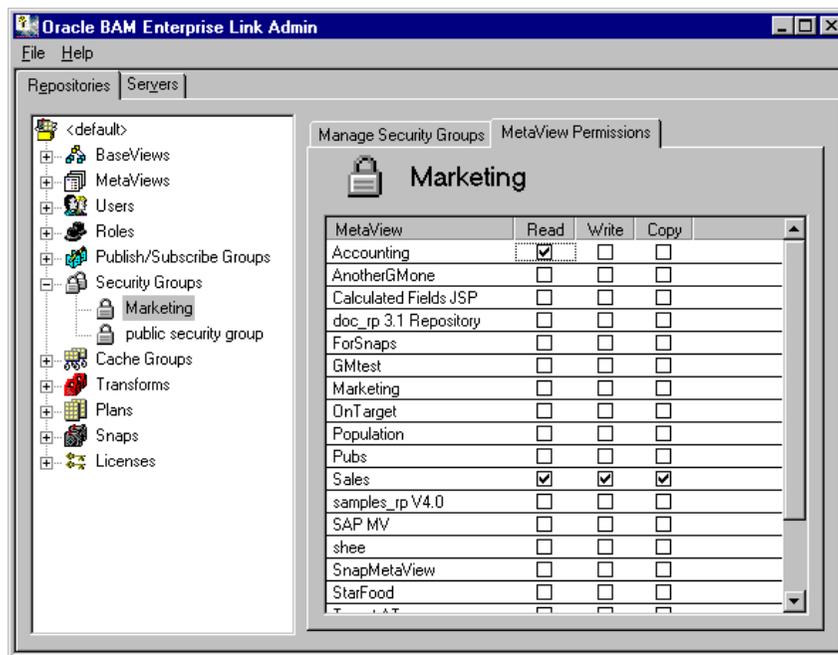


表 9 に、MetaView に対して選択可能な権限と、各権限で許可されるアクションを示します。

表 9: MetaView の権限

権限	ユーザーが可能な作業
Read	MetaView のオープンおよび表示。
Write	MetaView の Part および Category の削除、アイテムの名前変更、プロパティの表示と変更、新しい Part または Category の作成、および変更の保存（自動）。
Copy	MetaView のコピーの新しい名前での保存。

セキュリティ・グループの変更

セキュリティ・グループを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Security Groups**」をダブルクリックします。
3. 変更するセキュリティ・グループの名前を選択します。
4. 「**Manage Security Groups**」プロパティ・シートで、グループ・ユーザーを直接変更します。
変更は、セキュリティ・グループにすぐに適用されます。
5. 「**MetaView Permissions**」タブを選択して、既存 MetaView に対する読取り、書込みおよびコピーの権限を確認します。
6. グループの名前を変更するには、「**Rename**」をクリックします。
7. 「**Name**」フィールドに新しい名前を入力します。
8. 「**OK**」をクリックして、変更を適用します。

セキュリティ・グループの削除

セキュリティ・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Security Groups**」をダブルクリックします。
3. 削除するセキュリティ・グループの名前を選択します。
4. 「**Manage Security Groups**」プロパティ・シートで、「**Delete**」をクリックします。
セキュリティ・グループが削除されます。

セキュリティ・グループを削除した場合に、そのセキュリティ・グループによってアクセス権が付与されているユーザーが **MetaView** にアクセスしていても、ユーザーはアイテムを続けて表示できます。これは、クライアントのキャッシュにアイテムが格納されているためです。グループが削除されると、ユーザーは **MetaView** のリポジトリ・コピーに対する変更を保存できなくなります。

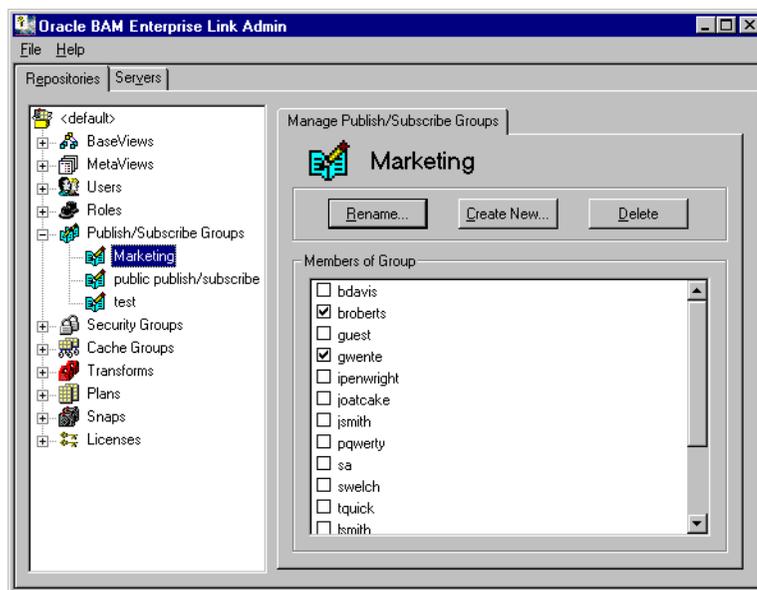
パブリッシュ/サブスクライブ・グループの作成

パブリッシュ/サブスクライブ・グループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」 タブを選択します。
2. 「**Publish/Subscribe Groups**」 をクリックします。
「**Manage Publish/Subscribe Groups**」 が表示されます。
3. 「**Create New**」 をクリックします。
「**Create Publish/Subscribe Group**」 ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. グループの名前を入力します。



5. 「**OK**」 をクリックします。
6. このパブリッシュ/サブスクライブ・グループに割り当てられているリポジトリ・ユーザーの横にあるチェック・ボックスをすべて選択します。



パブリッシュ / サブスクライブ・グループの変更

パブリッシュ / サブスクライブ・グループを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Publish/Subscribe Groups**」をダブルクリックします。
3. 変更するパブリッシュ / サブスクライブ・グループの名前を選択します。
4. 「**Manage Publish/Subscribe Groups**」プロパティ・シートで、グループ・ユーザーを直接変更します。
変更は、パブリッシュ / サブスクライブ・グループにすぐに適用されます。
5. グループの名前を変更するには、「**Rename**」をクリックします。
6. 「**Name**」フィールドに新しい名前を入力します。
7. 「**OK**」をクリックして、変更を適用します。

パブリッシュ / サブスクライブ・グループの削除

パブリッシュ / サブスクライブ・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Publish/Subscribe Groups**」をダブルクリックします。
3. 削除するパブリッシュ / サブスクライブ・グループの名前を選択します。
4. 「**Manage Publish/Subscribe Groups**」プロパティ・シートで、「**Delete**」をクリックします。

パブリッシュ / サブスクライブ・グループを削除すると、グループ定義がリポジトリから削除されます。グループにパブリッシュされていたアイテムは、パブリッシュされなくなり、以前からのメンバーがサブスクライブできるアイテムのリストから削除されます。ただし、既存のサブスクリプションは保持されます。

ユーザーの管理

Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、ユーザーおよびログイン情報を定義します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [ユーザーの作成](#)
- [ユーザー・テンプレートの作成](#)
- [Windows NT/2000 からのユーザーのインポート](#)
- [ユーザー・パスワード属性の設定](#)
- [プランまたは Snap の所有者の変更](#)
- [データベース・ログインへのユーザー・アカウントのマッピング](#)
- [ユーザー・オブジェクトの削除](#)
- [ユーザーの変更](#)
- [ユーザーの削除](#)

ユーザーの作成

Oracle BAM Enterprise Link クライアント・ソフトウェアをインストールするユーザーには、ユーザー名とパスワードを提供する必要があります。Oracle BAM Enterprise Link クライアント・アプリケーションの起動時に、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力する必要があります。

ユーザーのパスワードを空白のままにしておいて、ユーザーが最初にログインする際にパスワードを強制的に変更させるようにすることもできます。詳細は、[106 ページの「ユーザー・パスワード属性の設定」](#)を参照してください。

リポジトリにユーザーを追加するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開き、「**Users**」を選択します。
「**Manage Users**」が表示されます。
3. 「**Create New**」をクリックします。
「**Create User**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. 「Name」フィールドに、ユーザーのリポジトリ・ユーザー名を入力します。

5. 「Full Name」フィールドに、ユーザーのフルネームを入力します（オプション）。
6. ユーザーのパスワードを入力します。次に、確認用のパスワードを入力するか、または「**Disable Confirm Password Edit Control**」チェック・ボックスを選択します。
7. ドロップダウンから属性のコピー元となるユーザー名を選択します。属性には、パスワード属性、およびロールとグループの割当てが含まれます。
8. 「OK」をクリックし、ダイアログ・ボックスを閉じて情報を保存します。ユーザー・アカウントがリポジトリに作成されます。
9. ユーザーのロールおよびグループを選択します。

ロールおよびグループの作成の詳細は、91 ページの「[ロールの管理](#)」および 88 ページの「[キャッシュ・グループ](#)」を参照してください。

ユーザー・テンプレートの作成

新しいユーザーの作成時に、ユーザー・テンプレートまたは無効化したアカウントを作成して、属性をコピーできます。ユーザー・テンプレートには、パスワード属性、およびロールとグループの割当てが含まれます。ユーザー・パスワードは含まれません。

ユーザー・テンプレートを作成するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開き、「**Users**」を選択します。
「**Manage Users**」が表示されます。
3. 「**Create New**」をクリックします。
「**Create User**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. ユーザー・テンプレートとして使用するリポジトリ・ユーザー名を入力します。
5. 「**Full Name**」フィールドに、ユーザーのフルネームを入力します（オプション）。
6. ユーザーのパスワードを入力して、そのパスワードを確認するために再入力するか、または「**Disable Confirm Password Edit Control**」チェック・ボックスを選択します。
7. ドロップダウンから属性のコピー元となるユーザー名を選択します。属性には、パスワード属性、およびロールとグループの割当てが含まれます。
8. 「**OK**」をクリックし、ダイアログ・ボックスを閉じて情報を保存します。
ユーザー・アカウントがリポジトリに作成されます。
9. ユーザーのロールおよびグループを選択します。
10. 「**Passwords**」タブを選択します。
「**Password**」が表示されます。
11. このアカウントをログインに使用できないようにするために、「**Account Disabled**」を選択します。必要に応じて、他のパスワード属性を設定します。このプロパティ・シートの詳細は、[106 ページの「ユーザー・パスワード属性の設定」](#)を参照してください。

新しいユーザーを作成またはインポートする際に、ユーザー・テンプレート・アカウントを選択して、新しいユーザーに属性をコピーします。ユーザーのインポートの詳細は、[105 ページの「Windows NT/2000 からのユーザーのインポート」](#)を参照してください。

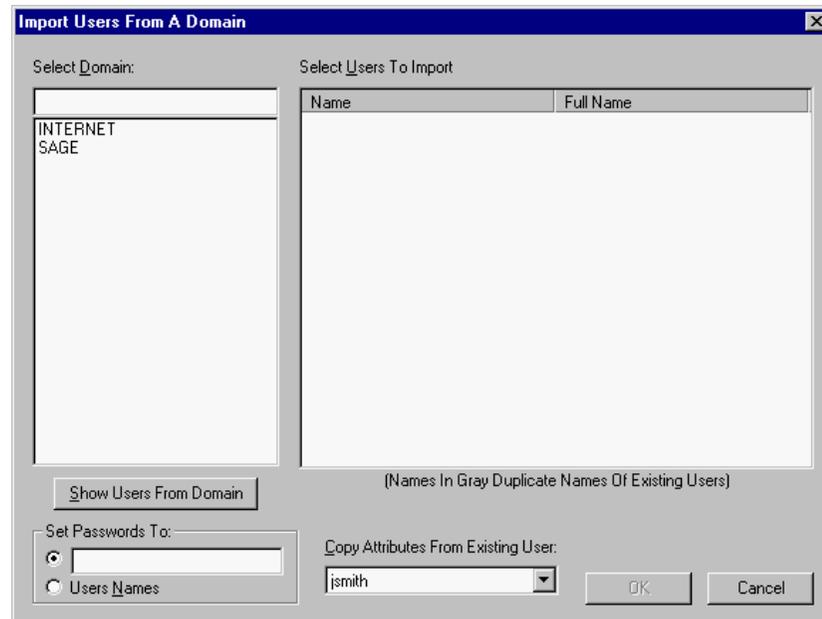
Windows NT/2000 からのユーザーのインポート

ユーザー ID は、Windows NT/2000 ドメインからインポートできます。パスワードは、Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して割り当て直す必要があります。

Windows NT/2000 ドメインからユーザーをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Users」をダブルクリックします。
3. 「Import」をクリックします。

「Import Users from a Domain」ダイアログ・ボックスが表示されます。



4. ユーザーのインポート元となるドメインを選択します。
5. 「Show Users from Domain」をクリックします。
ドメイン内のユーザーのリストが表示されます。
6. インポートするユーザーを選択します。1回に複数のユーザーを選択するには、[Shift] キーまたは [Ctrl] キーを使用します。
7. すべてのパスワードを特定のパスワードに設定するか、またはユーザー名に設定するラジオ・ボタンを選択します。ドメイン・パスワードは、ユーザー ID とともにインポートされません。
8. ドロップダウンから属性のコピー元となるユーザー名を選択します。属性には、パスワード属性、およびロールとグループの割当てが含まれます。
9. 「OK」をクリックします。

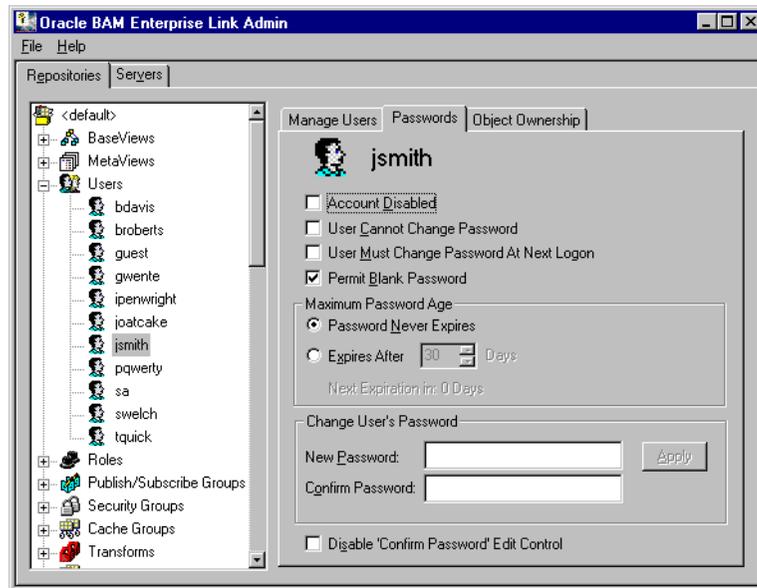
ユーザー・アカウントがリポジトリに作成されます。

ユーザー・パスワード属性の設定

管理者は、ユーザー・パスワードに影響を与える属性を設定できます。これらの属性には、アカウントの無効化、ユーザーに対するパスワード変更の要求、および空白のパスワードの許可が含まれます。属性は、ユーザーごとに設定されます。

ユーザーのパスワード属性を設定するには、次の手順を実行します。

1. 「**Repositories**」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「**Users**」をダブルクリックします。
3. パスワード属性を設定するユーザーの名前を選択します。
4. 「**Passwords**」タブを選択します。
5. パスワードの変更について、属性を定義するチェック・ボックスを選択します。「**User Cannot Change Password**」を選択すると、相反するオプションが無効になります。



6. 期限切れ属性を指定するラジオ・ボタンを選択します。「**Expires After Days**」を選択した場合は、期限が切れるまでの日数を入力します。
7. ユーザー・パスワードを変更し、そのパスワードを確認する場合は、テキスト・フィールドに変更を入力します。
8. パスワードを確認しない場合は、「**Confirm Password Edit Control**」チェック・ボックスを選択します。
9. 「**Apply**」をクリックして、新しいユーザー・パスワードを保存します。他の属性は、すぐに保存されます。

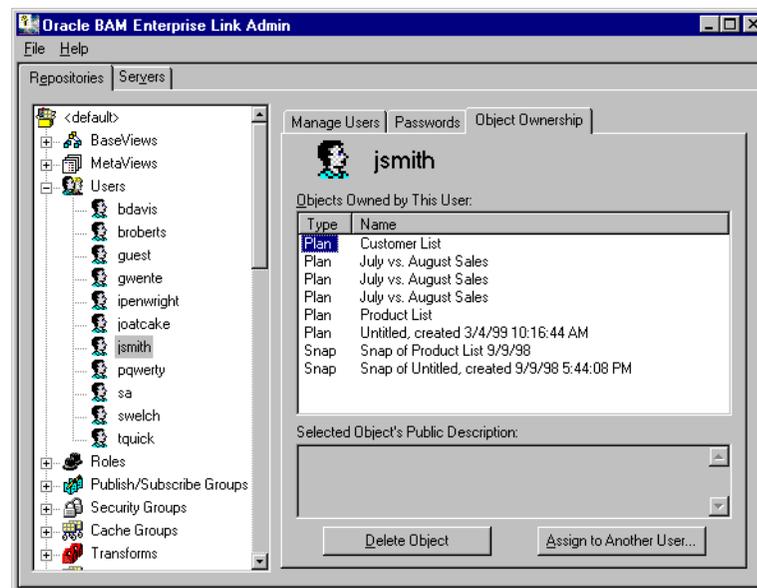
プランまたは Snap の所有者の変更

プランおよび Snap の所有者は、「Manage Users」プロパティ・シートまたは「Manage Plans」と「Manage Snaps」プロパティ・シートを使用して変更できます。

オブジェクトの所有者を変更するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Users」をダブルクリックします。
3. オブジェクトを所有するユーザーの名前を選択します。
4. 「Object Ownership」タブを選択します。

そのユーザーが所有するプランおよび Snap のリストが表示されます。



5. 他のユーザーに割り当てるプランまたは Snap を選択します。
6. 「Assign to Another User」をクリックします。
「Assign Object Ownership」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. リポジトリ内のユーザーを選択して、プランまたは Snap を割り当てます。
8. 「OK」をクリックします。

データベース・ログインへのユーザー・アカウントのマッピング

Oracle BAM Enterprise Link ユーザーがリポジトリ以外のデータベースにアクセスするためには、そのデータベースへの権限がユーザーに付与されている必要があります。

リポジトリ・データベースの外部にあるデータにアクセスするには、次の手順を実行します。

1. データベース・ツールを使用して、データベースのユーザーを定義します。たとえば、Oracle Enterprise Manager を使用して、Oracle データベースのユーザー名とパスワードを定義します。
2. Oracle BAM Enterprise Link Admin を使用して、ユーザーごとに BaseView 情報をデータベース・ログインにマップします。

リポジトリ・アカウントを有効なデータベース・ログインにマップする方法については、[31 ページの「BaseView のログインの設定」](#)を参照してください。

リポジトリ・ユーザーの作成時に、ユーザーのリポジトリ・アカウントをデータベース・ログインにマップしないと、ログインは次のように割り当てられません。

- BaseView がまだ存在していない場合、ユーザーは、データ設計者が BaseView の作成に使用するログインに割り当てられます。
- BaseView がすでに存在している場合、ユーザーは、コピーされたユーザー属性に一致するログインに割り当てられます。

Oracle BAM Enterprise Link Admin のログイン・マッピング機能を使用すると、データベースのセキュリティ・スキームを正確に複製できます。各データベースには、データベース・オブジェクトへのアクセスに制限がないアカウント（system など）が1つ以上あります。他のログインでは、ユーザーに対してデータの表示が制限されます。たとえば、ほとんどのエンド・ユーザーは、企業のデータベースにある給与情報を表示することはできません。制限されたデータベース・ログインにリポジトリ・アカウントをマップすると、そのデータベースのアクセス制限がユーザーに適用されます。

ユーザー・オブジェクトの削除

プランおよび Snap は、「Manage Users」プロパティ・シートまたは「Manage Plans」プロパティ・シートから削除できます。オブジェクトを削除するかわりに、プラン、Snap などのオブジェクトの所有者を変更できます。オブジェクト所有者の変更については、[107 ページの「プランまたは Snap の所有者の変更」](#)を参照してください。

オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。
2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Users」をダブルクリックします。
3. オブジェクトを所有するユーザーの名前を選択します。

4. 「Object Ownership」タブを選択します。

このユーザーが所有するオブジェクトのリストが表示されます。

5. 削除するオブジェクトを選択します。

6. 「Delete Object」をクリックします。

リポジトリからオブジェクトがすぐに削除されます。

ユーザーの変更

ユーザーの変更では、ユーザー名、パスワードまたはフルネームを変更できます。パスワード属性の変更については、[106 ページの「ユーザー・パスワード属性の設定」](#)を参照してください。

リポジトリ・ユーザー名またはパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。

2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Users」をダブルクリックします。

3. 変更するユーザー名を選択します。

4. 「Manage Users」プロパティ・シートで、ロールまたはグループ情報を直接変更します。

5. 「Modify」をクリックして、このユーザーのリポジトリ・ユーザー名、パスワードまたはフルネームを変更します。

6. テキスト・フィールドに変更を入力します。

7. 「OK」をクリックして、変更を適用します。

ユーザーの削除

ユーザーを削除すると、リポジトリからアカウントが削除され、ユーザーの Design Studio へのアクセス権が削除されます。ユーザーを削除する前に、そのユーザーが Oracle BAM Enterprise Link のすべてのクライアント・アプリケーションを終了していることを確認します。また、ユーザーがオブジェクトを所有していない状態にするために、オブジェクトを他のユーザーに割り当てるか、またはオブジェクトを削除します。オブジェクトの削除の詳細は、[108 ページの「ユーザー・オブジェクトの削除」](#)を参照してください。

リポジトリからユーザーを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「Repositories」タブを選択します。

2. リポジトリ・アイテムのリストを開いて、「Users」をクリックします。

3. 削除するユーザーの名前を選択します。

4. 「Delete」をクリックします。

リポジトリからユーザー情報が削除されます。

構成およびチューニング

アクセスするデータベースに応じて設定を追加または変更し、パフォーマンスを向上できます。ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Informix の構成](#)
- [Oracle の構成](#)
- [Microsoft SQL Server の構成](#)
- [Sybase の構成](#)
- [Red Brick の構成](#)
- [ODBC の構成](#)
- [SQL 問合せの最適化](#)
- [National Language Support の構成](#)

Informix の構成

データ・マート・データベースおよびリポジトリとして、Informix がサポートされています。次の操作を実行できます。

- BaseView の作成とプランの実行
- リポジトリの作成
- Save to Table または Command Line Sink Transform を使用したデータ・マートのロード
- StarView および集計ナビゲーション

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Informix データベースの場所の定義](#)
- [Informix におけるロックされた表の構成](#)
- [Informix の BaseView の構成](#)
- [並列データ問合せの構成](#)
- [リポジトリとしての Informix の構成](#)

Informix データベースの場所の定義

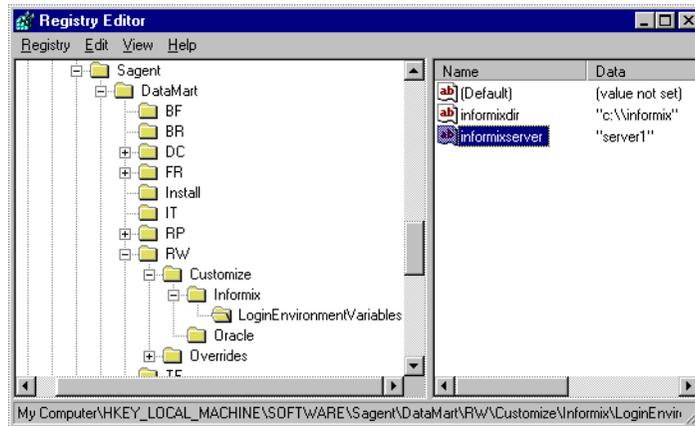
Informix データベースにアクセスするには、Data Flow Service がデータベース・サーバーの場所を特定する必要があります。Data Flow Service を system アカウントで実行すると、Informix ホーム・ディレクトリとデフォルトの Informix サーバーのレジストリ設定を追加できます。

データベースの場所を定義するには、次の手順を実行します。

1. Data Flow Service のマシンでレジストリを開きます。
2. 次のレジストリ・エントリを検索するか、または作成します。
`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\Customize\Informix\LoginEnvironmentVariables`
3. Informix データベースのディレクトリの場所を定義します。たとえば、LoginEnvironmentVariables に次の文字列値を追加します。
`INFORMIXDIR=C:\Informix`

4. Informix データベースのマシンの場所を定義します。たとえば、LoginEnvironmentVariables に次の文字列値を追加します。

```
INFORMIXSERVER=server1
```



5. Data Flow Service に対して他の Informix 変数を設定する場合は、それらを同じレジストリ設定に追加します。

Informix におけるロックされた表の構成

Informix の同じ表に対し複数の参照があるプランを実行すると、ロックされた表がプランのパフォーマンスに影響することがあります。

パフォーマンスを向上させるには、次の手順を実行します。

- 次のレジストリ設定を追加して、Data Flow Service がエラーを戻すまでに表へのアクセスを待機する時間を指定します。これによって、表がロックされない時間が確保されます。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\
Customize\Informix\LockMode
```

設定可能な文字列値は次のとおりです。

-1	待機しません。Data Flow Service がロックされた行をリクエストすると、エラー・コードが戻され、現行の SQL 文が終了します。
0	Data Flow Service がロックされた行をリクエストすると、ロックが解除されるまで待機してから、続行します。これはデフォルトです。
>0	待機時間の上限を設定します。この設定時間内にロックが解除されないと、エラー・コードが戻されます。この値は秒で指定します。推奨値は 30 です。

Informix の BaseView の構成

大規模な Informix データベースの BaseView を作成する際に、表リンクを取得しないことでパフォーマンスを向上できます。

表間のリンクを無視してパフォーマンスを向上させるには、次の手順を実行します。

1. 次のレジストリ設定を追加します。
`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\Customize\Informix\GetTableLinks`
2. 値を N に設定します。

並列データ問合せの構成

Informix のサポートには、並列データ問合せ (PDQ) オプションが含まれています。PDQ サポート用に割り当てるデータベース・サーバーのリソースの量を構成します。

Informix PDQ サポートを構成するには、次の手順を実行します。

1. Data Flow Service マシンにログインします。
2. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロールパネル」 を選択します。
3. 「システム」を開きます。
4. 「環境」タブを選択します。
5. PDQPriority を確認します。
6. PDQPriority 変数がリストにない場合は追加します。
7. PDQPriority に、次の値のいずれかを設定します。
 - default
 - low
 - high
 - 1 ~ 100 (数値はリソースのパーセンテージ)
8. マシンを再起動して、設定を有効にします。

Informix データベース・サーバーにも PDQ 変数が定義されています。この 2 つの PDQ 値は、補完的に機能します。Data Flow Service の値が 50 であれば、Informix データベース・サーバーの値の 50 パーセントは PDQ サポート用に割り当てられます。

ODBC を介して Informix データベースに接続している場合は、次の手順を使用して、Informix データ・ソース用の Data Flow Service マシンで PDQ を有効にします。

1. ODBC Data Source Administrator アプリケーションを起動します。
2. Informix データ・ソースを選択して、「**Configure**」をクリックします。
3. 「Advanced」タブを選択します。
4. 構成設定「Cursor Behavior」がデフォルトの「Close」に設定されていることを確認します。

リポジトリとしての Informix の構成

Informix データベースをリポジトリとして構成する場合は、データベースにロギングが構成されていることを確認します。バッファされるロギングは、最適な選択です。リポジトリ・データベースに対してロギングが構成されていない場合に、クライアント・アプリケーションを介して接続を行うと、次のエラーが表示されます。

```
[VENDORLIB] Vendor Library Error: Transaction not available
SA -- 0x1, RW -- 0x7
```

Oracle の構成

Oracle の構成には、Oracle7 および Oracle8 へのデータベース接続の構成方法についての次の情報が含まれます。

- [Oracle8 のサポート](#)
- [Oracle7 のサポート](#)
- [Oracle 結合情報の取得](#)
- [BaseView に対する Oracle オプティマイザの構成](#)

Oracle8 のサポート

Oracle8 は、データ・マート・データベースおよびリポジトリとしてサポートされます。Oracle8 では、Oracle7 でサポートされるすべての操作がサポートされます。SQL*Loader Transform または Oracle Batch Loader Transform を使用して、Oracle8 データ・マート・データベースにデータをロードします。

パフォーマンスを向上させるには、シリアライズされたコールを使用しないで実行します。Oracle BAM Enterprise Link によって、Oracle のバージョンが検出され、SerializeOciCalls 設定が自動的に設定されます。

Oracle Net8 8.0.4 の場合 :

1. バージョン 8.0.4.4.0 の Oracle パッチ・セットを適用していることを確認します。
2. Data Flow Service マシンのレジストリで次の設定を確認します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\Customize\
Oracle\SerializeOciCalls
```

SerializeOciCalls は DWORD であり、1 に設定する必要があります。

Oracle7 のサポート

Oracle 7.3 を使用している場合、同時に複数のプランを実行すると、パフォーマンスが低下したり、サーバーでタイムアウトが発生することがあります。SerializeOcanCalls 設定を使用して、Oracle ファンクションに対するコールをシリアルライズします。デフォルト (SerializeOcanCalls を設定していない場合) では、コールはシリアルライズされません。

- 次のレジストリ設定を追加して、パフォーマンスを向上させます。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\
Customize\Oracle\SerializeOcanCalls
```

SerializeOcanCalls は DWORD であり、コールをシリアルライズするには 1 に設定する必要があります。

Oracle 結合情報の取得

Oracle データベースから BaseView を作成する場合のパフォーマンスを最適化するために、Oracle BAM Design Studio マシンでレジストリ設定を変更できます。これらの設定によって、結合情報がどのように取得されるかが決定されます。

これらの DWORD 値は、Oracle BAM Design Studio マシンの次のレジストリ・パスにあります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\Datamart\RW\
Overrides\Oracle\
```

表 10: Oracle 結合情報のレジストリ設定

変数	デフォルト値	目的
JoinInfoTablesPerQuery	15	結合情報の取得対象となる表の最小数を指定します。BaseView エディタは、リクエストされたすべての表が取得されるまで、この数の表の結合情報の取得を続行します。
JoinInfoLookupThreshold	30	設定が無視され、すべての結合情報が取得される場合の表の数を決定します。

これらの値によって、パフォーマンスの結果が変動するようになります。その結果は、「Define BaseView」ダイアログ・ボックスで選択した表の数によって異なります。結合を取得する問合せの実行では、多くの時間と、データベース・リソースが必要になります。処理結果を取得するコストと、この問合せを実行する必要がある頻度を考慮する必要があります。選択される表が 30 未満の場合は、デフォルト値を使用します。

BaseView に対する Oracle オプティマイザの構成

Oracle オプティマイザがコストベースに設定されている場合、BaseView の結合情報の特定には時間がかかります。次のレジストリ設定を使用すると、Oracle で使用する必要があるオプティマイザを Oracle BAM Design Studio が指定できるようになります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\
Customize\Oracle\TableLinkSQLHint
```

TableLinkSQLHint は DWORD です。有効な値は次のとおりです。

値	説明
0	デフォルトの動作です。使用する最適化は、Oracle の構成で決定します。
1	ルールベース・オプティマイザ /*+ RULE */ を使用します。
2	コストベース・オプティマイザ /*+ FIRST_ROWS */ を使用します。
3	コストベース・オプティマイザ /*+ ALL_ROWS */ を使用します。

Microsoft SQL Server の構成

この項では、Microsoft SQL Server データベースへの接続を構成する方法について説明します。

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Save to Table の構成](#)
- [プランを実行するための接続の構成](#)

Save to Table の構成

Snap またはプランの結果を表に保存し、さらに、BaseView 用のデータベース・サーバーまたは Data Flow Service マシンのデータベース・クライアントが Microsoft SQL Server 6.0 である場合は、表のロード・プロセスの間にレコードの一部が消失することがあります。これは、Microsoft SQL Server 6.0 の既知の問題です。この問題を回避するために、Microsoft 社では、Data Flow Service が動作するマシンにある BaseView およびクライアント・ライブラリに関連付けられているすべての SQL Server 6.0 データベースを、バージョン 6.5 以上の Microsoft SQL Server にアップグレードすることを推奨しています。

データベース・ソフトウェアをアップグレードできない場合は、次のレジストリ設定を Data Flow Service マシンに追加して、この問題の影響を軽減します。この設定によって、表のロード・パフォーマンスが低下する可能性があります。レジストリ設定は、次のとおりです。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\Datamart\DC
\MaxSaveToTableSQLLength
```

MaxSaveToTableSQLLength は DWORD であり、4096 に設定する必要があります。この値によって、Data Flow Service が表にロードする 1 回分のデータ量が小さくなります。レコードがまだ消失するようであれば、この値をさらに小さくします。値を小さくすると、パフォーマンスが低下します。

BaseView 用のデータベースが Oracle であり、Save to Table Transform を使用する場合は、この DWORD 値データを 10 に設定します。Save to Table Transform を使用しない場合、このレジストリ設定は追加または調整しません。値を小さくすると、パフォーマンスが低下します。

プランを実行するための接続の構成

Microsoft SQL Server では、同時にオープンする接続数はデフォルトで 25 に設定されます。接続数を増やすには、次のレジストリ設定を変更します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW
Customize\MS SQL Server\MaxDbProcs
```

MaxDbProcs は DWORD です。この設定の範囲は、1 ~ 32,000 の 10 進値です。

Sybase の構成

この項では、Sybase データベースへの接続を構成する方法について説明します。ここで説明する内容は次のとおりです。

- [Oracle BAM Enterprise Link で使用するための Sybase 10 の構成](#)
- [プランを実行するための接続の構成](#)

Oracle BAM Enterprise Link で使用するための Sybase 10 の構成

Sybase 10 および Sybase 11 では、異なるバージョンのクライアント・ライブラリを使用します。デフォルトでは、Oracle BAM Enterprise Link インストールは、Sybase 11 とともに動作するように構成されます。

Sybase 10 に適したファイルを設定するには、次の手順を実行します。

1. クライアントおよびサーバー・マシンで、Oracle BAM Enterprise Link プログラム・フォルダ内の次のファイルを特定します。
 - sybload.dll
 - sybload10.dll
 - sarwsyb.dll
 - sarwsyb10.dll
2. sybload.dll の名前を sybload11.dll に変更します。必要に応じて、バックアップ・コピーを作成しておきます。

3. sarwsyb.dll の名前を sarwsyb11.dll に変更します。必要に応じて、バックアップ・コピーを作成しておきます。
4. sybload10.dll の名前を sybload.dll に変更します。
5. sarwsy10b.dll の名前を sarwsyb.dll に変更します。

プランを実行するための接続の構成

Sybase では、同時にオープンできる接続数はデフォルトで 25 に設定されます。プランでは、より多くの接続が必要になる可能性があります。つまり、コマンドラインから多数のプランを同時に実行するには、より多くの接続が必要になる場合があります。

- 次のレジストリ設定を追加して、オープンが許可される接続数を定義します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\RW\
Customize\Sybase SQL Server\MaxDbProcs
```

MaxDbProcs は DWORD です。この設定の範囲は、1 ~ 32,000 の 10 進値です。

Red Brick の構成

Red Brick Batch Loader を使用するには、システム構成に応じて、追加のユーティリティをインストールする必要があります。これらのユーティリティによって、Red Brick がインストールされているシステムと Data Flow Service がインストールされているシステム間の通信が提供されます。ユーティリティは、Denicomp Systems 社の Web サイトから入手できます。

- UNIX システムで Red Brick を実行している場合は、Data Flow Service がインストールされている Windows NT システムに RCP/RSH/REXEC バージョン 2.0 をインストールします。
- Data Flow Service マシン以外の Windows NT システムで Red Brick を実行している場合は、Data Flow Service がインストールされている Windows NT システムに RCP/RSH/REXEC バージョン 2.0 をインストールし、Red Brick がインストールされているシステムに Winsock RSHD/NT バージョン 2.0 をインストールします。
- 同じマシンで Red Brick および Data Flow Service を実行している場合は、追加のユーティリティは必要ありません。

さらに、次のレジストリ設定を追加して、RCP コマンドと RSH コマンド間の遅延を指定します。この設定を指定しないと、制御ファイルは、書き込まれる前にコピーされる可能性があります。

レジストリ設定は、次のとおりです。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sagent\DataMart\TF\
RedBrick_RCPRSHDelay
```

RedBrick_RCPRSHDelay は DWORD であり、2 に設定する必要があります。

ODBC の構成

ここで説明する内容は次のとおりです。

- [ODBC データ・ソースの作成](#)
- [ODBC 接続](#)

ODBC データ・ソースの作成

Oracle BAM Enterprise Link 環境から ODBC を介してデータベースに接続する場合、Data Flow Service マシンの ODBC データ・ソースの名前は、BaseView の作成に使用するマシンのデータ・ソースの名前と完全に一致させる必要があります。

BaseView には、データ・ソースの名前など、データベースへの接続に必要な情報が格納されます。BaseView が基礎となるデータベースに接続するためには、データ・ソース名は Data Flow Service マシンの対応する情報と一致する必要があります。

ODBC データ・ソースが Data Flow Service で確実に使用できるようにするには、Oracle BAM Enterprise Link 環境からユーザーがアクセスするすべてのデータ・ソースが、システム・データ・ソースである必要があります。通常、Data Flow Service サービスはシステム・データ・ソースにアクセスできます。

Informix データベース用の ODBC を構成する場合は、Informix データベースごとに個別の ODBC データ・ソースを作成します。Informix 用の BaseView を定義する場合は、これらの ODBC データ・ソース名を参照します。

ODBC の BaseView の最適化については [36 ページの「BaseView のデータ・ソース構成値の設定」](#) を参照してください。

ODBC 接続

ODBC 接続と BaseView は、次のデータ・ソースに対して作成できます。

- [Microsoft Access データベース](#)
- [Merant \(Intersolv\) テキスト・ファイル](#)
- [Microsoft テキスト・ファイル](#)

Oracle BAM Enterprise Link では、これらの接続に対して基本的なサポートが提供されます。追加の構成およびトラブルシューティングが必要な場合があります。

MS Access、Merant (Intersolv) または MS テキスト・ファイル用に BaseView を作成する場合は、「Define BaseView」ダイアログ・ボックスで、BaseView 名、データ・ソース名、およびログイン名用の任意の文字列のみを指定します。テキスト・ファイルまたは Access ファイルは、Design Studio マシンか、このマシンにマップされているネットワーク・ドライブに存在する必要があります。Design Studio にログインするユーザーは、データベース・ファイルへのアクセス権を所有している必要があります。

データ・ソースを構成するには、ODBC ドライバ・ソフトウェアとともにインストールされている ODBC 管理アプリケーションを使用します。ODBC ドライバ・ソフトウェアは、Oracle BAM Design Studio および Data Flow Service の両方のマシンにインストールする必要があります。データ・ソースは、両方のマシンで作成および構成する必要があります。これら 2 つの場所にあるデータ・ソースの名前は同一である必要があります。詳細は、[120 ページの「ODBC データ・ソースの作成」](#)を参照してください。

Microsoft Access データベース

Microsoft Access データベースへの接続を構成するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Design Studio および Data Flow Service が動作しているマシンに、ODBC ドライバ・ソフトウェアがインストールされていることを確認します。
2. ODBC 管理アプリケーションを起動します。
3. 「システム DSN」をクリックします。
「システム データ ソース」ダイアログ・ボックスに、現在定義されているシステム・データ・ソースのリストが表示されます。
4. 「追加」をクリックします。
データ・ソースを追加するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「Microsoft Access Driver (*.mdb)」を選択して、「OK」をクリックします。
「ODBC Microsoft Access セットアップ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. データ・ソース名を入力するためのフィールドに、ODBC データ・ソースの名前を入力します。この名前は、Data Flow Service マシンの対応するデータ・ソースの名前と完全に一致させる必要があります。
7. 「選択」をクリックし、Access データベース・ファイルの場所を参照します。
8. 「OK」をクリックします。
9. 開いているダイアログ・ボックスをすべて閉じて、アプリケーションを終了します。

Merant (Intersolv) テキスト・ファイル

Merant (Intersolv) テキスト・ファイルには、ファイル拡張子を指定できません。これは、データ・ソースの構成時に表の名前だけを指定するためです。

Intersolv テキスト・ファイルへの接続を構成するには、次の手順を実行します。

1. Oracle BAM Design Studio および Data Flow Service が動作しているマシンに、ODBC ドライバ・ソフトウェアがインストールされていることを確認します。

2. ODBC 管理アプリケーションを起動します。
3. 「システム DSN」をクリックします。

「システム データ ソース」ダイアログ・ボックスに、現在定義されているシステム・データ・ソースのリストが表示されます。
4. 「追加」をクリックします。

データ・ソースを追加するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「INTERSOLV 32-BIT TextFile (*.*)」を選択して、「OK」をクリックします。

「ODBC テキストセットアップ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
6. データ・ソース名を入力するためのフィールドに、ODBC データ・ソースの名前を入力します。

この名前は、Data Flow Service マシンの対応するデータ・ソースの名前と完全に一致させる必要があります。
7. データベース・ディレクトリを指定するフィールドに、Intersolv テキスト・ファイルの場所を入力します。
8. ファイルの 1 行目に列ラベルが含まれる場合は、1 行目が列名であることを示すチェック・ボックスを選択します。
9. 詳細な設定を行うボタンをクリックします。

ODBC テキスト・ドライバの詳細な設定を行うためのダイアログ・ボックスが表示されます。
10. 定義するためのボタンをクリックします。

ファイルを定義するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
11. テキスト・ファイルに移動し、「開く」をクリックします。

表を定義するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
12. BaseView エディタに表示させるとおりに、表の名前を入力します。ファイル拡張子は使用しないでください。
13. ファイルの 1 行目に列ラベルが含まれる場合は、1 行目が列名であることを示すチェック・ボックスを選択します。
14. 列ごとに、次の操作を実行します。
 - 名前を指定するフィールドに、ファイルに存在するとおりに列名を入力します。
 - 列タイプを選択します。
 - 追加するためのボタンをクリックします。
 - 列をすべて追加したら、「OK」をクリックします。
15. 開いているダイアログ・ボックスをすべて閉じて、アプリケーションを終了します。

Microsoft テキスト・ファイル

Microsoft テキスト・データ・ソースを構成する前に、テキスト・ファイルにファイル拡張子がないことを確認します。ファイル名は、このデータ・ソースに対する問合せで表名として使用されます。

Microsoft テキスト・ファイルへの接続を構成するには、次の手順を実行します。

1. ODBC 管理アプリケーションを起動します。
2. ファイルには、ファイル拡張子がないことを確認します。
3. 「システム DSN」をクリックします。
「システム データ ソース」ダイアログ・ボックスに、現在定義されているシステム・データ・ソースのリストが表示されます。
4. 「追加」をクリックします。
データ・ソースを追加するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「Microsoft Text Driver (*.txt, *.csv)」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。
「ODBC テキストセットアップ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 「データソース名」フィールドに、この ODBC データ・ソースの名前を入力します。この名前は、Data Flow Service マシンの対応するデータ・ソースの名前と完全に一致させる必要があります。
8. 「ディレクトリを選択するためのボタン」をクリックし、テキスト・ファイルの場所を参照します。
9. 表の 1 行目に列名を表示するには、1 行目が列名であることを示すチェック・ボックスを選択します。
10. 「オプション」をクリックします。
11. 必要に応じて、「既定 (*.*)」をクリックして選択を解除します。「拡張子の一覧」の各アイテムを選択して、「削除」をクリックします。
12. 「拡張子」フィールドに *. と入力して、「追加」をクリックします。
「拡張子の一覧」にあるエントリは、*. のみになります。
13. 「書式の定義」をクリックします。
テキスト形式を定義するためのダイアログ・ボックスが表示されます。
14. 表の 1 行目として列名を含めるには、「列名の見出し」をクリックします。
15. ドロップダウンからデリミタ書式を選択します。
16. 「推量」をクリックして、ドライバ・ソフトウェアにテキスト・ファイル内の列を解釈させるようにします。デフォルトの列のデータ型は CHAR で、幅は 255 です。異なる指標を使用して、列の定義を変更します。推量されない列を追加および定義します。

17. 「列」リストにすべての列が表示されたら、「OK」をクリックします。
18. 開いているダイアログ・ボックスをすべて閉じて、アプリケーションを終了します。

Microsoft テキスト・ファイルに格納される結合情報は、BaseView に含まれません。BaseView エディタを使用して、Microsoft テキスト・データ・ソース用の結合を追加します。

SQL 問合せの最適化

Part を削除して SQL 問合せを変更した場合は、問合せをリフレッシュして、問合せパフォーマンスを最適化する必要があります。

Part を削除した後に SQL 問合せをリセットするには、次のレジストリ設定を追加します。

```
HKEY_CURRENT_USER\Software\Sagent\DataMart\IS\
ResetJoinsOnPartRemove
```

DWORD 値	説明
1	問合せをリセット
0 (デフォルト)	無効な問合せのみをリセット

National Language Support の構成

デフォルトの言語設定は、ユーザーが選択した言語に基づいて、インストール中に Oracle BAM Enterprise Link によって定義されます。この設定は、次の場所で参照できます。

```
*\Sagent\DataMart\Install\Sagent_NLS
```

注意： Solaris ユーザーの場合、インストール手順によって、言語に米語が設定されます。設定を変更するには、saenvedt ユーティリティを使用します。

値	説明
cp1252	ラテン 1
cp932	日本語
cp936	簡体字中国語
cp950	繁体字中国語
cp949	韓国語

異なるコード・ページを使用する必要がある場合は、次の手順を実行できます。

1. `rwcodepage.cfg` ファイルの場所を特定します。
2. テキスト・エディタで、このファイルを開きます。
3. コメント・タグを削除して、デフォルト値のかわりにファイル内の設定を使用します。

`rwcodepage.cfg` ファイルのサンプルは、[表 11](#) を参照してください。

表 11: `rwcodepage.cfg` のサンプル

```

;*****
*; (c) Copyright 2000, Sagent Technology, Inc.
; FILE: rwcodepage.cfg
; DESCRIPTION:
;Edit this file to override the code page/character set defaults
;coded in the Sagent product.
;
;The format is:
;[database_product]
;key=value
;
; Use a semi-colon at the beginning of a line to signify a comment.
;*****
[Oracle]
;The default character sets for each locale. Delete
;the semi-colon to use the setting in this file instead of the default setting.
;NLS_LANG=KOREAN KOREA.KO16MSWIN949
;NLS_LANG=JAPANESE JAPAN.JA16SJIS
;NLS_LANG=SIMPLIFIED CHINESE CHINA.ZHS16GBK
;NLS_LANG=TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950

[DB2]
;The default character sets for each location. Remove the semi-colon from a
;line beginning DB2CODEPAGE to use the setting in this file instead of the
default setting.
;Korean:
;DB2CODEPAGE=949
;Japanese
;DB2CODEPAGE=5039
;Simplified Chinese
;DB2CODEPAGE=936
;Traditional Chinese
;DB2CODEPAGE=950

;The default character sets for each location. Remove the semi-colon from a
;line beginning CharacterSet to use the setting in this file instead of the
default setting.
[Sybase SQL Server]
;Korean
;CharacterSet=eucksc
;Japanese
;CharacterSet=sjis
;Simplified Chinese
;CharacterSet=eucgb
;Traditional Chinese
;CharacterSet=big5

```


索引

A

AgentBlockSize 73
AgentNamedPipes 73, 78
AgentPort 60
AgentSockets 73, 78
AgentVMMemory 73
AllowDiskSort 73

B

BaseView 18, 30, 86
 Informix の設定 114
 Oracle の設定 117
 Snap 表用の指定 25
 データ・ソース構成の設定 36
 プロパティ 30, 31
 プロパティの表示 30
 プロパティの変更 35
 有効なデータベースのログインの指定 32
 ユーザー・アカウントへのログインのマッ
 ピング 34
 ログイン 32
 ログインの設定 31, 33
BaseView のログインのマッピング 34
BetweenJoinsSupported 36
Bin 12
BlockSends 84

C

CacheBlock 83
Cached Connections 64
Cached Result 64
CancelSupported 36
CaseSensitive 73
CaseSensitiveSort 36
classid 54
Client Sessions 64
CLSID 53
Command Line Sink 112
CompleteItems 84

CompoundSQLMaxLength 36
CompoundSQLPrefix 36
CompoundSQLProcessResults 36
CompoundSQLSeparator 36
CompoundSQLStmtsPerBlock 36
CompoundSQLSuffix 37
CompoundSQLSupported 37
ConcurrentQueriesAllowed 37
ConnectionsAreThreadSafe 37
ConnectionTimeout 73
Copy 43
Current Connections 64

D

DaemonPort 60
Data Flow Service 3, 88, 120
 アーキテクチャの推奨事項 6
 カウンタ 83
 監視 82
 管理 70
 キャッシュ 70
 キャッシュ・グループに対する制限 88
 ステータス 64
 定義 58
 パフォーマンス機能 58
Data Flow Service の監視 82
Database Connections 64
DatabaseConnection 83
DataDictionaryType 37
DataFlowServiceCacheHitCount 84
DataFlowServiceCacheMissCount 84
DataSetBlockRequests 84
DataSetBlockResponses 84
Datasets 84
DB2 14
DBMSName 37
DBMSVersion 37
Denicomp Systems 119
dll-path 54
DriverName 37

E

Enterprise Link Admin
 起動 8
 終了 9
Enterprise Link Admin のオープン 8
Enterprise Link Server 3
Enterprise Link Server の追加 58
Enterprise Link 設計者, 権限 43
Enterprise Link データベース 5
Executions 64

F

FieldNamesAreCaseSensitive 37
FreeDbConnections 74
FROM 句 27
FullOuterJoinsSupported 37

G

GroupbyExpressionsSupported 37
GroupbyPositionSupported 37
GUID 65

H

HKEY_CLASSES_ROOT 54

I

InCompleteItems 84
IndexesSupported 37
Informix 13, 16, 36
 外部結合 38
INFORMIXDIR 112
INFORMIXSERVER 113
Informix¥GetTableLinks 114
Informix¥LockMode 113
Informix¥LoginEnvironmentVariables 112
Informix の設定
 BaseView 114
 プラン 112
 リポジトリ 115
Intersolv テキスト設定 121

J

JoinInfoLookupThreshold 116
JoinInfoTablesPerQuery 116

L

LeftOuterJoinSupported 37
lodctr 83
LowBlksMaxThreshold 74
LowBlksMinThreshold 74

LowBlksValsAbsolute 74
LRUWeightDecr 74

M

Manage Server 59
Manage Service 62
MaxBlocks 74
MaxClients 74
MaxConnections 74
MaxDBConnections 74
MaxDbProcs 118, 119
MaxFieldLength 74
MaxFieldNameLength 37
MaxInClauseItems 37
MaxMemoryBlocks 74
MaxResultAge 74
MaxResultBlocks 74
MaxResults 74
MaxSaveToTableSQLLength 118
MaxSinkBlocks 74
MaxSpilledBlocks 74
MaxStatementLength 38
MaxTableAliasLength 38
MaxTableNameLength 38
MaxThreads 75
MaxUsrConnections 75
MaxUsrDBConnections 75
MaxUsrMemoryBlocks 75
MaxUsrThreads 75
MaxUsrToSysLimit 75
MaxUsrToSysRatio 75
MemoryBlock 83
MetaView 12, 18, 30, 41, 86
 Snap 表用の指定 25
 アクセス 4
 権限 42, 43, 99
 権限の設定 42, 43
 プロパティ 41
 プロパティの表示 41
Microsoft 36
Microsoft Access の設定, データ・ソース構成
 121
Microsoft SQL Server の設定
 Transform 117
 プラン 118
Microsoft テキスト設定, データ・ソース構成
 123
MinBlocks 75
MinResults 75

N

NormBlocks 75
NormSeconds 75
NT ドメイン・ユーザーのインポート 89

NT のパフォーマンス・モニター 82
NT ユーザー名 89
NullsFirst 38, 75

O

ODBC 115
 Informix 120
 Intersolv 120
 アクセス 120
 テキスト・ファイル 120
ODBC 対応の BaseView 36
ODBC の設定, データ・ソース構成 120
Oracle 13, 36
Oracle 7.3 116
Oracle Batch Loader 115
Oracle7 115
Oracle8 115
Oracle 結合 116
Oracle の設定
 BaseView 117
 Transform 115
OuterInFromClause 38
OutputQueueSize 75

P

PDQPriority 114
PendedItems 84
perfmon.ini 83
PiggyBackRequests 84
PiggyBackResponses 84

Q

Query Editor 27
QuotedAliasedFieldName 38
QuotedAliasedTableName 38
QuotedQualifiedFieldName 38
QuotedQualifiedTableName 38

R

Read 43
Red Brick 36
 UNIX 119
 Windows NT 119
Red Brick の設定
 Transform 119
RedBrick_RCPRSHDelay 119
RegisteredBlocks 84
RegisteredFields 84
RepositorySupported 38
ResetJoinsOnPartRemove 124
Results 84
ResultsCaching 75

RightOuterJoinsSupported 38
RunningPlans 84
Runtime CLSID 53

S

sa 9
saad_dmn 61
saconfig.exe, リポジトリの変更 19
sarp_track_plan 47
sarp_track_step 47
sarp_track_table 47
SARPDEL 22
sarwsyb.dll 118
Save to Table 112, 118
SaveToTableSupported 38
Security Level 64
SensitiveLevel 71, 75
SerializeOcanCalls 116
SerializeOciCalls 116
ServerInfoVersion 38
SizeWeight 76
SNAP 27
Snap 5, 18, 58, 70
 監査 47
 削除 50, 108
 所有者の変更 46, 107
 パブリッシュ / サブスクライブ・プロパ
 ティの表示 49
 プロパティ 44
 プロパティの表示 44
Snap BaseView 25
Snap MetaView 25
Snap 表
 BaseView の指定 25
 クリーンアップ 27
 所有権 26
 定義 25
SpillCacheMaxPoll 76
SpillCacheResults 76
SpillToDiskTempPath 76
SQL Server 13, 16, 27, 117
SQL Server 6.0 117
SQL Viewer 27
SQL*Loader 115
SQLConcatenationSupported 38
StarView 112
Sybase 13, 16, 27, 36
Sybase 10 118
Sybase 11 118
Sybase の設定
 プラン 119
sybload.dll 118
SynonymsAreRelevant 38
SystemTablesAreRelevant 38

T

TableDisplayName 38
TableLinkSQLHint 117
TableNameOwnerIsCaseSensitive 38
TableNameOwnerIsRelevant 39
TableNameQualifierIsCaseSensitive 39
TableNameQualifierIsRelevant 39
TableNameTableIsCaseSensitive 39
TCP/IP 59
TCP/IP, サーバー・タスク用に選択 60
Threads 83
TotalItems 84
TotalRequests 84
TotalResponses 84
TransactionsSupported 39
Transform 12, 51
 Microsoft SQL Server の設定 117
 Oracle の設定 115
 Red Brick の設定 119
 削除 55
 作成 52
 登録 52
 プロパティの表示 51
 変更 54
Transform SDK 52
TruncateData 76
TrustedSecuritySupported 39
Type1JoinsSupported 39

U

U/I CLSID 53
U/I クラス ID 51
UnquotedAliasedFieldName 39
UnquotedQualifiedFieldName 39
UnquotedQualifiedTableName 39
User 64
UserConnection 83

V

ViewsAreRelevant 39

W

WaitingPlans 84
Windows NT 119
Write 43

あ

アイテム 8
空きキュー 72
暗号化, パスワード 13

い

意思決定支援 2

え

エンド・ユーザー・ロール, 定義 87

お

オブジェクト権限 4
オブジェクトの所有権, 変更 107
オブジェクト・プロパティ 3
オブティマイザ 117

か

開始
 サーバー 61
 サービス 61
監査
 Snap 47
 プラン 47
監査証跡 27
管理
 セキュリティ 4
 ユーザー 4
管理者ロール, 定義 87

き

起動
 Enterprise Link Admin 8
キャッシュ 6, 7, 12, 58
 アイテムへのアクセス 71
 グループ 88
キャッシュ・グループ 58
 Data Flow Service の制限 88
 削除 97
 作成 95
 定義 88
 変更 96
キャッシュのフラッシュ 79

く

クライアント・ライブラリ 117
クラス ID 51, 52
クリーンアップ, リポジトリ 21
グループ 4, 86
 キャッシュ 88
 セキュリティ 88
 定義 88
パブリッシュ / サブスクライブ 89

け

- ゲスト・アカウント 88, 89
- 結合 124
- 権限 4, 13, 26, 41, 42, 86
 - Data Flow Service のマシン 90
 - Enterprise Link 設計者 43
 - インストールに必須 13, 14

こ

- コントロール パネル 61

さ

- サーバー 3
 - 構成 6
 - 削除 66
 - 手動による開始 61
 - 追加 58, 61
 - 登録 59, 60
 - 登録解除 67
- サーバーの削除 66
- サービス 3
 - 監視 82
 - ステータスの表示 63
 - スワップ・ファイルの追加 80
 - 停止 66
 - パフォーマンス・モニターの使用 82
 - 無効化 67
- サービスの停止 61, 66
- サービスの無効化 67
- 削除
 - Snap 108
 - Transform 55
 - キャッシュ・グループ 97
 - スワップ・ファイル 81
 - セキュリティ・グループ 99
 - パブリッシュ / サブスクリプション・グループ 101
 - プラン 108
 - プランおよび Snap 50
 - ユーザー 109
 - ユーザー・オブジェクト 108
 - リポジトリ 24
 - ロール 94
- 作成
 - BaseView 93
 - MetaView 93
 - Snap 93
 - Transform 52, 93
 - キャッシュ・グループ 95
 - スワップ・ファイル 80
 - セキュリティ・グループ 97
 - パブリッシュ / サブスクリプション・グループ 100

- プラン 93
- ユーザー 102
- ユーザー・テンプレート 104
- ユーザー, NT からインポート 105
- リポジトリ 13
- ロール 91
- サブスクリプション 12, 93

し

- 実行 ID 65
- 自動サブスクリプション 93
- 使用状況の監視 3
- 所有権 13
- シンク 64
- 信頼できる接続 33

す

- スキーマ・バージョン 18
- スケラブル 7
- スケジュール済のプラン 47
- スケジュール, クリーンアップ 21
- ステータス, Data Flow Service の表示 63
- ステップ 64
- スワップ・ファイル
 - 削除 81
 - 追加 80
 - 変更 81

せ

- セキュリティ 5, 6, 42, 71, 86
 - BaseView のログインの設定 31
 - Data Flow Service 7
 - MetaView の権限の設定 42
 - 管理 4
 - グループ 88
- セキュリティ・グループ 43
 - MetaView 権限の割当て 98
 - 削除 99
 - 作成 97
 - 定義 88
 - 変更 99
- 設計者ロール, 権限 87
- 接続 58
- 接続プロパティ 18
- 設定
 - BaseView のデータ・ソース構成 39
 - BaseView のログイン 31
 - MetaView の権限 42
 - ユーザー・パスワード属性 106

そ

- ソース 5

ち

仲介 58, 70

つ

追跡 47
通信 6, 7, 58

て

低のしきい値 79
データ・ソース構成
 Intersolv テキスト設定 121
 Microsoft Access の設定 121
 Microsoft テキスト設定 123
 ODBC の設定 120
 設定 39
 定義 36
データの整合性 36
データ・フロー・エディタ 27, 93
データ・フロー・エディタの表示 93
データベース 5
データベース・クライアント・ライブラリ 5
データベース・ログイン 4
データ・マート 5
デーモン 61
デフォルト
 ユーザー 9
 ユーザー・アカウント 89
 リポジトリ 14
 リポジトリ, プロパティ 14
 ロール 86, 87

と

問合せパフォーマンス 70
同時接続 13
登録
 Transform 52
 サーバー 60
 リポジトリ 2, 14, 15
登録解除
 サーバー 67
 リポジトリ 16
登録済リポジトリ 41

な

名前付きパイプ 59, 60

ね

ネットワーク・プロトコル 58
ネットワーク・プロトコル, サーバー・タスク
 用を選択 60

の

ノビス・ユーザー・ロール, 定義 87

は

パスワード属性
 変更 106
 ユーザー・テンプレートからのコピー 104
パスワード, 暗号化 13
パフォーマンス 21, 36, 70, 116
 問合せ 70
パフォーマンス・モニター 82
パブリック 88
パブリック・キーワード 45
パブリック・キーワード, プランおよび Snap
 の変更 45
パブリック・ディスクリプション 45
パブリック・ディスクリプション, プランおよ
 び Snap の変更 45
パブリック・ロール, 定義 87
パブリッシュ 93
パブリッシュ / サブスクリाइブ・グループ 89
 削除 101
 作成 100
 定義 89
 変更 101
パブリッシュ / サブスクリाइブ・プロパティ 49
パワー・ユーザー・ロール, 定義 87

ひ

表の削除 24
ビルド・バージョン 18

ふ

物理的な表 30
プラン 12, 58
 Informix の設定 112
 Microsoft SQL Server の設定 118
 Sybase の設定 119
 監査 47
 結合のリセット 124
 削除 50, 108
 所有者の変更 46, 107
 スケジュール済 47
 スケジュールの解除 48
 スケジュールの表示 47
 中断 64
 追跡の実行 47
 パブリック・ディスクリプションまたはパ
 ブリック・キーワードの変更 45
 パブリッシュ / サブスクリाइブ・プロパ
 ティの表示 49
 プロパティ 44
 プロパティの表示 44

プランおよび Snap の別のユーザーへの割当て
46, 107

プランのスケジュール 93

プランのスケジュールの解除 48

プランの中断 64

プランの停止 64

プロトコル 78

プロパティ

BaseView 30

MetaView 41

Snap 44, 50

プラン 44, 50

リポジトリ 18

プロパティのスケジュール, プランについて表
示 47

分割化 3

分散 4, 7

へ

並列データ問合せ 114

変更

BaseView のプロパティ 35

Transform 54

キャッシュ・グループ 96

スワップ・ファイル 81

セキュリティ・グループ 99

パスワード属性 106

パブリッシュ / サブスクライブ・グループ
101

プランまたは Snap の所有者 107

ユーザー 109

ロール 94

ほ

ポート番号 61

保存

アイテムをリポジトリに 12

ま

マルチスレッディング 3

め

メタデータ 11, 13, 30

メモリー 71

ゆ

ユーザー

BaseView のログインのマッピング 34

NT ドメインからのインポート 105

管理 4

キャッシュ・グループへの割当て 96

削除 109

作成 102

所有されているオブジェクトの削除 108

セキュリティ・グループへの割当て 98

パスワード属性の設定 106

パブリッシュ / サブスクライブ・グループ
への割当て 100

ユーザー・テンプレートの作成 104

ユーザー名またはパスワードの変更 109

ロールの割当て 92

ユーザー・アカウント 89

ユーザーのインポート 105

ユーザー, デフォルト 9

ら

ライセンス 58

ランタイム・クラス ID 51

り

リポジトリ 5, 12, 89

Informix の設定 115

Windows ユーザー・アカウントの統合 89

アーキテクチャの推奨事項 6

アイテムの表示 17

アカウント 89

管理 2

クリーンアップ 21

構成 6

再作成 17

サイズ 13

削除 24

作成 12, 13

接続 8

デフォルト 14

登録 14, 15, 18

登録解除 16

バックアップ 21

バックアップについての提案 21

表の作成 14

プロパティの表示 18

変更 19

レジストリ設定の変更 18

リポジトリ・クリーンアップのスケジュール設
定 22

リポジトリの管理 2

リポジトリの再作成 17

リポジトリのバックアップ 21

リポジトリの変更 12

リポジトリ表のロード 12

リポジトリへの接続 8

履歴データ 25

れ

- レジストリ 19
- レジストリ構成ファイル 53
 - 例 54
- レジストリ構成ファイルの例 54
- レジストリ設定 36, 112, 116, 118
 - Data Flow Service 77
 - 変更 77
 - リポジトリ 14

ろ

- ロール 4
 - エンド・ユーザー 87
 - 管理者 87
 - 権限の割当て 92
 - 削除 94
 - 作成 91
 - 設計者 87
 - 定義 86
 - デフォルト 86
 - ノービス・ユーザー 87
 - パブリック 87
 - パワー・ユーザー 87
 - 変更 94
- ロールの権限 93
- ログイン
 - BaseView 31
 - データベース 31
- ログ・ファイル 13
- ロックされた表 113